

指示語「コ」「ソ」の文章論的研究

—小説における機能を中心に—

文学研究科博士課程後期課程国文学専攻

2011年度 42113603

張 子如

目 次

序章 目的と背景	1
1. 研究目的	1
2. 研究対象	2
3. 先行研究と問題の所在	3
4. 研究方法	7
第一章 指示語の文脈展開機能	14
1. はじめに	14
2. 先行研究と問題提起	14
3. 指示語の文脈展開機能の定義	15
4. 指示語の文脈展開機能にかかわる四側面	17
5. 後方照応の場合	24
6. まとめ	27
第二章 小説における指示語の文脈展開への関与	
— 「小僧の神様」を例として—	30
1. はじめに	30
2. 先行研究と問題提起	30
3. 「小僧の神様」における指示語	31
4. 各指示用法の文脈展開への関与	38
5. おわりに	39
第三章 指示代名詞「コレ」「ソレ」の持ち込み内容の特徴	41
第一節 「コレ」「ソレ」の持ち込み内容	41
1. はじめに	41
2. 「コレ」「ソレ」の持ち込み方	42
3. 「コレ」「ソレ」の持ち込み内容	43
4. まとめ	52
第二節 語り手の視点と「コレ」「ソレ」	
— 「芋粥」を通して—	55
1. はじめに	55

2. 視点の分類	56
3. 持ち込み内容と視点との関わり	59
4. まとめ	69
第三節 小説の会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」	
一地の文の叙述との関わりを中心に一.....	71
1. 先行研究と問題の所在.....	71
2. 「コレ」「ソレ」と指示の対象物の提示先.....	74
3. 「コレ」の場合	76
4. 「ソレ」の場合	81
5. 「コレ」「ソレ」と前後の文脈との関わり.....	84
6. まとめ.....	85
第四章 指示連体詞「コノ」「ソノ」の後続名詞類の特徴.....	87
第一節 「コノ」「ソノ」の代行指示用法	87
1. 先行研究と問題の所在.....	87
2. 後続名詞類の分類.....	89
3. 後続名詞類と代行指示の「コノ」「ソノ」	90
4. まとめ.....	97
第二節 「コノ」「ソノ」の指定指示用法	100
1. 先行研究と問題の所在.....	100
2. 「コノ」「ソノ」の文脈指示用法の分類.....	101
3. 「コノ」「ソノ」の指定指示用法	105
4. 後続名詞類と「コノ」「ソノ」の言い換えの用法.....	106
5. まとめ.....	114
第五章 指示副詞「コウ」「ソウ」の後続内容の特徴.....	115
第一節 「コウ」「ソウ」の後続内容	
一「コウ」「ソウ」が「発話動詞・思考動詞 + た。」に係る場合一.....	115
1. はじめに	115
2. 「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞の表現形式.....	116
3. 問題の所在	116
4. 「コウ」「ソウ」+「発話・思考動詞 + た。」の後続内容	117

5. 「コウ」のまとめる機能と「ソウ」の継続させる機能	126
6. まとめ	127
第二節 「コウ」「ソウ」の後続内容	
— 「コウ」「ソウ」が「発話動詞・思考動詞 + て」に係る場合—	130
1. 問題の所在	130
2. 「コウ」「ソウ」+「発話・思考動詞 + て」の後続内容	131
3. 「コウ」に見られる場面転換の傾向と「ソウ」に見られる場面継続の傾向	140
4. まとめ	141
終章 結論と課題	144
1. 本研究のまとめ	144
2. 本研究の位置づけ	146
3. 残された課題	148
参考文献	150
資 料	154
初出一覧	164

序章 目的と背景

1. 研究目的

これまでに、指示語の分類や指示範囲に関する研究は数多く行われたが、指示語の文章論的研究は遅れている。言語学の一分野として、文章論は文を越える単位のレベルの問題を扱う。たとえば、文と文のつながり、段落と段落のつながり、ないし文章全体を一つの単位として扱うこともできる。この分野では、指示語は重要な課題として焦点を当てられている。

文章において、指示語は前後の文脈から必要な内容を自らの位置に持ち込み、新しい文脈を完成させる。指示語は、佐久間（2002）が述べたように、「主として内容面から、文章・談話の話題を実質的な意味のつながりとして表現する働き」をしているもので、単純に形式的な文や段落の問題ではない。指示語は前後の文脈から語句レベルの短い内容を持ち込むことも、文章レベルの長い内容を統括して持ち込むことも、できる。具体的な物体や人物を持ち込むことも、抽象的な概念や関係を持ち込むことも、できる。このように、指示語によって、前後の文脈がつながり、文章が展開していくのである。本研究で扱う「コ」系と「ソ」系の指示語では性質と使い方がそもそも異なり、文章においても異なる特徴と機能を担っていることが知られている。そこで、本研究では、指示語の文章論上の特徴と機能を考察し、「コ」系と「ソ」系の指示語の具体的な違いを探る。

本研究の目的は、先行研究を踏まえつつ、指示語の文脈展開機能の概念を規定し、その機能を実現するための側面を明確にすることである。さらに、必要なデータを集め、個々の指示語、すなわち、指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」、指示副詞「コウ」「ソウ」が小説テキストにおいて、それぞれどのような文章論的機能を持つのか、どのようにその機能を果たすのかも明らかにする。小説テキストにおいては、指示語の現場指示や文脈指示をはじめとして、様々な指示用法が用いられており、データが豊富である。また、小説は書き手がそのまま表現主体となる論文などと違い、地の文の語り手の視点の変化によって指示語の使用の基準も変わり、また、地の文と挿入される会話文とでも指示語使用の基準が異なる点において、表現上の特徴が見られる。さらに、地の文においては、「コ」系と「ソ」系の指示語の各用法によって、物語を展開させる機能がある。それ

はつまり、「コ」系と「ソ」系の指示語が小説テキストの形成に大きく関わっていることを意味し、その具体的な様相を解明することは重要な課題である。

これらの考察を通して、小説における「コ」系と「ソ」系の指示語の文章論的機能の違いを明らかにする。

2. 研究対象

本研究では「指示語」という名称を用いる。かつて「コ・ソ・ア・ド」を一括して扱う用語として「代名詞」、「こそあど言葉」と用いられたことがあり、現在では「指示詞」「指示表現」を用いることもよくあるが、文章論の分野においては、「指示語」を用いることが多い。本研究でも、扱う対象範囲が代名詞、連体詞、副詞など品詞区分を跨るため、「指示詞」ではなく、「指示語」を用いることとする。

指示語「コ」「ソ」「ア」の指示用法の分類について、井手（1952）が文章中の先行表現を指示した文脈指示語の使用のしかたについて検討して、「文脈指示の場合」と「現場指示の場合」をはっきり区別して扱って以来、現場指示と文脈指示との二分類が受け入れられ、指示用法の分類においては最も分かりやすい分け方である。一般的に、現場指示とは、発話現場で実際に存在する事物を対象として指示する用法である。文脈指示とは、言語文脈に存在する事物を指示する用法である。

しかし、この二分類に対しては、多くの研究者から疑問視もされており、その中で、堀口（1978a）（1978b）が現場指示、文脈指示、観念指示と絶対指示の四種類（注1）に分けるべきであると主張している。これも現在、指示語研究の分野で広く認められている。

本研究では、指示用法の分類について、主に堀口の四分類に従うが、「ア」系指示語には文脈指示用法がないという立場をとる。本研究の立場を示すならば、次の【表1】のようになる。

【表1 指示用法の分類】

指示用法	指示対象	コ・ソ・ア系列
現場指示	現場（近称・中称・遠称）	コ・ソ・ア
文脈指示	言語文脈（前方・後方照応）	コ・ソ
観念指示	観念に浮かべる遙かなる事物	ア
絶対指示	特定の対象	*「この間」「そのうち」「あの世」等

文章において、前後の文脈と最も深く関わるのは文脈指示である。「ア」系は観念指示で、話し手と聞き手の観念内にある事物を指示する体系であり、文脈に出ていても、語り手の観念内にある事物と関わっているため、純粹の文脈指示とはいえない。この点において「コ」系と「ソ」系の文脈指示とは異なる。本研究では、主に文脈指示の「コ」系と「ソ」系の指示語（以下、指示語全般の呼称を指す場合の「コ」系「ソ」系を「コ」「ソ」と示す）を研究対象とする。具体的にいえば、地の文における文脈指示用法の指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」、指示副詞「コウ」「ソウ」を研究対象とする。また、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」は小説の基盤である地の文の叙述と緊密な関わりを持ち、小説テキストにおける指示語の特徴的な用法であると考えられるため、本研究ではこれも研究対象とする。

3. 先行研究と問題の所在

指示語の研究史という点、佐久間鼎の研究から語り始めるのがほぼ常識となっている。確かに佐久間（1936）によって、代名詞と区別され、「事物や状態を指し示す単語の一群」が「こそあどの指示」の名称で一括され、研究対象として体系的に扱われるようになった。それ以降、指示語の研究が盛んに行われるようになった。

佐久間（1936）以前は指示語の研究に言及することが少ないが、江戸期に「コ・ソ・ア」のそれぞれについて最も詳しく取り上げたのは富士谷（1767）である。里言として、「コ」において「こ」「これ」「これやこの」「これそこの」「この」「こ々」を、「ソ」において「そ」「それ」「その」「そこ」を、「ア」において「あは」を示し、個々の語について述べている。明治期に入り、大槻（1890）がこれらの代名詞に「近称・中称・遠称・不定称」の名称を与えて分類した。大槻（1890）のこの分類を承けつつ、佐久間（1936）（1951）は指示語の体系的な研究を確立した。

佐久間（1936）の研究以後、指示語についての研究が多くなっていくが、主に指示領域、用法分類、文法（狭義的）上の使い分け、第二言語習得などに関する研究であり、文章論的観点からの考察が遅れている。

文章論の分野における指示語の先行研究として、まず文章論を提唱した時枝（1950）の研究が挙げられる。時枝（1950）は「文章の構造的性質は、絵画的建築構図にあるのではなく、思考展開の表現にある」、「このやうな展開を表現するものとして、最も重要な役割を果すのは、接続詞および代名詞である」。また、「代名詞」は「思考展開の表現」であり、

「分裂展開する思想を集約して、これを統合する任務を持つものである」と述べている。時枝の「代名詞」は本研究の指示語に相当する。このように、指示語は文章論的観点において、非常に重要な役割を果たしていることが指摘されている。その指摘を承けて、文章論と指示語との関わりを確かめる研究が多く見られる。その中から、本研究に関連の深いものとして、以下のものを確認しておきたい。

指示語と文章論の関わりを理論的に取り上げた研究として、次のようなものがある。永野（1959）は「何を指示するか」と「指示する語と指示されるものとの位置の関係」から、指示語の「指示のしかた」の型を分類し、指示語の文章における働きを重要視している。さらに、永野（1972）（1986）は「文章における接続・連鎖・統括の観点」（注 2）から、指示語は「接続関係を示す指標となる言語形式」とであると指摘している。

永野（1972）は「文章は、文の連続として成立する。文章を構成する一つ一つの文は、互いに密接に関連し、一定の順序で配列されている。そして、その配列の順序ということに関しては、接続語というものが一つのはたらきをしている」と述べている。接続語とは、「文の接続関係を示す指標となる言語形式を総称する概念」であり、その代表として、「接続語」と「指示語」を挙げている。

のちに、永野（1986）は「接続関係を示す直接の指標となる言語形式」として、「接続語句」「指示語」「助詞・助動詞」「同語反復・言い換え」などを列挙している。これら「文と文の接続関係の指標となる言語形式により、二つの文の連なる（あるいは、一つの文が前の文を受ける）ときの意味の関係」を「展開型」「反対型」「累加型」などいくつかの類型に分けることができると主張している。また、接続関係とは、基本的には文と文との間に適用されるべき概念であるが、實際上、段落と段落との関係に応用することができる。

要するに、指示語は文章の接続関係において重要な言語形式の一種であると主張している。

市川（1978）は文と文とがつながって文脈が形作られていくとする文の接続という観点から文章展開の仕方を述べており、文と文、あるいは節と節との関係を示す種々の形式を体系づけて、三種を挙げている。「a 前後の文（あるいは節）相互を直接、論理的に関係づける形式」として、「接続詞」「接続助詞」などを、「b 前文（あるいは前節）の内容を、後文（後節）の中に持ち込んで、前後を内容的に関係づける形式」として、「指示語」「同一語句」などを、「c その他の形式」として、「特殊な活用形」などを列挙している。また、文脈展開の形態として、「接続詞」「指示語」「接続語句の省略」「繰り返し語句」を挙げて

いる。その中で、bの「文脈の中の事柄をさし示す場合」の「指示語」は、「文脈の展開を考える上では」「重要である」と述べている。そのような指示語は、「(ア) 特定の語句をさし示す場合。(イ) 特定の文の内容をさし示す場合。(ウ) 特定の文集合や段落の内容をさし示す場合。(エ) 文脈から取れる文意をさし示す場合」の四つの場合に分けられると指摘している。「一般に、指示語の多い表現は、文脈への依存度の高い表現であると言える」と述べている。このように、市川（1978）は指示語の文脈展開における重要性を指摘している。

長田（1984）は、市川の研究から示唆を受け、指示語は「どれだけの内容を持ち込んで限定しているか」というところに着目し、指示語を直接「持ち込み詞」と呼び、「持ち込み詞の連文的職能」を指摘している。「連文」とは、意義の繋がりを持った二つ以上の文の連続である。「文の内部を組み立て文を成立させているのが言語の内面的意義であり、「連文において意義の繋がりをつけているもの」も「言語の内面的意義である」という。つまり、言語の内面的意義が連文における意義の繋がりをつけているときの各種の役割を総称して「連文的職能」と名付けている。この「連文的職能」を最も典型的に担う言語形式として、「持ち込み詞」を挙げている。これを踏まえ、長田（1995）は「持ち込み詞「この・その・あの」は「持ち込み機能を発動して、句点を越えて先行文若しくは後続文から意義を持ち込むとき、連文的職能が発動し、連文が成立したことになる」と述べている。このように、市川（1978）と長田（1984）（1995）によって、指示語の持ち込み機能が指摘されているのである。本研究でも、指示語のこの持ち込み機能を認めながら、指示語の小説における文章論的機能を分析していきたい。

上記の研究を踏まえ、高崎（1988）は「指示語」と「後要素」を合わせて「指示語句」と呼び、「文脈展開における“指示語句”の機能」を考察している。「指示語句は、より具体的な意味内容のレベルで前後をつなぐ」と述べ、「文章の展開という面から見れば、指示語句は、前の部分の叙述を、何らかの変形を加えて後に持ちこみ、従属部分として、修飾語や対象語、目的語としたり、新たに捉え直して、題目として後の叙述をひろげていったりする。ここに変容、すなわち“展開”という言語現象が生起している」と指摘している。このように、「指示語＋後続語句」の文脈展開における機能が規定されているのである。

さらに、指示語の文章論的機能を検討し、「文脈展開機能」という用語を提言したのは、佐久間（2002）と馬場（2006）である。

佐久間（2002）は「指示詞」は「文脈展開機能」を発揮し、「主として内容面から、文章・

談話の話題を実質的な意味のつながりとして表現する働きをしており、同時に、文章の全体的構造や段（注 3）のまとまりを情報として作り上げる内的な統括機能を持っている」とまとめている。つまり、「段」の統括という観点から指示語の文脈展開機能を分析し、文章や段において、指示語が意味上、文章や段全体を締めくくる機能があると指摘している。それまで指示語は文と文（節と節/段落と段落）の接続形式と認識されていたが、佐久間（2002）の考察によって、単純の接続の問題ではなく、形式的な文や段落を越え、内容の統括という角度から指示語の機能を認めるようになった。

馬場（2006）は長田（1984）（1995）の「どれだけの内容を持ち込んで限定しているか」という観点を認め、「指示語の持ち込み内容が言語文脈によって提示され蓄積された情報とその情報内部の関連性の上に成り立っていることに注意すべき」と述べている。また、理解過程の立場に立ち、「文脈展開」ということは、「すでに存在する何らかの情報に基づいてあるいはその何らかの情報を前提として、新たな文による情報を提示するということになる」と論じている。「指示語による文脈展開」については、「すでに存在する情報を参照先として探査する指令と、その指令に基づく持ち込み内容の特定、そして、その持ち込み内容と指示語を含む言語的文脈との連結によって成立する」と主張している。

上記の先行研究によって、指示語の研究が文章論において重要な地位を占めることが明らかになった。しかし、指示語の文脈展開機能とはいったいどのような機能であるのか、その機能が具体的にどのように果たされるのかについてはまだ明確に規定されていない。これも本研究の課題の一つである。

一方、個々の指示語について、具体的な作品やデータの分析を通して指示語の文章論的考察を行ったのは林（1972）（1983）と庵（1995）（2007）である。

林（1972）では、「高瀬舟」における「この」「その」の働きと後続名詞類の特徴を中心に、林（1983）では、「夢十夜」における「この」「その」の指示に伴う表現のとらえ直しの現象を中心に、指示語の指示内容と指示のし方について考察した。文脈指示において、代行指示と指定指示に分けられ、代行指示の場合に、「その」のあとに相対関係を示すことばが来るという傾向が見られるが、指定指示の場合に、「この」のあとは先行文脈の反復が多いという現象を指摘した。林（1983）の指摘以後、文脈指示を代行指示と指定指示に二分して考察する立場の研究が増えてきた。

庵（1995）（2007）は文章の結束性（注 4）という観点から、上記の林の研究を踏まえつつ、指定指示と代行指示に分けて文脈指示の「この」と「その」の違いを考察した。指定

指示の場合に、「この」は「トピックとの関連性」という観点から、「その」は「テキスト的意味の付与」という観点から先行詞を捉えていることを示している。代行指示の場合に、単一文中的の場合、後続名詞類が1項名詞(注5)でなければ、代行指示は不可能であり、「この」が使えず、「その」のみ使えたと原理的な説明を与えようとした。以上は、指示語の文章における具体的な機能と特徴を検討したものである。

しかし、これらの考察は、主に指示連体詞「コノ」「ソノ」に注目して行われたもので、指示代名詞「コレ」「ソレ」、特に指示副詞「コウ」「ソウ」についてはほとんど触れていない。また、「コノ」「ソノ」についても不十分なところがある。

以上のように、指示語の文章論的研究は理論的な面のみならず、実証的な面においても進められている。ただし、指示語の文脈展開機能の定義など基本的な概念はいまだ明確にされず、具体的なデータを通して系統的に指示語の文章論的働きを解明しようとする実証的な研究はあまりなされていない。また、上記の文章論的研究では、対象資料の選定が恣意的で広いジャンルに及んでおり、調査対象を絞り込んだ考察はあまり見られない。

要するに、特定のジャンルにおける指示語の文章論的機能の系統的・総合的な研究はまだ触れられていない領域である。そこで、本研究では、これを課題として、小説テキストにおける指示語の文章論的機能を明らかにしたい。

4. 研究方法

4.1 研究課題と手法

上記の問題点を踏まえ、研究目的を達成するため、下記のように資料を収集し、分類作業を行った上、必要なデータを集めて分析し、具体的に検討する。

4.1.1 指示語の文脈展開機能

4.1.1.1 指示語の文脈展開機能とそれにかかわる側面

第一の目的、すなわち、指示語の文脈展開機能の概念を規定し、その機能を実現するための側面を明確にすることは指示語の文章論的研究の基本であるといえよう。そこで、第一章では、指示語の文脈展開機能の定義およびそれを踏まえた研究の着眼点を考察することにする。その文脈展開機能を考察する中心的な課題として、持ち込み内容の分析が非常に重要である。また、「コノ」「ソノ」「コウ」「ソウ」においては、後続語句を加えた分析が必要となる。本研究では、個々の指示代名詞、指示連体詞、指示副詞を検討する際には、

主にこの二つの側面に重点を置いて考察する。

4.1.1.2 各指示用法の指示語の文脈展開への関与

小説の文章において、指示語の文脈指示のみならず、現場指示、観念指示と絶対指示も用いられている。文脈指示はもちろん、ほかの現場指示、観念指示、絶対指示もその文章（先行部分か後続部分）の文字言語からその持ち込み内容を探ることができる。ただし、指示語の持ち込み内容は、その文章の文字言語にあるか、または文字言語の提示によって、読み手の背景知識（文化、経験）を導入し、作られた観念の場にあるかである。いずれにせよ、これらは文字言語と関わっていると考えられる。そこで、第二章では、志賀直哉の小説「小僧の神様」における指示語の分析を通して、これら四種類の指示用法がそれぞれ文脈展開に関与しているのか、どのように関与しているのかを明らかにする。

4.1.2 個々の指示語の機能の検討

本研究の第二の目的、すなわち、実証的な考察を通して、小説テキストにおける個々の指示語の文章論的機能を解明するために、指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」、指示副詞「コウ」「ソウ」をそれぞれ具体的に検討する。第三章第一節では、「コレ」「ソレ」について、代名詞であるため、その文脈展開機能の中心的な課題である持ち込み内容の点から考察する。それに対して、「コノ」「ソノ」は連体詞であり、後続名詞類（後続語句）と結合してから指示対象が明確になり、また、後続名詞類によって、持ち込み内容が規定されるため、後続名詞類が極めて重要である。そこで、第四章では、後続名詞類を中心に考察する。また、副詞「コウ」「ソウ」は修飾する動詞の性質によって用法が異なる。本研究では、第五章では、発話・思考動詞を修飾し、発話・思考の内容を表す場合の「コウ」「ソウ」を取り上げ、その後続内容を中心に考察する。

4.1.2.1 指示代名詞「コレ」「ソレ」の持ち込み内容

まず、第三章第一節では、「コレ」「ソレ」については、持ち込み内容の特徴から違いを考察する。「清兵衛と瓢箪」という小説において、「ソレ」の指示対象には具体的な物体を持ち込む例が圧倒的に多く見られるのに対して、「コレ」の指示対象には物体がなく、事態・発話内容のみある。このような「清兵衛と瓢箪」における「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容の傾向はどの程度一般的に見られるのか検討するために、持ち込み内容をカテゴリーによって、「人物」「物体」「行為・心情」「事態・様相」「発話等の内容」「その他」の六種類に分ける。さらに、各カテゴリーにおいて持ち込み内容の言語単位の長さを語句、節、

文、連文の四種類に分けて分析する。それらの分類に沿って、ほかの 20 編の小説を検討してみる。これらの考察によって持ち込み内容のカテゴリーとその言語単位との関わりを明らかにし、「コレ」「ソレ」の持ち込み内容の相違も明らかにすることができると考えられる。

4.1.2.2 「コノ」「ソノ」の指示用法と後続名詞類

次に、「コノ」「ソノ」について、指示連体詞であるため、後続名詞類と結合してから一つの指示表現として機能するため、その後続名詞類を考察するのは非常に重要である。そこで、第四章では、後続名詞類との関わりという観点から「コノ」と「ソノ」を代行指示と指定指示に分けて考察する。林（1972）（1984）と庵（1995）（2007）の先行研究を踏まえながら、さらに範囲を広げて代行指示の後続名詞類の傾向を把握する。具体的には、小説の地の文における文脈指示の「コノ」「ソノ」を対象とし、後続名詞類の意味のカテゴリーを「人物」「物体」「人間行動」「事態・様相」「時間」「場所」「抽象的名詞」の七種類に分類した上で「コノ」と「ソノ」の文脈展開における機能の違いを考察する。

まず、第一節では、代行指示の場合に、(1) どんなカテゴリーが代行指示になりやすいか、(2) そのカテゴリーにおいて「コノ」「ソノ」は文脈展開上にどんな役割を果たしているかについて詳しく考察する。これらの考察によって、代行指示の「コノ」「ソノ」が後続名詞類との関わりにおいて、相違が明確にすることができる。

一方、第二節では、指定指示の場合に、先行研究は指定指示の細かな用法について統一した基準がないため、統一した観点で、「コノ」「ソノ」の指定指示用法を考察する。また、後続名詞類のカテゴリーが異なると、指定指示用法も異なる可能性があるため、「コノ」「ソノ」の後続名詞類との関わりも考察する。そこで、第一、指定指示を反復と言い換えに二分し、さらに言い換えてまた「上位型の言い換え」、「内包型の言い換え」、「ラベル貼りの言い換え」、「類義型の言い換え」と「カテゴリーの転換」の五種類に分ける。その分類を通して、「コノ」「ソノ」の指示方法の違いを、またそれらと後続名詞類との関わりの違いを明らかにすることが有効であると考えられる。

4.1.2.3 「コウ」「ソウ」の後続内容

最後に、第五章では、「コウ」「ソウ」について、特に多く見られる発話・思考動詞が後続する場合を対象として、「た。」形で文が終止する場合と「て」形で文が続く場合を取り上げて考察する。

第一節では、「た。」の場合に、後続一文と発話・思考動詞「た。」との内容上の緊密性に

よって、後続一文の内容を「I 同じ場面が続く場合」と「II 別の場面が変わる場合」に二分し、また「I」の下位分類として、「発話・思考内容の説明」「行動主体の発話・思考の続き」「行動主体のその他の行動」「他者の反応行動」「行動主体の状態」「他者の状態」の六種に分けている。これらの分類のもとに、「コウ」と「ソウ」が文脈展開上におけるまとめる機能の相違点を明らかにすることができる。

また、第二節では、「て」の場合に、「て」以後文末までの内容と先行の発話・思考の場面との場面転換について考察するが、それもまた「て」の後続内容を分類して検討する。「た。」の場合の基準に従うが、「て」の場合の特殊性を考え、「発話・思考の説明」「発話・思考の続き」「別の行動」「移動行動」の四種に分けて、先行の発話・思考の場面との転換性という角度から、「コウ」と「ソウ」の違いを考察する。この考察によって「て」形で文が続く場合の「コウ」と「ソウ」の違いを明らかにすることができる。また、前述の「た。」で文を終止する場合の「コウ」と「ソウ」の機能と一致するかも重要な観点である。

4.1.3 指示語と小説ジャンル

本研究の第三の目的として、小説ジャンル特有の問題として、語り手の視点と指示語使用との関わり、また小説の基盤である地の文の叙述と会話文における現場指示との関わりという二つの点から、第三章第二節・第三節では、「コ」と「ソ」の違いを検討する。これについては、指示代名詞「コレ」「ソレ」が分かりやすく、後続語句などの問題もなく、しかも小説に用いられる数量も多いため、「コレ」「ソレ」を典型的な例として取り上げる。

4.1.3.1 語り手の視点と「コレ」「ソレ」

小説は書き手がそのまま表現主体となる論文などと違い、書き手が生み出した語り手の視点で登場人物や事物を見ている点に特徴がある。筆者にとって、小説テキストにおける指示語の役割を考察することを大きな課題としている。その一環として、第三章第二節では、芥川龍之介の「芋粥」を題材として、「コレ」「ソレ」を取り上げ、視点との関わりや持ち込み内容の点から、小説テキストにおける使用の特徴を明らかにする。まず、視点を「I 語りの場にある」場合と「II 物語世界にある場合」に二分し、その下位項目として総計六種類（「I①物語世界を現場的あるいは主観的に捉えた場合」「I②物語世界を概括的あるいは客観的に捉えた場合」「II③a 人物の身近に視点を置いて継起的動作を描写する場合」「II③b 人物の視点に共感する内容を描写する場合」「II④a 事件を大きく進める動作を

描写する場合」「II④b 事件に関わる事項を解説・説明する場合」)に分類する。そらの分類のもとに「コレ」「ソレ」の持ち込み内容を「人物」「物体」「行為・心情」「事態・様相」「発話等の内容」「その他」の六種類のカテゴリーに分けて、「コレ」「ソレ」と語り手の視点との関わりを考察する。

4.1.3.2 会話文における現場指示と地の文の叙述

これまで会話文における現場指示について、ほとんど研究されていない。本研究では、第三章第三節では、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」を取り上げ、その対象物が提示されている文脈の位置（提示先）を考察する。具体的には、会話文における現場指示の対象物について、提示先を①先行の地の文、②後続の地の文、③先行の会話文、④当会話文、⑤後続の会話文、⑥提示なしという六種類の場合に分けて検討する。「コレ」「ソレ」の対象物の提示先ごとに具体的に対象物・話し手・聞き手に関する叙述を分析し、両者の前後の文脈との関わりについて考察する。この考察によって、会話文における現場指示の「コレ」と「ソレ」の違い、「コレ」「ソレ」についての地の文の叙述における違いを明らかにすることができる。

上記のように、「コレ」「ソレ」の持ち込み内容、「コノ」「ソノ」の後続名詞類、「コウ」「ソウ」の後続内容、また小説特有の語り手の視点と指示語の使用との関わり、会話文の現場指示と地の文の叙述との関わりなどについて、分類と考察を行う。これらの分類は、指示語「コ」と「ソ」の文脈展開上のさまざまな関係を解明するために有効な手法になる。

4.2 使用資料

本研究では近現代の小説の文章を資料とし、日本人に親しまれて読みやすい文庫本の小説を利用する。具体的には、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』に収録された小説を主な資料として、データを集める。その100冊の中には、随筆や詩、外国小説の日本語訳による小説と日本人による小説もあるが、本研究で取り上げるのは日本人による小説のみである（作品の詳細は pp. 162-163 の【資料9】を参照）。

先行研究と問題の所在で既に述べたように、これまで、指示語研究において、小説ジャンルのテキストを特定の対象とした研究はほとんど見られない。現代語の小説テキストは、指示語の使用量が多く、しかも使い方が多様である。物語の展開を形成する機能をはじめ、指示語と小説ジャンル特有の語り手の視点との関わりや、会話文における現場指示と地の

文の叙述との関わりを考察するのも適切なテキストであると考えられる。

使用資料の新潮文庫本は流布本であり、原作の表記と変わっている部分もあるが、「コ」「ソ」の用法を考察することには支障がないと考えられる。また、本研究で利用する小説は、時代的には大正初期の1913年（「清兵衛と瓢箪」）から昭和後期の1981年（「女社長に乾杯」）までである。章節の課題に応じて、三人称小説も一人称小説も対象とする場合があるが、語り手の視点と「コレ」「ソレ」の使用との関わりを考察する際には、三人称小説のみを用いる場合もある。

なお、考察の必要に応じて、長編小説を含めない場合もあるが、それは指示語の指示範囲が分かりにくいためである。しかし、指示副詞「コウ」「ソウ」、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」の用例を収集するような場合には、長編小説を取り入れることもある。また、各考察を行う際、作家の個人差を避けるため、一人の作家は2編以内の小説を調査範囲とするが、長編小説の場合は1編のみにする。

【注】

- (1) 堀口（1978a）（1978b）の分類によると、現場指示とは、対話・講演など同一空間を話し手と聞き手が共有する場面において、話し手が、現実にも両者に知覚できるとする存在対象を、指示語「コ・ソ・ア」を用いて表現するものを言う。文脈指示とは、相手または自分の表現内容にある素材をその対象として指示する用法である。観念指示とは、話し手の観念内であって、実際に知覚不能の概念や過去の記憶や想像などの対象を指示する用法である。絶対指示とは、「この間」「そのうち」「あの世」のような時間や場所を表すもので、文脈と関わらず常に絶対的に特定の対象を指示する用法である。
- (2) 永野（1986）は接続論によって文脈展開の流れをたどり、連鎖論によって全体の結構を把握し、統括論によって文章としての統一と完結とを最終的に確かめると言っている。「文章は文の連続として成り立ち、文脈を保ちつつ展開していくものである。文脈とは、最初の文から次の文へ、さらに次の文へという、隣りどうしの文の意味の関係である。その隣り合った二個の文の連続の関係を接続関係という」。「文の連鎖というのは、文の連続における一つ一つの文を鎖の輪に見立てて、文が鎖状に連なることによって文章が成り立つ、とする見方である」。「文章の統括というのはある文がある文（または文の群）を統括し、さらにある段落（場合によっては大段落としての段落群）が、他の段落を、そして最終的にはすべての段落を統括するということなのである」としている。

- (3) 佐久間 (2002) は「段」とは、「内容上一つの話題のまとまりを表し、他と相対的に区分される意味のつながりとまとまりの複数の文の集合統一体である」と述べ、また、「段は文と文章の間の中間的な言語単位で、文章論の分野で扱うものである」と指摘している。
- (4) 庵 (2007) は「結束性」について、「ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包している時、その文は先行/後続する文(連続)に解釈を依存しており、そのことによってその文連続は全体でテキストを構成する場合、その文連鎖は「結束性」が存在する」と述べている。
- (5) 庵 (2007) は「1 項名詞」について、「著書」「作者」のように内部に「誰の」「何の」を「統語的」な「項」として取るもので、「相対名詞を包含する概念」とであると説明している。

第一章 指示語の文脈展開機能

1. はじめに

指示語は談話・文章において非常に重要な役割を果たしている。指示語によって文や段落相互が関係し合い、文章は構成されている。したがって、指示語は文章構造を明らかにするために重要な観点の一つであるといえる。

これまで指示語の分類や指示範囲について研究が数多く行われたが、佐久間（2002）と馬場（2006）が提起した指示語の「文脈展開機能」については、系統的な研究があまり進んでいない。

本章では先行研究を踏まえて、指示語の文脈展開機能の定義とそれにかかわる側面を考察する。

2. 先行研究と問題提起

指示語の研究史において、画期的な役割を果たしたのは佐久間（1936）の研究である。佐久間が「コ・ソ・ア・ド」体系を確立し、人称区分説を提唱して以降、指示語については、指示用法の分類、現場指示用法の指示領域、「コ・ソ・ア」の使い分けをはじめとして、様々な観点から研究が行われてきた。

時枝（1950）が文章論を提唱し、指示語が文章論的観点において、非常に重要な役割を果たしていることを指摘して以来、文章論の立場から指示語の機能を検討する研究も現われてきた。永野（1972）は接続論において、接続関係を示す直接の指標となる言語形式の一つとして指示語を挙げ、それを手がかりに文章の文脈展開を解明しようとしている。市川（1978）は指示語が前文（あるいは前節）の内容を、後文（あるいは後節）の中に持ち込んで、前後を内容的に関係づける言語形式であると指摘している。長田（1984）は指示語の機能を、「（指示語によって）限定される語即ち被限定語を個別的表現の極限に近づけるのに必要にして十分な内容を、自らの位置に持ち込み、持ち込むことによって被限定語を限定し、それによって被限定語を個別的表現の極限に近づける力を持っている」ことと規定し、指示語は連文的職能を最も典型的に担う言語形式であると指摘している。さらに、高崎（1988）では、「指示語句」は、「前の部分の叙述を、なんらかの変容を加えて後に持ちこみ、従属部分として、修飾語や対象語、目的語としたり、新たに捉え直して、題目と

して後の叙述をひろげていったりする。ここに変容、すなわち“展開”という言語現象が生起している」と述べ、文章展開における「指示語句」の機能を論じている。

指示語の文脈展開機能を提言したのは佐久間（2002）と馬場（2006）である。佐久間は、文章中の連文や段（注 1）の大小様々の意味のつながりとまとまりを表す言語形式を文脈展開形態と呼び、主に接続語と指示語を挙げている。指示語は「文の文脈」を越える「文章の文脈」の成立に関与し、文脈展開機能を有することを主張し、特に「段」の統括という観点から指示語の文脈展開機能を分析している。佐久間は指示語による統括とは、文章や段において、指示語が意味上、文章や段全体を締めくくる機能であると指摘している。

馬場（2006）は理解過程の立場に立ち、「指示語による文脈展開は、すでに存在する情報を参照先として探査する指令と、その指令に基づく持ち込み内容の特定、そして、その持ち込み内容と指示語を含む言語的文脈との連結によって成立する」と述べ、指示語の文脈展開機能を認めている。

このように、指示語は文脈展開に深く関わりを持つ言語形式であることが論議されてきた。しかし、文脈展開機能について、その定義はまだ定説はなく、指示語の文脈展開機能にかかわる側面なども論述されていない。本章ではこれらの問題点を追求していきたい。

3. 指示語の文脈展開機能の定義

指示語の文脈展開機能を考察する前に、まず文脈と文脈展開について本研究の立場を示す。

「文脈」という用語は、一般的にかなり曖昧な意味で使われている。その定義や分類についても数多くの研究がなされている。ここでは、言語的脈絡として、佐久間（1988）の次の定義に従うことにする。「『文脈』とは、一つの文章のなかに含まれる大小様々の意味のつながりとまとまりを指す」。それによって、文脈の「流れ」や「展開」などの現象が理解できる。

文脈とともに、「文脈展開」についての研究もなされている。時枝（1960）は文章研究において、「展開」は「文章の継時的線条的な根本的な性格に由来する」とし、「展開といふことは、あるものが他のものを生み出すことであり、それは、あるものが他のものを生み出す可能性をもってゐることであり、生み出されたものについて云へば、それはあるものの拡充であり、完成である」と指摘し、「拡充」と「完成」に着目して、「展開」を把握している。また、金岡（1964）は「展開ということは、ある事がらが、その事がらとなんら

かの関連をもつ他の事がらに変容することをいう」と述べている。それに基づいて、高崎（1988）は金岡の「変容」という面から、指示語の文章展開における機能を具体的にとらえようとしている。また、馬場（2006）は、文脈展開は「すでに存在する何らかの情報に基づいてあるいはその何らかの情報を前提として、新たな文による情報を提示する」とし、「このような展開があるために、先行文から後続文への情報のつながりが生じる」と指摘し、既存の情報を基礎や前提として、新たな文による情報を提示し、前後につながりが生じるという観点から展開を捉えている。

これらの先行研究の諸説をもとに、筆者は文脈展開の定義を次のように示す。

文脈展開とは、既存の情報を次の新しい文脈に関与させることによって、先行文と後続文の間に、意味上のつながりを持たせることである。

指示語はまず指示機能、つまり何かを指示する機能を持つから、その指示される内容と指示語の間に意味上のつながりが生じるのである。文章において、指示内容が文脈にあれば、指示語とその指示内容が常に異なる位置にあるため、その二つの位置の間につながりができ、前後の文脈に意味上のつながりを持たせるのである。

次の例を見てみよう。

(1) A「私の後輩に佐藤という男がいます。この男ならできます」

B「その人は数学に強いんですか」

(1) は文脈指示の用法である。文脈指示とは、一般的に、指示語が対話か文章の先行あるいは後続する言語文脈に現れた内容を指し示す用法である。この場合、指示語は照応詞、指示される内容は先行詞と呼ばれ、両者は照応関係にあるとされる。先行詞が先行文脈にある場合は前方照応で、後続文脈にある場合は後方照応と呼ばれている。

(1) Aの「この男」もBの「その人」も指示対象は先行文脈にあり、指示機能から見れば、先行詞はいずれも前文の「佐藤という男」である。一方、文脈展開から見れば、「この男」は前文にある「私の後輩に佐藤という男がいます」から必要な内容を持ち込む。つまり、そのままではなく、「後輩」と「佐藤という男」を抽出し、「後輩」である「佐藤という男」と変容して、当該位置の文へ持ち込むのである。そして、Bにおいては、「その人」はAの話題に出た人のことで、Aの「後輩」の「佐藤という男」で、「できる」という内容をBの発話に持ち込むのである。つまり、Bでは既存の情報を基礎とし、新しい文脈として、「その人」について「数学に強い」という情報を加えて、文脈を展開させるのである。このように、指示語は持ち込み内容を変容しながら持ち込むのである。

(1) Aの「この男」とBの「その人」は両方とも指示対象の「佐藤という男」のみを指すのではなく、「この男」は「後輩」である「佐藤という男」という情報を、「その人」はAの「後輩」である「佐藤という男」で、そして「でき」という全体の情報を、新しい文脈に持ち込むのである。その持ち込まれた情報全体を持ち込み内容と呼ぶ。指示語に伴ういろいろな既知の情報（持ち込み内容）を新しい文・句に持ち込むことによって、新しい文脈が形成されるのである。

しかし、(1) Aの「この男」に「男」という語がなく、「この」だけであったとしたら、何を指すのか分からない。当然、何をもち込むのかも不明である。「その人」も「人」がないと、同様である。つまり、指示語に後続する語句は持ち込み内容を規定する点において、非常に重要である。

本章では、談話・文章における指示語の文脈展開機能を次のように定義しておく。

指示語の文脈展開機能とは、先行部分または後続部分から必要な内容を、指示語を含む文・句に持ち込み、指示語の持ち込み内容を新たな成分の中でとらえ直すことによって、新しい文脈を完成させる機能である。

指示語は先行部分（前方照応の場合）か後続部分（後方照応の場合）から必要な内容を自らの位置に持ち込むが、その持ち込み内容は指示語と同一文中、あるいは先行ないし後続の文中に現れる。またその持ち込み内容は、語や句の他、文・文段ないし文章全体に及ぶものもある。前後の文脈から持ち込み内容をそのまま指示語の位置に持ち込むことができる場合もあれば、必要によって、変容し持ち込むこともある。その変容が必要であるか否かは指示語とその後続の語句・文の内容で決まる。特に、指示語とその直後に接続する語句によって決められる。

このような文脈展開機能の性質から考え、指示語の持ち込み内容の分析は重要であり、指示語の文脈展開機能を考察する中心的な課題である。また、「コノ」「ソノ」において、指示語の後続語句を加えた分析が必要となる。持ち込み内容及び後続語句の検討は第三章、第四章、第五章で行いたい。本章では、指示語の文脈展開機能にかかわる重要な側面として、①指示語とその持ち込み内容の距離、②指示語の持ち込み内容の範囲、③指示語の持ち込み内容の変容、④指示語の後続語句、の四つを指摘し、検討したい。

4. 指示語の文脈展開機能にかかわる四側面

本章では、最も典型的に文脈展開機能を担う場合として、文脈指示用法の「コ」と「ソ」

を取り上げて、文脈展開機能にかかわる側面を考察する。なお、以下の引用例は「夢十夜」(注2) 以外はすべて CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』による。

4.1 指示語とその持ち込み内容の距離

文脈指示の場合、多かれ少なかれ、指示語が文脈展開機能を果たしていると考えられる。文脈指示であるから、指示語とその指示内容はともに文脈にあり、両者は必ず文章の前後に位置し、常に距離がある。同一文中にある場合もあれば、文のレベルを越える場合もある。文段や章節を越え、隔たった場合もある。この距離の長さによっては、この文脈展開機能を強く感じることもある。次の同一文中にある例を見てみよう。

(2) 額を裂かれた徒刑囚たちは土埃りのように市とその周辺に群がり、軍用道路をつくったり、宮殿を築いたりしていた。(開高健「流亡記」)

「その」は同一文中の直前の語「市」を当該位置に持ち込む。両者は同じ節の中に位置し、非常に近い距離にある。このように距離が短く、持ち込まれた情報が少ない場合、文脈展開機能は非常に弱い。また、同一文中に指示語と指示内容がある例として、(3) のようなものもある。

(3) 能島さんは、或る一軒の仕舞屋の土間に入って行き、その土間を素通りして裏口から出た。(井伏鱒二「黒い雨」)

「その土間」とその持ち込み内容である「或る一軒の仕舞屋の土間」は同一文中にあるが、(2) と違い、異なる節にあり、すこし離れている。「或る一軒の仕舞屋の土間」はその句の中で「入って行」く場所であるが、次の句では、「その土間」の持ち込み内容として、出る場所となっている。指示語とその持ち込み内容は同一文中にあるが、異なる節にあるから、(2) より文脈の展開が強く感じられる。

以下の例はいずれも指示語とその持ち込み内容とが文のレベルを越えている。

(4) ところが或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子の僧が、知己の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者と云うのは、もと震旦から渡って来た男で、当時は長樂寺の供僧になっていたのである。(芥川龍之介「鼻」)

「その医者」は直前の文の内容に出た「医者」のことを指示しているが、指示語を含む文では「医者」のみならず、前文に出た「京へ上った弟子の僧」が、「内供」の「知己」の「長い鼻を短くする法を教わつ」た「医者」の内容を持ち込むのである。このような特徴を持った「その医者」は主語として、次の文脈に参加しているのである。持ち込み内容は

指示語「この医者」の直前の文にあり、両者間の距離は文のレベルを越えている。また、この場合、大量の情報を持ち込むことが可能なので、文脈展開が強く感じられる。

場合によっては、指示語はその持ち込み内容と非常に距離があることもある。

- (5) Aの一種の淋しい変な感じは日と共に跡方なく消えて了った。然し、彼は神田のその店の前を通る事は妙に気がさして出来なくなった。のみならず、その鮎屋にも自分から出掛ける気はしなくなった。(志賀直哉「小僧の神様」)

(5) は「小僧の神様」の「九」の部分における最初の一段落である（この小説は「一」から「十」まで、そして最後の「追伸」の部分からなっている）。「その店」は「五」の部分の「荷物秤」を買った「神田の仙吉のいる店」という内容を持ち込むのである。「その鮎屋」は「六」の部分の仙吉をご馳走した鮎屋のことを指すのである。照応詞は先行詞と離れているが、「五」と「九」、「六」と「九」、それぞれつながりを持たせたのである。持ち込まれた情報の量の大きさはともかく、文章の離れた部分に意味上のまとまりをつけており、文脈の展開が感じられる。しかし、このような場合、(4)ほど文脈展開が強いとは考えにくい。

前述したように、指示語は文脈展開機能を持っているが、その文脈展開の強さは同等ではなく、強く感じる時と弱く感じる時がある。指示語の文脈展開機能の強さを「文脈展開力」と呼ぶ（注 3）と、指示語とその持ち込み内容が同一文中にあり、非常に距離が短い場合、文脈展開はあまり感じられず、文脈展開力が弱いと考えられる。一方、その距離が文レベルを越えて、先行詞の直後の文に指示語が来る場合、文脈展開力が強いと考えられる。しかし、一概に遠ければ遠いほど文脈展開力が強いともいえない。(5)のように、非常に隔たったところから情報を持ち込む場合、文脈上、指示語とその持ち込み内容は緊密な関係ではなくなり、文脈展開が感じられるが、強いとは考えにくい。要するに、文のレベルを越え、指示語がその持ち込み内容の直後の文にある場合に、文脈展開力が最も強いと考えられる。

4.2 持ち込み内容の範囲

指示語の持ち込み内容の範囲とは、指示語が先行文脈あるいは後続文脈からどれだけの内容を当該位置に持ち込むことができるかということである。その持ち込み内容の範囲は文レベル以下の語や句である場合もあれば、文や文段、大きな部分、ないし文章全体を持ち込む場合もある。一般的に、持ち込み内容の範囲が広ければ広いほど、文脈展開力が強

くなる。

(6) 内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。

木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。 (芥川龍之介「鼻」)

「その」は先行文脈の「中童子」という語を当該位置に持ち込み、新しい文脈では後の「顔」と結合して、「中童子」の顔という意味になる。持ち込み内容の範囲は狭い故に、文脈展開力が弱いと考えられる。

(7) 庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これが果して弟殺しと云うものだろうか、人殺しと云うものだろうかと云う疑が、話を半分聞いた時から起って来て、聞いてしまっても、その疑を解くことが出来なかった。

(森鷗外「高瀬舟」)

「その疑」は前の文脈にある「これが果して弟殺しと云うものだろうか、人殺しと云うものだろうかと云う疑」という句全体の内容をまとめて承けるのである。同一文中にあるが、複文なので、二つの単文に書き直すこともできる。(6)より持ち込み内容の範囲が広く、文脈展開をより強く感じられる。また、文や文のレベルを越えた広い範囲の内容を承け、まとめて、新しい文脈に持ち込む場合もある。

(8) (前略) 独りで食えば、鼻の先が鉢の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貫う事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。

(芥川龍之介「鼻」)

「こうして」は先行文「そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貫う事にした。」一文全体を当該位置に持ち込むのである。(8)は(6)(7)より、持ち込み内容の範囲が広いゆえに、文脈展開力が強く感じられるのである。

次のように、指示語が文章の大きな部分を持ち込む場合もある。

(9) 山本の、聯合艦隊司令長官としての生活が、こうして始まった。

(阿川弘之「山本五十六」)

(9)は「山本五十六」の第一章の終わりの一文である。その章の2節から最後の5節まですべての内容を「こうして」という表現でとりまとめ、非常に広い範囲の内容を持ち込むのであり、文脈展開力が非常に強いと思われる。佐久間(2002)はこのような広範囲の

内容をとりまとめて新しい文脈に持ち込む現象を「統括」と呼ぶ。指示語による統括は、広い範囲の内容を持ち込むゆえに、非常に強い文脈展開力を持つのである。

持ち込み内容の範囲が最も広いのは、文章全体を統括する場合である。

(10) これで私たち夫婦の記録は終りとします。これを読んで、馬鹿々々しいと思う人は笑って下さい。教訓になると思う人は、いい見せしめにして下さい。私自身は、ナオミに惚れているのですから、どう思われても仕方がありません。

ナオミは今年二十三で私は三十六になります。 (谷崎潤一郎「痴人の愛」)

(10) は谷崎潤一郎の「痴人の愛」という小説の最後である。「これ」は前のすべての内容をまとめて統括し、次の文脈の切り口として、文脈展開機能を果たすのである。また、文章全体を統括する機能は後方照応の場合にも見られるが、後方照応の特殊性のため、取り立てて後の5. で考察することにする。

このように、指示語は前後の文脈から必要なだけの情報を当該位置に持ち込むことで、新しい文脈の完成に関与している。指示語というのは何かを指示する語句であるから、その指示されるものが指示機能の重要なところである。それと同様に、文脈展開機能においても、どれだけの内容を持ち込めるかが重要であるため、持ち込み内容の範囲は最も重要な側面である。文脈展開力は持ち込み内容の範囲によって決まり、持ち込み内容の範囲が広ければ広いほど文脈展開力が強い。

4.3 持ち込み内容の変容

指示語の持ち込み内容が新しい文脈に関与するとき、その新しい文脈の必要に応じてそのまま持ち込まれる場合もあるが、多くの場合は変容して持ち込まれるのである。指示語の持ち込み内容の変容とは、先行部分か後続部分から必要な情報を「抽出」したり、「要約」したり、「言い換え」たりすることによって、新しい文脈を構築することである。変容は指示語の文脈展開機能の「展開」を担う重要な側面である。

先に挙げた(4)をもう一度見てみよう。

(4) ところが或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子の僧が、知己の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者と云うのは、もと震旦から渡って来た男で、当時は長楽寺の供僧になっていたのである。 (芥川龍之介「鼻」)

指示語「その」は前文にある「京へ上った弟子の僧が、知己の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た」をそのまま持ち込むのではなく、「京へ上った」「内供」の「弟子の

僧」が「内供」の「知己」から「長い鼻を短くする法を教わっ」た「その医者」という必要な内容を切り取って加工して、当該位置に持ち込むのである。前文の内容は語順など変えないと、そのままではつなぐことができない。抽出した結果を組み立てて、新しい文脈の完成に關与する抽出指示である。

(4) のような抽出という変容以外に、要約（注4）もある。つまり、前の情報をとりまとめて新しい文脈に持ち込む場合である。4.2 で挙げた（8）（9）（10）のような先行の広い範囲の内容を「こうして」と「これ」という指示語でまとめて要約し、一つの語句という形で、新しい文脈に持ち込む。抽出は（4）に示したように、既存の内容を切り取って、組み立てて、その抽出した結果が言語で明示できるが、要約の場合は、その要約した結果は言語で明示できない。（9）の「こうして」は作品の第一章の2節から5節までの内容をすべて締めくくり、まとめて当該位置に持ち込むが、その要約した結果は指示語以外の他の短い語句で表現しにくい。

また、単純な言い換えもある。

(11) この村には十人あまりの原爆病患者がいたが、今では生き残りの軽症の原爆病患者が重松を含めて三人いる。 （井伏鱒二「黒い雨」）

前の部分で「小島村」という村の名前は何回も出ている。この文では「この村」で、具体的な村の名前の変わりに、上位語である「村」の前に「この」をつけて抽象的にとらえる。このような場合、一般的に、持ち込み内容をそのまま持ち込むことができ、指示語の使用はただ単純な言い換えである。そして、持ち込み内容の範囲は一般的に広くなく、一文より短い語や句に限定される。また、具体的な数字が前の部分で挙げられ、後続部分で、「この数字」などでその数字の意味づけをして承ける場合も言い換えである。

しかし、次の例を見てみよう。

(12) 屢々警視庁から文書がきた。

(略)

文面こそいかつく鄭重であったが、徹吉は警視庁の衛生室に出頭し、頭をたれて叱責を受け、病棟改造の試案を直ちに文書にして提出するようきびしく命じられねばならなかった。

なによりも榆病院の二代目院長である徹吉は、こうした院長業務に不適というか、

(略)

(北杜夫「榆家の人びと」)

「こうした院長業務」は前の三つの段落を締めくくり、要約しているが、「院長業務」と

いうまとめの表現があることから、前の内容の言い換えでもあるといえる。つまり、この場合、「院長業務」は前の内容をまとめた要約でもあり、言い換えでもあるといえよう。

以上見たように、持ち込み内容が要約される場合、文脈展開の働きが強く感じられるが、(11)のような単純な言い換えの場合は、持ち込まれた情報が限られているので、文脈展開力は比較的には弱いと考えられる。

4.4 指示語の後続語句

指示語が何をもち込むのかは指示語とその後続語句によって決まる。この場合、指示語の後続語句が非常に重要である。

もし、先の(4)の指示連体詞「その」の後の「医者」がないとすれば、どのようになるであろう。

(4) ところが或年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子の僧が、知己の医者から
長い鼻を短くする法を教わって来た。その

「その」のみでは、何を指示するのか分からない。「その」「弟子」か「内供」か「秋」かどれでも可能性がある。「その」の後に「医者」が後続すれば、持ち込み内容が明確になった。指示語とその後続語句が持ち込み内容を決定するため、指示語とその持ち込み内容の距離も、持ち込み内容の範囲も、変容のあり方も、すべて指示語とその後続語句との関係によって変化する。要するに、指示語の後続語句は非常に重要な役割を果たしている。これを欠くと、文脈展開機能が成立しにくい。

先の(8)をもう一度見てみよう。「こうして」は指示副詞「こう」＋「する」の連用形「し」と助詞「て」が付いて一語化したものなので、本章では「こうして」全体を一つの指示表現としてとらえる。もし、「こう」の後に「して」も「飯を食う」もないと、何をもち込むのであろう。

(8) (前略) 独りで食えば、鼻の先が鉢の中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持ち上げていて貰う事にした。しかしこう

「こう」「食う」か「こう」「持ち上げて」かどの語句を接続しても不自然がない。その後続の動詞によって、「こう」の持ち込み内容が明確になる。この場合、指示語の後続語句は持ち込み内容を決めるのである。

また、次の指示代名詞の例を見てみよう。

(13) 終戦の詔勅が放送された日、鮎太は終戦の日の町の表情を記事にした。(略)

記事の取り扱いは全く鮎太にも判らなかつた。明日の日本というものが判らない以上、どのような事をどのように書いていいものか見当はつかなかつた。鮎太はただ客観的にそれを何十行かの文章に綴つた。(井上靖「あすなる物語」)

もし、「それ」だけであつて、後の「何十行かの文章」という内容がなくても、先行の記事のことであろうと漠然と推測できる。代名詞「それ」はその持ち込み内容を漠然と推測できる点において、(4)の連体詞「その」、(8)の副詞「こう」と異なっている。

以上見たように、指示代名詞の場合、後続の語句が明確でなくても、何を指示するかは漠然と分かる。つまり、その持ち込み内容がある程度推測できる。しかし、指示連体詞や指示副詞の場合、後続の語句が分からないと、何を指示するのか分からなくなる。要するに、指示語が連体詞や副詞である場合、何を持ち込むかにおいて、後続語句が非常に重要な役割を果たしている。このような場合、「指示連体詞/指示副詞+後続語句」は全体で指示代名詞の働きを果たす。そして、その後続語句は持ち込み内容と重なる部分があるか、持ち込み内容の上位語であるかの例が多い((1)(3)(4)(5)(7)(10)(11)(12)を参照)。

指示語とその後続語句で持ち込み内容を決めるため、指示語と持ち込み内容の距離も、持ち込み内容の範囲も、持ち込み内容の変容もすべてこれで決まる。指示語の文脈展開機能において、その後続語句が非常に重要な側面となり、しかも、ほかの側面と比べると、前提的な働きがあるといえよう。

5. 後方照応の場合

4.1 から 4.4 まで、考察した用例はすべて前方照応、すなわち、指示語の先行詞が先行文脈にある場合である。一方、先行詞(後続詞と言うべきであるが、後続する場合も含めて先行詞と呼ぶことにする)が後続文脈にある場合、いわゆる後方照応の場合、文脈展開機能がどのように果たされるのであろうか。次の例を見てみよう。

(14) しばらく踏んでいると、やがて、粟粒のようなものが、鼻へ出来はじめた。云わば毛をむした小鳥をそっくり丸炙にしたような形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云つた。

——これを鑷子でぬけと申す事でごぞつた。(芥川龍之介「鼻」)

「こう」という指示語を見たら、前方に先行詞がないので、後ろにあると判断できる。「こう」は次の一文の発話を指示するので、その発話の内容を当該位置に持ち込むことが

できる。しかし、前方照応の場合と違い、既知の情報を持ち込むのではなく、未知の情報を予告するのである。「こう」が後続語句「云った」に係るので、後は「云った」内容だと期待される。まず指示語である事物を予告し、それを手がかりに、次に期待された具体的な情報が出てくる。後方照応の場合、指示語がこのように文脈展開機能を果たしているのである。

後方照応は持ち込み内容を予告しているが、本質から言えば、前方照応と同じである。文脈によって必要な内容を持ち込むため、文脈展開機能にかかわる側面から考察することができる。(14) では、「こう」とその後続語句が持ち込み内容を決め、後の「——これを鑷子でぬけと申す事でござった。」を持ち込むのである。(14) の「こう」はその持ち込み内容との距離からいえば、文のレベルを越え、直後の文につながっており、持ち込み内容の範囲は直後の一文全体である。「こう」はその後続の一文を統括し、要約という変容をしている。「こう」の後続語句は「云った」で、「こう云った」が持ち込み内容を決める。

指示語には(14)のように一文の内容を予告する場合もあれば、下記のように、文段や文章全体を統括して予告する場合もある。

(15) 私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習った事があった。

更けゆく秋の夜 旅の空の
侘しき思いに 一人なやむ
恋いしや古里 なつかし父母

(林芙美子「放浪記」)

「こんな歌」は後続部分の文段(意味のまとまりを持った文の連続)、つまり歌の具体的な内容全体を指示するのである。「こんな歌」は、後続する文段の内容を予告し、その文段と指示語の位置の文と内容上のつながりを持たせ、文脈を展開させるのである。

また、夏目漱石の「夢十夜」は「第一夜」、「第二夜」、「第三夜」と「第五夜」はいずれも「こんな夢を見た。」という一文から語り始める。文章の最後まで、すべて「夢」の内容である。つまり、「こんな」は「夢」の内容である文章全体を予告し、「統括」するのである。(14)(15)や「夢十夜」の例は、後方照応として、後続の広範囲の内容をとりまとめて予告しているため、指示語の統括機能があると理解される。(15)と「夢十夜」の冒頭の指示語は、広い範囲の内容をとりまとめるもので、文章全体の構造に大きく関わっていると考えられる。

以上見たように、「コ」の後方照応の場合一般的に、その持ち込み内容は指示語と同一

文中に位置せず、直後の文・文段にある。そして、文以下のレベルの狭い範囲の内容を予告する例が見られず、一般的に、文か文段かそれより大きな章段ないし文章全体をそのまま統括する傾向が見られる。そして、その後続語句が指示語と一緒に、次の持ち込み内容を提示する。

後方照応用法は、「コ」に多く見られることから、「ソ」には後方照応用法がないと言われることもある。これについて、馬場（1992）は「ソ」にも後方照応用法があり、そしてその具体的な型も指摘している。筆者は「コ」の後方照応に比べ、「ソ」のそれは別の特徴を呈していると考ええる。

(16) その力を十分に発揮した選手。 (正保（1981）による例)

「その力」は後続文脈にある「選手」の力を意味するのであるが、直接「選手の力」を代入して、「選手の力を十分に発揮した選手」となると、文法的には正しくない。すこし変容して、「自分の力を十分に発揮した選手」となると、自然な文になる。つまり、「選手」から「自分」へと言い換えの変容をしながら持ち込むのである。(16)では、「その」がなくても文が成立するが、「その」があったほうがより強調していると考えられる。指示語「その」とその先行詞「選手」は同一文中にあり、指示語と先行詞との距離も短く、持ち込み内容の範囲も狭い。もともと持ち込まれた情報が限られているので、文脈展開力は非常に弱い。また次のような「ソ」の例もある。

(17) それは秋らしい柔かな澄んだ陽ざしが、紺の大分はげ落ちた暖簾の下から静かに店先に差し込んでいた時だった。 (志賀直哉「小僧の神様」)

先行文脈が存在せず、「それは」は後続する「～時」、そして後ろの出来事の内容を指示する。この後方照応の型はほとんど小説や物語の冒頭に位置し、物語の世界を漠然と指示する性格を持つ。書き手が頭の中にある場面を設定するので、一種の現場的性格を持っている(注5)。(17)も(16)と同じく、指示語「それは」がなくても文が成立する。このような場合、後方照応と認めても、「それは」「～時」と完全に等しいわけではない。むしろ、書き手が頭の中に物語の世界のある場面を設定し、それを漠然と指すと考えられる(注6)。

「それは」と「～時」は同一文中にあり、持ち込み内容は漠然としており、後続の内容を一種の要約という変容をして持ち込むのである。「それは」と「～時」とは前後の内容上のつながりが弱く、文脈展開機能が弱い。

(16)(17)はともに、後方照応として、漠然と次の持ち込み内容を予告することができる。指示語とその持ち込み内容の距離が短く、同一文中にある。一般的に、「ソ」の後方照

応は直後の持ち込み内容が言い換えや要約などの変容を経て指示語の位置に持ち込まれるのである。要するに、同じ後方照応といっても、「ソ」は「コ」と異なった特徴を呈している。

6. まとめ

以上、指示語とその持ち込み内容の距離、持ち込み内容の範囲、持ち込み内容の変容のあり方、指示語の後続語句、また特殊な場合として後方照応の予告的な用法をめぐって、文脈展開機能はどのように実現されるのかを考察してきた。指示語はまず何かを指示する機能を持つ。その機能によって、指示語の文脈展開機能が生じる。また、持ち込み内容との距離や、持ち込み内容の範囲や、持ち込み内容の変容などの概念も生じるのである。

指示語がどれだけの情報を持ち込めるかはその先行詞に伴う情報(持ち込み内容)の量、指示語の後続語句や文脈によって自ら決まる。その持ち込み内容の範囲が広ければ広いほど、文脈展開力が強いと考えられる。また、指示語とその持ち込み内容の間に距離があり、4.1 で分析したように、極端に隔たった場合は別として、一般的に、距離が長ければ長いほど、文脈展開力が強い。文・文段のレベルを越えても、持ち込み内容が指示語の直前または直後の文にあるとき、文脈展開を強く感じられる。

以上に述べた文脈展開機能にかかわる四側面について、文脈展開力の感じられ方の強さの傾向をまとめると、次の【表1】のようになる。

【表1 指示語の文脈展開機能にかかわる四側面】

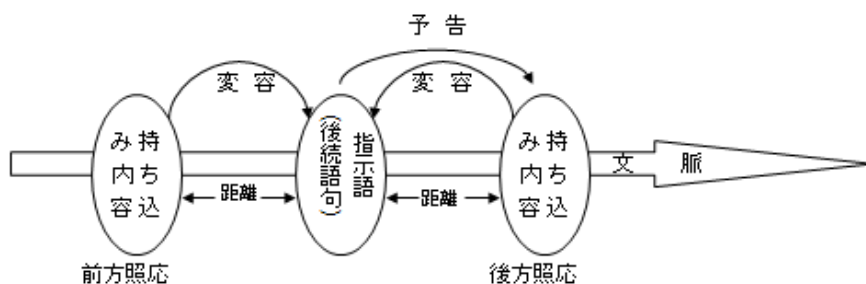
側面	文脈展開力の強さ
①持ち込み内容との距離	長い>短い
②持ち込み内容の範囲	広い>狭い
③持ち込み内容の変容	要約>抽出>言い換え
④指示語の後続語句	持ち込み内容の決定に関与する

しかし、これらの側面を決めるのは、指示語とその後続語句である。つまり、指示語の後続語句は文脈展開機能を分析する前提である。指示語は何を指すのかは指示語を含む部分の内容に基づくため、特に指示語の後続語句と関わりが強い。これらの側面の中で、文脈展開力を決める最も重要な側面は持ち込み内容の範囲である。一般的に、持ち込み内容

の範囲が広ければ、その指示語とその先行詞の間の距離も比較的長い。また、文脈に応じて抽出や要約などの変容も必要となる。

指示語の文脈展開機能にかかわる側面の関係について、次の【図1】のようにまとめられる。

【図1 指示語の文脈展開機能にかかわる側面】



【図1】に示したように、文章の文脈が常に流れていく。その流れの中に、指示語は必要な情報を持ち込むことができる。指示語を含む文脈とその持ち込み内容が位置する文脈の間に内容上のまとまりができ、前後の文脈に関係をつける。指示語を含む文脈の必要に応じて、その持ち込み内容がそのままあるいは変容して、新しい文脈の完成に関与する。後方照応の場合は、本質的には前方照応と同じであるが、前方照応と違った特徴も持っている。指示語自身でその持ち込み内容である内容を予告し、それによって新しい文脈でその指示語の具体的な内容が出現することが期待される。

以上、指示語の文脈展開機能の定義、そして、文脈展開機能にかかわる側面について、基本概念を規定してきた。しかし、指示語は代名詞、連体詞、副詞のいくつかの品詞にわたっているので、すべてが文脈展開機能を担うとしても、その機能を果たすとき、それぞれ異なる特徴を持つのではないかと考えられる。今後は各品詞の語形ごとに、文脈展開機能とそれにかかわる側面を手がかりにして、それぞれの指示語がいかに文脈展開機能を果たすのかについて考察していきたいと思う。

【注】

- (1) 市川 (1978) は「文段」という言語単位を設定しているが、佐久間 (2000) は談話の「話段」という概念を加えて、文章・談話を直接に構成する言語単位を「段」という概念を規定

している。

- (2) 「夢十夜」のテキストは夏目漱石『文鳥・夢十夜』（2002）新潮社を用いた。
- (3) 「文脈展開力」は馬場（2006）が提唱した用語である。「文章中の指示語が文脈展開に関わるとしても、その文脈展開力の強さは等しくはないであろう」と述べ、また、「持ち込み内容が狭いほど展開力が弱く、広いほど展開力が強いと言える」と指摘している。ただ、それについての定義を規定しておらず、詳しい考察をしていない。本章ではこの用語を受け継ぎ、指示語の文脈展開機能の強さを分析する。
- (4) 相原（1984）、高崎（1988）はこの種の指示用法を要約指示と呼んでいる。
- (5) 金水・田窪（1990）の談話管理理論の立場から、現場をそのまま外的世界として扱うのではなく、現場の知覚を反映した知識領域を仮定することによって、現場指示と文脈指示の統一的扱いを可能にした。
- (6) 正保（1981）は「確と同定出来ないような指示対象」や「焦点でない部分」は、「ソ」で承けるのが普通であると指摘している。それに基づいて、吉本（1986）は文脈指示における「コ」と「ソ」の指示対象の相違点について、「コ」は「実質性」と「顕著性」を持つのに対して、「ソ」はそれらが欠けていると述べている。また、馬場（1992）も「ソ」の「確定・充実性の不足」という性質を認め、漠然と指して使われることを論述している。

第二章 小説における指示語の文脈展開への関与

—「小僧の神様」を例として—

1. はじめに

日本語は英語や中国語より、指示語の使用が非常に目立ち、複雑な様相を呈している。量も多く、使用範囲も広いため、談話・文章において非常に重要な役割を果たしている。指示語は文章構造を明らかにするために不可欠なものであり、指示語によって文や段落相互が関係し合い、文章は構成されている。

これまで指示語の分類や指示範囲についての研究は数多く行われてきた。その一方、指示語の文章論的機能については、系統的な研究があまり進んでおらず、問題が多く残っている。従来の指示語の文章論的観点の研究では、主に文脈指示用法に注目しており、現場指示や観念指示は文脈展開とあまり関係がないとされる。しかし、文章という自己充足型テキストでは、指示語は原則としてすべて文脈展開に関与していると考えられる。そこで、文章において、指示語の文脈展開への関与を再検討する必要があると考えるに至った。

小説の文章には、地の文と会話文両方があり、指示語の現場指示や文脈指示、観念指示など様々な指示用法が使われており、データが豊富であると考えられる。本章では志賀直哉の小説「小僧の神様」における指示語の分析を通して、指示語が文脈展開にいかに関与するかを確認したいと思う。

2. 先行研究と問題提起

指示語の研究史というと、佐久間（1936）から語り始めるのが一般的である。佐久間が「コ・ソ・ア・ド」体系を日本語研究の一対象として確立し、人称区分説を提唱して以降、指示語研究が盛んになった（注1）。

指示語の指示用法の分類で、もっとも代表的なのは堀口（1978a）の分類方法である。堀口（1978a）は指示用法を現場指示、文脈指示、観念指示、絶対指示の四種類に分けている。本章ではこの四用法について、それぞれ文脈展開にどのように関与するかを考察する。

文章論的観点から見れば、文章において、指示語の四用法は原則として文脈展開に関与

することができる。長田（1995）は談話では、「話の場」が先にあると、話し手と聞き手が言語だけでなく、行動などを通して「相互に相手を確認することができる状況にある」ため、意志伝達のすべてを言語に頼っていない。それに対して、文章では、話し手と聞き手が「話の場」に相当するものを同時に共有しておらず、すべて「文字言語で表現される」故に、意志伝達のすべてを「文字言語」に頼っているとしている。

これについて、庵（2007）は文章を「自己充足型テキスト」の典型で、「脱状況的であり、そのテキスト内部の要素の解釈はそのテキスト内部で完結する。そしてそのことによって、解釈時から時空間的（特に時間的）に隔たったテキストが解釈可能になるのだ」と指摘している。

長田（1995）・庵（2007）の論に見られるように、文章中の文（節／文段）と文（節／文段）とのつながりを示す指示語は、文脈指示はもちろん、現場指示、観念指示、絶対指示も文字言語からその持ち込み内容を探ることができる。その際、指示語の持ち込み内容は、直接その文章の文字言語にある場合もあれば、文字言語の提示によって、読み手の背景知識（文化・経験）を導入し、作られた観念の場にある場合もある。しかし、いずれにせよ、これらは文字言語と関わっているのである。

そこで、本章では、志賀直哉の「小僧の神様」という小説を通して、堀口（1978a）の提示した指示語の四用法はそれぞれどのように言語文脈に依拠し、文脈展開に関与しているのかを解明しようと思う。

3. 「小僧の神様」における指示語

3.1 指示語出現の形式と総量

まず、先行研究を踏まえ、本研究では指示語の指示用法の分類を【表 1】のように規定する。

【表 1 指示用法の分類】

指示用法	指示対象	コ・ソ・ア系列
現場指示	現場（近称・中称・遠称）	コ・ソ・ア
文脈指示	言語文脈（前方・後方照応）	コ・ソ
観念指示	観念に浮かべる遙かな事物	ア
絶対指示	特定の対象	* 「この間」「そのうち」「あの世」等

本節の調査資料となる「小僧の神様」は1920年に雑誌『白樺』で発表された作品である。この小説は「一」から「十」まで、そして最後の「追伸」の部分からなっている。この小説における指示語の指示用法を調査し、文章中の指示語「コ・ソ・ア」の文脈展開への関与の特徴を見てみよう。

まず調査の結果として、指示語の語形は以下のようなものが挙げられる。この表記は平仮名のほうが多いが、「ココ」は「此処」で、「ソコ」は「其処」で、「コッチ」は「此方」で、「ソッチ」は「其方」という漢字の表記を取るものもある。

指示代名詞：コレ、ソレ（ソン）、アレ、ココ、ソコ、コッチ、ソッチ

指示連体詞：コノ、ソノ、アノ、コンナ、ソンナ、アンナ

指示副詞：コウ、ソウ、アア

調査の対象である「コ・ソ・ア」の総量を調べ、【表1】に従って分類すると、次の【表2】のような結果となる。

【表2「小僧の神様」における指示語「コ・ソ・ア」の出現】*

	文脈指示	現場指示	観念指示	絶対指示	合計
コ	14	2	0	5	21(16%)
ソ	86	1	0	7	94(72%)
ア	0	0	16	0	16(12%)
合計	100	3	16	12	131(100%)*

* 【表2】の詳細は p. 154 の【資料1】で示した。

* 131例の指示語は総計274字である。

「小僧の神様」は合計6118字（句読点を入れて）であるが、そのうち、指示語は131例で、総文字数で274字を占めている。つまり指示語だけで文章の総字数の4.5%を占めている。

また、指示語「コ・ソ・ア」のうちで、最も多いのは「ソ」（94例、72%）で、「コ」（21例、16%）・「ア」（16例、12%）と比べると、圧倒的に多い。この結果は張・王（2010）の日本語小説を調査した結果と一致しており、「ソ」の多用は注目すべき点である。高崎等（2007）の調査では、社説や随筆のジャンルでも、「コ」より「ソ」が多用されることを確認している。

3.2 指示語の各指示用法の文脈展開

文脈展開の定義については定説がないが、本研究の第一章で規定した定義を用いる。すなわち、文脈展開とは、「既存の情報を次の新しい文脈に関与させることによって、先行文と後続文の間に、意味上のつながりを持たせることである」とする。文章における指示語は持ち込み内容との間にあるつながりを持つことになる。そうすると、客観的に前後の文脈にあるつながりを持たせ、文脈が展開していく。

以下は各指示用法において、それぞれどのように文脈展開に関与しているかを考察していく。

3.2.1 文脈指示の文脈展開

「小僧の神様」においては、文脈指示用法が76%を占め、ほかの用法より圧倒的に多い。【表2】に示したように、「コ」においては、14例で全指示用法の67%を占め、「ソ」においては、86例で全体の90%も占めている。従来の研究で、指示語の文脈指示用法の文脈展開機能は多く論じられているため、ここでは2例のみ挙げて説明する。

(1) 帳場格子の中に坐って退屈そうに巻煙草をふかしていた番頭が、火鉢の傍で新聞を読んでいる若い番頭にこんな風に話しかけた。

「おい、幸さん。そろそろお前の好きな鮪の脂身が食べられる頃だネ」

(志賀直哉「小僧の神様」(一))

(2) 京橋にSと云う同業の店がある。その店へ時々使に遣られるので、その鮪屋の位置だけはよく知っていた。

(志賀直哉「小僧の神様」(一))

(1) は文脈指示で、後方照応の用法である。「こんな風」で次の発話「おい、幸さん。そろそろお前の好きな鮪の脂身が食べられる頃だネ」を予告する。この指示表現は文と文をつなぎ、内容的にも一種のまとまりを持たせる。(2) は「ソ」の文脈指示用法の前方照応である。「その店」は前の文の「京橋にあるSと云う同業の店」という内容をここに持ち込み、前後の文をつなぐ。「その」の使用によって、文脈が展開していく。

文脈指示用法の場合、持ち込み内容は直接、文章の先行文脈か後続文脈かにあり、いずれの場合でも、言語文脈によるといえる。

3.2.2 現場指示の文脈展開

現場指示は2%、さらにそのほとんどが会話文か心話文に現れる用法である。

(3) 「それからお所とお名前をこれへ一つお願い致します」金を払うと番頭は別の帳面を出して来てこう云った。 (志賀直哉「小僧の神様」(五))

(3) の「これ」は会話文の中に用いられており、この会話文の発話者が発話現場に存在する事物を対象として「これ」を用いるため、現場指示用法である。そして、前後に語や文や文段とも関係がないから、文脈展開には直接的に関わらないと見られてきた。しかし、登場人物である発話者も作られた発話現場もあくまでも架空のもので、すべて文章の文字言語で表現される。読み手として、「これ」に後続する地の文の「別の帳面」という言語文脈を手がかりにして、「これ」の内容を理解することになる。このような立場から見れば、「これ」を手がかりとして、後続する地の文の文脈が展開していると考えられる。

(4) 「中々旨かった。それはそうと、見ていると、皆こう云う手つきをして、魚の方を下にして一ぺんに口へ抛り込むが、あれが通なのかい」

「まあ、鮪は大概ああして食うようだ」 (志賀直哉「小僧の神様」(四))

これは小説の「四」の部分にある登場人物 A の発話で、聞き手はその友人の B である。「こう云う手つき」は一見前後に手がかりがないが、隔たった「三」の部分に「鮪の趣味は握るそばから、手掴みで食う屋台の鮪でなければ解らない」と説かれており、A はその部分の内容を承けて B から「聞いていた屋台の鮪屋へ行って見た」と展開する。また、(4) の「こう云う手つきをして」の後ろでは、「魚の方を下にして一ぺんに口へ抛り込むが、あれが通なのかい」とそれに対する B の返事「鮪は大概ああして食うようだ」という会話の提示がある。その提示を手がかりに、日本ではネタを押さえながら寿司を横にねかせ、親指をネタ側、人さし指と中指をご飯側にしてつまみ口に運ぶのが、伝統的で寿司を堪能できる食べ方とされている常識が喚起される。このように、言語文脈の提示と背景知識によって、読み手はだいたいどのような手つきかが分かる。つまり、言語文脈の提示によって喚起された書き手と読み手の共有している背景知識が導入されている。

小説の現場指示の場合は現場と言っても、文章上の架空の場であるため、その持ち込み内容は前後の文脈から探ることができる。持ち込み内容には、前後の言語文脈から直接内容を持ち込むものと、言語文脈の提示から背景知識を導入し、そこから必要な内容を持ち込むものがある。

3.2.3 観念指示の文脈展開

観念指示用法は 12%で、多くは会話文や心話文の場合に見られる。堀口 (1978a) は観

観念指示について、観念に浮かべる事物を指示するときに用いるとしている。【表 1】で示したように、観念指示には「ア」しかない。談話の場合はよく「ア」の指示対象を明言しな
いときがあるが、文章の場合は常に前後の言語文脈から「ア」の持ち込み内容を探ること
ができる。

「小僧の神様」における観念指示を具体的に分析してみよう。

(5) 「中々旨かった。それはそうと、見ていると、皆こう云う手つきをして、魚の方
を下にして一ぺんに口へ抛り込むが、あれが通なのかい」

「まあ、鮪は大概ああして食うようだ」 (志賀直哉「小僧の神様」(四))

(6) とにかくあの客は只者ではないと云う風に段々考えられて来た。

(志賀直哉「小僧の神様」(八))

(5) の「あれ」は A の観念に浮かべるその前に行ったその鮪屋にいる客の鮪の食べ方
である。また、指示語「あれ」の直前の「こう云う手つきをして、魚の方を下にして一ぺん
に口へ抛り込む」という食べ方もその手がかりであると考えられる。観念指示であるが、
「こう云う手つきをして、魚の方を下にして一ぺんに口へ抛り込む」という内容を直接持
ち込んで理解しても間違いではない。つまり、A の観念に浮かべる事物ではあるが、その
持ち込み内容は先行文脈からも探ることができる。

また、(5) の「ああして」は B の観念にある動作であるが、A とその観念を共有できる
と期待して「ああして」を用いた。これも 3.2.2 で述べた鮪の食べ方を指すと理解するこ
とができる。持ち込み内容も先行文脈から探ることができるのである。

(6) の「あの客」は 5 回も現われるが、すべて仙吉の心話文にあり、仙吉の観念に浮
かべる鮪をごちそうしてくれた A のことを指す。隔たった先行文脈にあった A のことを指
していると読み手が理解するのである。

3.2.4 絶対指示の文脈展開

「小僧の神様」には絶対指示用法は 12 例で 9%を占めている。ここでは「コ」の 5 例を
挙げる。

(7) 「あの家のを食っちゃア、この辺のは食えないからネ」

(志賀直哉「小僧の神様」(一))

(8) 「この間君に教わった鮪屋へ行って見たよ」(志賀直哉「小僧の神様」(四))

(9) 「小僧は喜んだろうが、此方が冷汗ものだ」(志賀直哉「小僧の神様」(四))

(10) 「粋な人なんだ。それにしても、小僧さん、又来てくれないと、此方が困るんだからネ」
(志賀直哉「小僧の神様」(六))

(11) 仙吉は空車を挽いて帰って来た。彼の腹は十二分に張っていた。これまでも腹一杯に食った事はよくある。
(志賀直哉「小僧の神様」(八))

以上5例の絶対指示用法は(11)の「これまでも」以外は、すべて会話文に現れる。(7)の「この辺」は場所に関する用法で、「この辺」は常に話し手が近くに存在する場所を絶対的に表すものである。(8)の「この間」と(11)の「これまでも」は時間に関する用法で、「コ」はいずれも話し手の発話する時、あるいは話し手の近くの場所、すなわち現在ここを指示するのである。また、「此方」も(9)、(10)と2回現れ、話し手自身のことを意味する。

絶対指示は常に特定の対象を絶対的に指示する用法で、前後の文脈と関係がないように見える。しかし、その内実を考察すると、(7)の「この辺」は話し手である番頭がいる場所の近くの鮎屋を意味する。(8)の「この間」はAの発話時点を基準にした時間を表わし、「三」の部分の始めにAとBが「屋台の鮎」の話をする内容があり、そこから手がかりがつかめ、「この間」はその時だと分かるのである。「此方」は(9)では、話し手のAを意味するが、(10)では、その鮎屋のかみさんのことを意味する。このように、同じ「此方」であるが、それぞれの言語文脈において、具体的な意味が異なるのである。(11)の「これまでも」の「これ」は先行の文脈から、仙吉がその鮎屋で鮎を「食いたいようにして鱈腹に食う事が出来」て、「空車を挽いて帰って来」てからの時点を意味するのである。

要するに、絶対指示用法は先行の文脈(指示語と隔たった場合もある)からその持ち込み内容を見つけることができ、その内容を指示語の位置に持ち込むことができる。その持ち込みによって文脈を展開させていく。

3.3 指示語系接続詞の文脈展開

指示語系接続詞とは、「それで」「そこで」「それから」「その上」などのように指示語を語基として含んでいる接続詞のことである。指示語系接続詞と指示語の機能の違いについては、馬場(2006)と庵(2007)がすでに述べている(注2)ため、ここでは詳しく考察しない。ここまで考察してきた指示語と指示語系接続詞の共通点は持ち込み機能を持つことである。接続詞は持ち込み機能を持つということは、文脈展開機能を持つことでもある。

「小僧の神様」には指示語系接続詞が7例あり(詳細はp.155の【資料2】を参照)、そ

してすべて「ソ」である。

(12) それから二三日した日暮だった。京橋のSまで仙吉は使に出された。出掛けに彼は番頭から電車の往復代だけを貰って出た。(志賀直哉「小僧の神様」(二))

(13) 「かしこまりました。では、車へつけて直ぐお供をさせましょう」

A は先日御馳走出来なかった代り、今日何処かで小僧に御馳走してやろうと考えた。

「それからお所とお名前をこれへ一つお願い致します」金を払うと番頭は別の帳面を出して来てこう云った。(志賀直哉「小僧の神様」(五))

文脈から見れば、(12)の「それから」は「一」の部分の秤屋の店で仙吉が二人の番頭の話聞いた時(日)からという意味であるため、指示語と考えられる。それに対して、(13)の「それから」はここでは「その時から」という意味ではない。つまり指示語ではなく、抽象化して、「そして」「また」という接続詞の機能を果たしている。接続詞「それから」は添加という前後の論理関係を示すが、先行の内容を持ち込む機能があり、次の文脈へ展開していく機能が認められているのである。この場合、持ち込み内容は直接先行文脈にあるため、文脈展開への関与は文脈指示の場合に似ていると考えられる。

(14) 「粹な人なんだ。それにしても、小僧さん、又来てくれないと、此方が困るんだからネ」(志賀直哉「小僧の神様」(六))

(15) 自分が屋台鮎屋で恥をかいた事も、番頭達があのだ鮎屋の噂をしていた事も、その上第一自分の心の中まで見透して、あんなに充分、御馳走をしてくれた。

(志賀直哉「小僧の神様」(八))

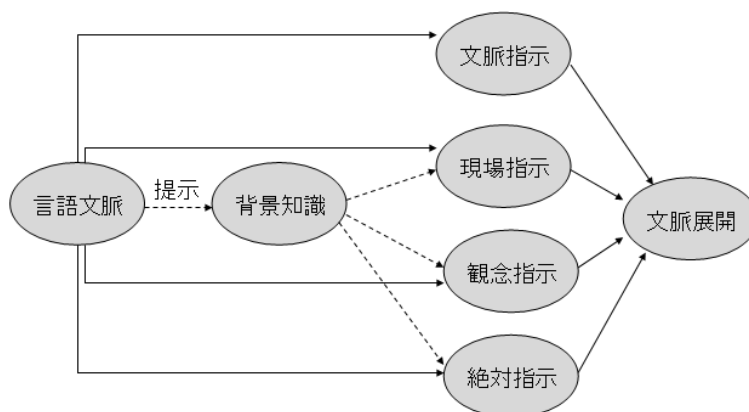
(14)の「それにしても」は、先行文脈において、かみさんは仙吉がAとは「前からお馴染」ではないことを知っているとの記述があり、話題転換として「それにしても」を用い、次の件を打ち出す。具体的な事物を指示する機能を失っていても、先行内容を持ち込む機能がある。(15)の「その上」も本当に「ものの上」という意味ではなく、「さらに」という意味で、添加の接続詞として機能している。「自分が屋台鮎屋で恥をかいた事も、番頭達があのだ鮎屋の噂をしていた事も」「あの客」は全部知っているという先行の事態を持ち込み、添加を表す接続詞「その上」を用い、次の内容とつなぐ機能を持つ。

このような添加や話題転換を示す指示語系接続詞は指示の機能が弱まり抽象化しているとはいえ、先行内容を持ち込む機能を認めることができる。文脈展開に関与する際は文脈指示に似ていると思われる(注3)。

4. 各指示用法の文脈展開への関与

以上、「小僧の神様」における指示語の各指示用法が文脈展開に関与する様子を検討してきた。その傾向をまとめると、次の【図1】のようになる。

【図1 指示語の各指示用法の文脈展開への関与】



各指示用法はほとんど言語文脈から直接持ち込み内容を探ることができるが、書き手の表現意図によっては、はっきりしない場合もある。この場合、言語文脈の提示で知識や経験などの背景知識を働かせ、必要な持ち込み内容を指示語の位置に持ち込むことができる。このようにして、指示語は言語文脈において、必要な内容を指示語の位置に持ち込み、前後の文脈との照応関係を成し、文脈展開の機能を果たすのである。特に文脈指示用法は、直接前後の文脈から必要な内容を持ち込むため、他の指示用法に比べて最も典型的に文脈展開機能を果たしていると考えられる。

一般には、このような持ち込み内容は書き手が読み手に理解してもらえらるという前提のもとに表現されるものである。しかし、書き手は聞き手が会話文に出ている指示語の指示内容が分からなくても、前後の文脈の理解には支障がないと判断する場合、指示語の指示内容が不明なこともある。

(16) 女とならんで、スコップをふるいだす。

(中略)

ほとんど、意志をもたない、自己運動だ。卵の自身の味がする、口いっぱい、あぶくだらけの唾……顎に流れ、胸にしたたっても、気にしない。

「お客さん、左手は、こう、もっと下のほうを握って……」女が、そっと注意してくれた。「そこは動かさずに、右手を梔子のようにつかえば、ずっと疲れも少なく

すみますよ。」

(安部公房「砂の女」)

「こう」も「そこ」も現場指示で、具体的にどのような動作であるかははっきり分からない。前後にもその手がかりとしての提示がない。文脈からそれはスコップを上手に使う方法だということは分かる。スコップを上手に使いこなす背景知識が導入されても、詳しい動作は分からない。しかし、具体的な動作が分からなくても、この一部分のテーマへの理解には支障がない。このような場合には、前後の文脈に指示語の持ち込み内容が見つからず、照応関係が成立しない。そのため、前後の文脈は指示語による内容上のつながりが生じず、文脈展開機能が弱まる。

5. おわりに

本章では指示語の各指示用法はいかに文脈展開機能を果たすのかについて考察した。結果として、小説という言語文脈依存のテキストにおいて、指示語の各指示用法は原則として、文脈展開に関与することができるということが指摘できる。小説において、文脈指示は直接先行詞と照応関係を成し、必要な情報を持ち込み、文脈展開機能を果たすのに対して、現場指示、観念指示と絶対指示は文脈に直接持ち込み内容が存在する場合もあれば、文脈の提示から背景知識が導入され、必要な情報を持ち込む場合もある。つまり、指示語の四用法が文脈展開に関与するあり方は、文脈から直接必要な内容を持ち込む場合と、文脈からの提示を手がかりにして背景知識が導入される場合との二通りがあるのである。

今後、指示語「コ」と「ソ」は小説において、具体的にどのように文章論的機能を果たしているのかについて、考察を進めていきたいと考える。

【注】

(1) 近年談話・文章における指示語の研究も現われてきた。永野(1972)は文や段落の接続論において、接続関係を示す直接の指標となる言語形式の一つとして指示語を挙げ、それを手がかりに文章構造を解明しようとしている。市川(1978)は指示語が前文(あるいは前節)の内容を、後文(あるいは後節)の中に持ち込んで、前後を内容的に関係づける形式であると指摘している。さらに、高崎(1990)では、「指示表現」を「前方指示」と「後方指示」とに分け、「前方指示」はとりまとめの機能を持ち、「後方指示」は、予告の機能を持つと指摘し、この指示表現によってなされる対照的な働きは、文章構造上重要な役割を果たすと述べている。佐久間(1999)は、文や段の統括力を示す言語形式を文脈展開形態と呼

び、文章の主要な文脈展開形態として接続詞、指示語などを挙げている。庵（2007）は文を越えるレベルに「テキスト」という意味的まとまりの単位が存在し、指示語によってテキストに結束性を与えていると指摘している。

(2) 馬場（2006）は「指示語系接続詞は、先行文と後続文との論理的な関係付けを明示的に表す」のに対し、「指示語はそれ自体で」「素材的内容を持ち込むだけであ」と述べている。また、「指示語系接続詞は全体で一語として扱われ」、その「指示語部分はその指示内容を具体的に先行文から取り出すことができず、また本来の指示語が持っている概念範疇もなくなっている」。それに対して、「指示語は、後続の他の要素と分離できる。」「その指示内容を具体的に先行文から取り出すことができ、概念範疇も当然持っている」と論じている。庵（2007）は「指示詞と接続詞との最大の違いは前者が指標であるのに対し、後者はそうではない」と指摘している。「指標」とは、「それ自体の指示対象を持たず、世界の何らかの要素と同定されることで指示対象が決まるものである。こうした特徴のため、指標はそれ自体の語彙的意味を持たない」。それに対して、「接続詞は通常の実質語と同じく語彙的意味を持つが、指示対象は持たない」と述べている。

(3) 本研究では、指示語と指示語系接続詞とが文脈展開における違いについて次のように考える。まず、持ち込み内容から見れば、指示語は具体的な人物・物体から事態まで様々な内容を持ち込むのに対して、指示語系接続詞は具体的な人物・物体を持ち込むことがなく、すべて事態のような比較的抽象的な内容を持ち込む。次に、指示語は具体的な人物・物体を持ち込むことができるから、語句のような短い内容から文・連文のような長い内容まで、持ち込み内容の範囲がさまざまである。それに対して、指示語系接続詞は事態のみ持ち込むため、文や連文のような長い内容を持ち込むことになる。

第三章 指示代名詞「コレ」「ソレ」の持ち込み内容の特徴

第一節 「コレ」「ソレ」の持ち込み内容

1. はじめに

これまで指示代名詞「コレ」「ソレ」についての研究は、日常会話や評論文を資料としたものが多く、小説テキストを資料とした研究は多くない。小説は普通の論文などと違い、会話文・心話文と地の文があり、登場人物や事物などの表現方法が多様である。近年、片村（1984）、金水・田窪（1992）、藤井（2004）は小説テキストの特徴を考慮した研究を行っているが（注1）、いずれも文章論的観点からの考察ではない。文章論的観点からの考察として、佐久間（2002）は、指示語を文章中の連文や段（注2）の大小様々の意味のつながりとまとまりを表す言語形式の一つとし、文脈展開形態と呼んでいる。また、指示語は「文の文脈」を越える「文章の文脈」の成立に関与し、文脈展開機能を有し、特に「段」の統括の観点、つまり、文章や段において、指示語が意味上、文章や段全体を締めくくる機能を持つという観点から指示語の文脈展開機能を分析している。馬場（2006）は、理解過程の立場に立ち、「指示語による文脈展開は、すでに存在する情報を参照先として探査する指令と、その指令に基づく持ち込み内容の特定、そして、その持ち込み内容と指示語を含む言語的文脈との連結によって成立する」と述べ、指示語の文脈展開機能を認めている。

指示語は必要な内容を自らの位置に持ち込むことによって、文脈展開機能を果たしている。筆者は、指示語の持ち込み内容の範囲、指示語と持ち込み内容の距離、指示語の持ち込み内容の変容、そして指示語の後続語句という四つの側面から文脈展開機能を観察することができると考えた（注3）。本節では、小説「清兵衛と瓢箪」を例として、持ち込み内容とその変容の側面から「コレ」と「ソレ」の違いを考察する。必要に応じて、ほかの20編の小説（注4）のデータを利用することもある。「清兵衛と瓢箪」の引用例は岩波文庫の『小僧の神様』（2002）による（注5）。ほかの引用例はすべてCD-ROM版『新潮文庫の100冊』による。

2. 「コレ」「ソレ」の持ち込み方

本節では小説の基盤である地の文に出現する文脈指示の「コレ」「ソレ」の文脈展開機能を考察する。小説テキストにおいて、「コレ」「ソレ」は前後の文脈からどのような内容どのように当該位置に持ち込み、どのように文脈を展開させていくのかについて具体的に説明する必要がある。

まず持ち込み内容がどのように指示語の位置に持ち込まれるかについて見ておく。「コレ」と「ソレ」は代名詞であるから、文の成分として体言の働きをする。ゆえに、名詞や名詞句などの体言類を「コレ」「ソレ」の位置に持ち込む。持ち込むとは、理解過程における行為で、読み手（書き手も含む）が指示語を見た時、その指示語は何を指示しているか前後の文脈から必要な内容を「コレ」「ソレ」の位置に持ち込んで理解することである。

地の文における文脈指示は「清兵衛と瓢箪」において、「コレ」は3例で、「ソレ」は19例であり、「ソレ」が多用されることが分かる（注6）。結果として、「コレ」も「ソレ」も代名詞として持ち込み方は同じであるが、以下は「ソレ」を例にとって、持ち込み内容の持ち込み方について具体的に検討する。

まず「ソレ」が語レベルの名詞を持ち込む場合を見てみよう。

- (1) これほどの凝りようだったから、彼は町を歩いていれば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でもまた専門にそれを売る家でも、凡そ瓢箪を下げた店といえは必ずその前に立って凝っと見た。 (志賀直哉「清兵衛と瓢箪」p. 79)

「それ」は前の段落に出ている「瓢箪」そのものを承け、「瓢箪」はどのような様子であるかなどの相関情報に触れておらず、名詞「瓢箪」を変容せずにそのまま持ち込んでいる。

次に、句レベルの名詞を持ち込む場合を見てみよう。

- (2) さて、教員は清兵衛から取り上げた瓢箪を穢れた物でもあるかのように、捨てるように、年寄った学校の小使にやってしまった。小使はそれを持って帰って、くすぶった小さな自分の部屋の柱へ下げておいた。

(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」p. 84)

(2)の「それ」は前文の句レベルの名詞である「取り上げた瓢箪」をそのまま持ち込む。これは(1)と同様に名詞相当の成分を抽出して変容せずに持ち込む、いわゆる抽出指示である。

では、照応詞が名詞でない場合、どうなるのであろうか。

- (3) 翌朝は起きると直ぐ彼は鐘を開けて見る。瓢箪の肌はすっかり汗をかいている。

彼は厭かずにそれを眺めた。

(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 79)

(3) の「それ」は「瓢箪」という語レベルの名詞のみを持ち込むのではなく、「肌はすっかり汗をかいている」「瓢箪」を持ち込むと理解されるのである。前文の先行詞である「瓢箪の肌はすっかり汗をかいている」を加工して、必要に応じて切り取って整理して名詞句「肌はすっかり汗をかいている」「瓢箪」に変容してから、「それ」の位置に持ち込むと解される。先行文脈から必要な内容を抽出して加工するという変容をしている。

(4) こんな話を聞きながら清兵衛は心で笑っていた。馬琴の瓢というのはその時の評判な物ではあったが、彼はちょっと見ると、——馬琴という人間も何者だか知らなかったし——すぐ下らない物だと思ってその場を去ってしまった。

「あの瓢はわたしには面白うなかった。かさ張っとるだけじゃ」彼はこう口を入れた。

それを聴くと彼の父は目を丸くして怒った。

「何じゃ、わかりもせん癖して、黙っとれ！」(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 81)

(4) の「それ」は前の「あの瓢はわたしには面白うなかった。かさ張っとるだけじゃ」という発話内容を名詞句化して、名詞として自らの位置に持ち込み、目的語として働くのである。さらにいえば、そのような発話の内容(趣旨)を読み手は理解し、その不満の言葉を要約するという変容をしているといってもいい。

このように、「コレ」「ソレ」は前後の文脈にある名詞あるいは名詞句をそのままか、または他の成分を名詞化するか長い内容を要約して自らの位置に持ち込むのである。

3. 「コレ」「ソレ」の持ち込み内容

3.1 「清兵衛と瓢箪」における「コレ」「ソレ」の持ち込み内容の偏り

「コレ」「ソレ」の持ち込み内容の特徴について、まず以下のような例を見てみよう。

(5) 最初茶渋で臭味をぬくと、それから父の飲みあました酒を貯えておいて、それで頻りに磨いていた。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 78)

(6) ある日彼はやはり瓢箪の事を考え考え浜通りを歩いていると、ふと、眼に入った物がある。彼ははっとした。それは路端に浜を背にしてズラリと並んだ屋台店の一つから飛び出して来た爺さんの禿頭であった。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 78)

(7) 清兵衛はそれを瓢箪だと思ったのである。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 78)

(8) 手入れが済むと酒を入れて、手拭で巻いて、罐にしまつて、それごと炬燵へ入れて、そして寝た。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 79)

- (9) 「子供じゃけえ、瓢いうたら、こういうんでなかにやあ気に入らんもんと見えるけのう」大工をしている彼の父を訪ねて来た客が、傍で清兵衛が熱心にそれを磨いているのを見ながら、こう言った。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 80)
- (10) 間もなく、赤い顔をしてハアハアいいながら還って来ると、それを受け取ってまた走って帰って行った。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 82)
- (11) しまいには時間中でも机の下でそれを磨いている事があった。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 82)
- (12) それを受持の教員が見つけた。修身の時間だっただけに教員は一層怒った。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 82)
- (13) 清兵衛の父はふと柱の瓢箪に気がつくと、玄能を持って来てそれを一つ一つ割ってしまった。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 84)
- (14) 骨董屋はためつ、すがめつ、それを見ていたが、急に冷淡な顔をして小使の前へ押しやると、「五円やったら貰うところ」といった。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 84)
- (15) 結局五十円で漸く骨董屋はそれを手に入れた。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 84)
- (16) だから仮令瓢箪を売る家はかなり多くあったにしろ、殆ど毎日それを見歩いている清兵衛には、恐らく総ての瓢箪は眼を通していたろう。(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 pp. 79-80)

以上の(5)～(16)の12例の「ソレ」は、(5)は「酒」、(6)は「眼に入った物」、(7)は「爺さんの禿頭」、(8)は瓢箪の入った「罐」、(9)～(15)は「瓢箪」、(16)は「瓢箪を売る家」を指し示しており、いずれも具体的に形を持ち、一定の空間を占めている物体である。2.で例として挙げた(1)(2)(3)の「ソレ」も、同様に形を持ち、一定の空間を占めている物体である。要するに、「清兵衛と瓢箪」における19例の「ソレ」のうち、15例は具体的な物体を持ち込んでおり、高い比率であることが分かる。

しかし、「ソレ」は物体のみならず、事柄を持ち込むこともある。次は小説の冒頭である。

- (17) これは清兵衛という子供と瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が断れてしまったが、間もなく清兵衛には瓢箪に代わる物が出来た。それは絵を描く事で、彼はかつて瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している…

(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 p. 78)

ここの 2 例の「それ」はそれぞれ「瓢箪に代わる物」、「絵を描く事」を意味している。「瓢箪に代わる物」の「物」はここで物体を意味するのではなく、行為・事態を意味している。また、先の (4) の「ソレ」も物体ではなく、発話内容を持ち込んでいる。

それに対して、「コレ」はどんな内容を持ち込むのであろうか。「清兵衛と瓢箪」において、「コレ」には具体的な物体を指し示す例は一つもない。文脈指示の「コレ」は総計 3 例で、先に見た例 (17) の「これ」はこれから語る物語全体を意味する。ほか 2 例はそれぞれ発話内容と「絵を描く事」を指示している (注 7)。いずれも具体的な物体ではなく、物語という出来事や行為、発話内容などを指し示している。

以上は「清兵衛と瓢箪」の用例で、「ソレ」は行為・事態・発話内容を持ち込むことがあるが、具体的な物体を持ち込む例が多く見られる。それに対して、「コレ」の持ち込み内容には物体がなく、発話内容や行為・事態のみある。

3.2 カテゴリー別に見られる「コレ」「ソレ」の持ち込み内容

3.1 の「清兵衛と瓢箪」における「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容の傾向について、ほかの 20 編の小説を検討してみる (20 編の小説におけるすべての指示語「コレ」「ソレ」の詳細は p. 155 の【資料 4】を参照)。「コレ」「ソレ」の持ち込み内容は次のようなカテゴリーに分類する。

人物：名前や性別や官職名などで人間を表現するものである。

物体：「鳥」「雪」など有形で具体的なものである。

行為・心情：行為とは「笑う」「行く」など具体的な動作の表現で、心情とは喜びや苦悶など心理的活動の表現である。

事態・様相：事態とは物事の状態やなりゆきで (事柄や出来事も含む)、様相とは物事のありさまや様子などである。

発話等の内容：発話、考え、手紙などの具体的な内容である。

その他：「力」「関係」など以上の五種類のカテゴリー以外のものである。

上記のカテゴリー別に調査すると、その結果は【表 1】のようになる。

まず「コレ」「ソレ」別に見てみる。「コレ」において、「事態・様相」の場合が 41% と最も多く、次に「物体」が 16% で、「人物」が 15% と続く。それに対して、「ソレ」において、最も多いのは「物体」(30%) の場合で、次に多いのは「事態・様相」(27%) で、「行為・心情」(21%) は第三位を占めている。

【表1 「コレ」「ソレ」の持ち込み内容】

	人物	物体	行為・心情	事態・様相	発話等の内容	その他	合計
コレ	22(15%)	24(16%)	14(10%)	61(41%)	15(10%)	11(7%)	147(100%)
ソレ	23(4%)	166(30%)	118(21%)	151(27%)	33(6%)	68(12%)	559(100%)

「コレ」「ソレ」の差が特に目立つ項目は、「人物」「事態・様相」と「物体」「行為・心情」の場合である。「人物」を持ち込む場合、「コレ」は22例で、「ソレ」は23例であり、用例数がほぼ同じぐらいである。「コレ」「ソレ」の総数の差（「ソレ」は「コレ」の約4倍となっている）から見れば、非常に意義のある現象である。要するに、小説において、「人物」を持ち込む場合、「コレ」が多用され、登場人物に焦点を当てて、身近なものとして現場的に表現されることが多いと考えられる。また、「事態・様相」を持ち込む場合、比率から見れば、「コレ」(41%)は「ソレ」(27%)より多い。しかし、「物体」を持ち込む場合、「ソレ」が166例で「コレ」(24例)の7倍ぐらいになっており、圧倒的に多い。小説の中に客観的な存在である具体物に関して、中立の「ソレ」が多く用いられると考えられる。また、具体的な「行為・心情」を持ち込む場合、「ソレ」(118例)が「コレ」(14例)の8倍強となっており、「ソレ」が多用される傾向が見られる。

以上の結果は「清兵衛と瓢箪」の傾向と似ており、小説一般の傾向であると考えられる。

3.3 カテゴリーと持ち込み内容の長さ

3.2 で見た各カテゴリーの持ち込み内容は、表現される言語単位の長さや密接に関わる。カテゴリーのみならず、言語単位の長さも同時に見ることで、より具体的に持ち込み内容の特徴を把握できる。

本研究で「コレ」「ソレ」は持ち込み内容によって表現の言語単位の長さが異なることを考慮し、『日本語学研究事典』(2007)を参考にして、言語単位の基準を語句、節、文、連文という四つのレベルに規定する。すなわち、「犬」「空気」「旅行者」のような名詞と、「私の本」「白い雪」「教室に来た人」のような名詞中心の名詞句を合わせて語句という。節は「今日は雨なので、もう出かけない」のような主節、従属節のことである。文は最後に「。」、「?」、「!」をつけた一文のことで、連文は二文以上のいくつかの文からなっているまとまりである。文章において、持ち込み内容は語句・節・文・連文といずれかの言語単位で

表すことができる。「コレ」「ソレ」はその持ち込み内容を表現している言語単位の内容を必要に応じて指示語の位置に持ち込む。指示語の持ち込み内容の言語単位は文以下の語句や節である場合もあれば、文や連文、章のような大きなまとまり、ないし文章全体を持ち込む場合もある。

持ち込み内容のカテゴリーとその持ち込み内容を表現する言語単位との間に関わりがあると考えられる。

「清兵衛と瓢箪」において、「ソレ」の15例の物体を持ち込む場合では、11例は「瓢箪」や「瓢箪を売る家」など名詞か名詞句のような語句を持ち込んでいる。つまり、具体的な物体を表現する場合、名詞や名詞句など語句の言語レベルで示す場合が多い。一方、発話の内容や事態を表現する場合、たとえば、(17)の「これ」は文章全体を意味し、(4)の「それ」は長い連文からなっている発話内容を持ち込んでいる。事態や発話内容のようなものを表現するときは、文や連文のような言語レベルで示される場合が多い。

「清兵衛と瓢箪」において、以上のような持ち込み内容のカテゴリーとその表現される言語単位とは密接な関係がある傾向が見られるが、このような傾向を踏まえて、「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容の傾向を具体的に検討することにする。小説一般の傾向を考察するために、ほかの20編の小説を資料とし、上記六種類のカテゴリー別にその持ち込み内容の言語単位を調査したところ、【表2】のような結果となる。

【表2 「コレ」「ソレ」の持ち込み内容とその長さ】

	人物		物体		行為・心情		事態・様相		発話等の内容		その他		合計	
	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ
語句	9	15	21	141	2	27	0	7	0	0	0	33	32(22%)	223(40%)
節	2	4	2	12	7	65	8	29	1	4	1	15	21(14%)	129(23%)
文	6	3	1	12	4	24	20	71	8	19	7	19	46(31%)	148(26%)
連文	5	1	0	1	1	2	33	44	6	10	3	1	48(33%)	59(11%)
合計	22	23	24	166	14	118	61	151	15	33	11	68	147(100%)	559(100%)

持ち込み内容の長さから見れば、「コレ」の場合は、文と連文レベルの言語単位の比較的長い内容を持ち込む例が多い。それに対して、「ソレ」の場合は、語句レベルの内容を持ち込む例が最も多いが、節と文レベルの内容を持ち込む例も多く見られる。

持ち込み内容のカテゴリーと持ち込み内容の長さとの関わりについて、「コレ」と「ソレ」はいずれも持ち込み内容が「人物」「物体」である場合、語句レベルの内容を持ち込むことが多い。「行為・心情」の場合、節レベルの内容が最も多い。「事態・様相」「発話等の内容」の場合、文と連文レベルの内容を持ち込む例が最も多く見られる。つまり、持ち込み内容が同じカテゴリーであれば、「コレ」「ソレ」を問わず、その持ち込み内容の長さ（言語単位）もほとんど同じ傾向である。

以下は「コレ」「ソレ」の持ち込み内容を「人物」「物体」「行為・心情」「事態・様相」「発話等の内容」という五種類のカテゴリーに分けて、その持ち込み内容を表現する言語単位の長さをそれぞれ具体的に考察する。なお、「その他」の場合は雑なもので、ここで略すことにする。

3.3.1 人物を持ち込む場合

名前や性別や官職名などで表わされた人物を持ち込む場合、「コレ」「ソレ」両方とも語句レベルの内容を持ち込む例が多いが、「コレ」は文と連文レベルの内容を承け取る例も少なくない。

(18) 浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行った。さて潮を汲む場所に降り立ったが、これも汐の汲みようを知らない。心で心を励まして、ようよう杓を卸すや否や、波が杓を取って行った。
(森鷗外「山椒大夫」)

「これ」はここで先行の一文である「浜辺に往く姉の安寿は、川の岸を北へ行った」ではなく、「姉の安寿」を意味する。「浜辺に往く」や「川の岸を北へ行った」という動作とはあまり関わっておらず、「安寿」という人物に焦点を当てて表現する。つまり語句「安寿」という内容を持ち込むのである。

(19) 里子には父親も母親もあった。だが、慈念にはそれがなかった。
(水上勉「雁の寺」)

「それ」は先行する文の中の語句「父親」「母親」を意味し代行するのである。「これ」「それ」を用いて人物を指示する時、その人物がどのような様子であるかどのような性質を持っているかに注目せず、その人物そのものを持ち込む場合がある。しかし、文と連文単位で人物を持ち込む場合はどうなるのであろうか。

(20) 背を返し、小兵衛が立ち去って行った。足どりが何かもつれるように見えた。大治郎は、むしろ茫然と、これを見送ったのみである。

(池波正太郎「まゆ墨の金太郎」)

ここで「これ」は「小兵衛」という人物を対象として指示しているが、「小兵衛」のみならず、前の二文全体を変容して「背を返し」「立ち去って行っ」て「足どりが何かもつれるように見えた」「小兵衛」を持ち込むのである。このように連文という言語単位で人物を表現する場合、その人物の様子について叙述した内容を承けてその様子を持っている人物を持ち込む。

上記のように、人物を持ち込む場合、傾向は二通りに分かれる。一つは(18)(19)のようにその人物のみ焦点を当て、その人物についての特性や様子を持ち込まない場合には、語句の言語単位で表現する例が多いことである。もう一つは(20)のようにその人物の様子について叙述し、その様子を持っている人物を持ち込む場合、文と連文レベルで表現する例も少なくないことである。後者の場合、その人物の様子などを一緒に受け取り、文と連文レベルの内容を持ち込むのは「コレ」のほうが用いられやすいと考えられる。

3.3.2 物体を持ち込む場合

「鳥」「雪」など有形で具体的な物体を持ち込む場合、【表2】に見られるように、「ソレ」(166例)が多用されることが分かる。小説テキストにおいて、一般的に、物体は人物のような主な描写対象ではなく、物語世界で客観に存在するものとして、語り手が中立的な態度で描写するため、中立の態度を示す「ソレ」が多く用いられていると考えられる。

また、持ち込み内容の長さから見れば、「コレ」と「ソレ」はいずれも語句の言語単位で表現される例が最も多い。次の例を見てみよう。

(21) 出来る事なら、何か突然故障が起って一旦、芋粥が飲めなくなってから、又、その故障がなくなって、今度は、やっとこれにありつくと云うような、そんな手続きに、万事を運ばせたい。(芥川龍之介「芋粥」)

(22) 俊介は課長が投げてよこす書類綴りを手に受けた。繰ってみると、どの報告書にもそれを送って来た至急便の封筒がついていた。(開高健「パニック」)

(21)の「これ」は先行文脈にある「芋粥」を意味している。「芋粥」に関する「飲めなくな」るなどの叙述とは関係がない。「芋粥」という物体を表現する語句だけを持ち込んでいる。(22)の「それ」は「報告書」という物体を指示しており、しかも「報告書」という語のみ持ち込んでいる。

以上物体を持ち込む場合は、「コレ」も「ソレ」も語句レベルの内容を持ち込む例が圧倒

的に多いことが分かる。小説において、客観的な存在である物体を簡潔に表現し、基本的に「ソレ」で指示しやすい傾向があると考えられる。

3.3.3 行為・心情を持ち込む場合

「笑う」「行く」などの具体的な動作や喜び、愛などの具体的な心理的活動を持ち込む場合、「ソレ」は118例で、「コレ」の8倍強になっている。小説において、行為・心情は物語の進行の中心的な要素であり、基本的な「ソレ」を用いて、物語を進行させるからであると思われる。

また、持ち込み内容の長さから見れば、「コレ」も「ソレ」も節というレベルの言語単位の内容を持ち込むことが多い。それは動詞や形容詞で行為・心情を表現することが多く、動詞や形容詞が節という言語単位になりやすいからである。

(23) 私は、ふいに顔が汗ばむような気がし、おどけて、ペン軸で志乃の頬を突つたが、それがかえって私を志乃へ駆り立てた。私は、いきなり志乃の首に腕をかけると、畳の上にひき倒した。
(三浦哲郎「初夜」)

(24) 伊木は、彼女について或る事柄を聞き知っていた。彼女が伊木の父親を愛したことがある、ということである。それは、深く入り組んだ関係ではなかったようだ。
(吉行淳之介「樹々は緑か」)

(23) の「それ」は先行の節「おどけて、ペン軸で志乃の頬を突つた」という動作を表現する内容を持ち込んでいる。(24) の「それ」は先行の節「彼女が伊木の父親を愛したことがある」という心理的活動を含む内容を持ち込んでいる。

「行為・心情」は節レベルの言語単位で表現されることが多く、「物体」の場合と似ており、「ソレ」が用いられやすいと考えられる。

3.3.4 事態・様相を持ち込む場合

事態・様相は、一点に焦点を当てた具体的な動作ではなく、場面を切り取って全体的な物事の状態やなりゆきを持ち込む場合である。この場合、「コレ」は「ソレ」とほとんど同じ傾向で、文と連文レベルの内容を持ち込む例が多い。

(25) ところが二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、嘗、

内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかった下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで聞いていても、内供が後さえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。

(芥川龍之介「鼻」)

(26) これも牛乳のような色の寒い夕靄に包まれた雷電峠の突角がいかつく大きく見え出すと、防波堤の突先きにある燈台の灯が明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それを見ると、君と云わず人々の胸の中には、今日も先ず命は無事だったという底深い喜びがひとりでに湧き出して来て、陸に対する不思議なノスタルジヤが感ぜられる。(有島武郎「生まれ出づる悩み」)

(25) の「これ」は先行の「それは折から～一度二度の事ではない」という事実を表現する長い連文を持ち込んでいる。また(26)の「それ」は先行の一文、つまり「これも牛乳～照らし始める」という海から帰って、陸地に近いところで見ただ全体的な様子を持ち込んでいる。事柄のなりゆきや事物の様相のような内容は短い言葉で説明しにくいので、文や連文レベルの長い内容で表現する傾向があると考えられる。

「事態・様相」の場合、「コレ」も「ソレ」も文と連文レベルの長い内容を持ち込むことが多いが、詳しく見てみると、「コレ」において、連文レベルの内容が最も多いのに対して、「ソレ」は文レベルの内容が最も多く見られる。同じ「事態・様相」のカテゴリーであっても、「コレ」は「ソレ」より持ち込み内容は比較的長い言語単位で表現されるものに偏る傾向があると考えられる。

3.3.5 発話等の内容を持ち込む場合

小説には、発話や考えや手紙の具体的な内容が述べられ、「コレ」「ソレ」で承けてその内容を持ち込む場合がある。この場合、「コレ」と「ソレ」のいずれも最も多い例は文レベルのもので、次いで多いのは**連文**レベルの内容である。つまり、発話などの内容を表現するとき、一般的に情報量が多いので、文と連文のような長い言語単位で表現することが多いからである。次の例を見てみよう。

(27) 三杯目のコップがつかれたとき、女は突然こういった。

「先生、しるしとは何のことでしょう。」

これは貧生にむかっていったようであった。 (石川淳「変化雑載」)

「これ」は先行の「先生、しるしとは何のことでしょう。」という女の発話内容を持ち込んでいる。文レベルの持ち込み内容である。また、次のように長い連文で表現された手紙の内容を持ち込む例もある。

(28) 堯は母からの手紙を受け取った。

「延子をなくしてから父上はすっかり老い込んでおしまいになった。お前の身体も普通の身体ではないのだから大切にしてください。もうこの上の苦勞はわたしたちもしたくない。

わたしはこの頃夜中なにかに驚いたように眼が醒める。頭はお前のことが気懸りなのだ。いくら考えまいとしても駄目です。わたしは何時間も眠れません」

堯はそれを読んである考えに悽然とした。 (梶井基次郎「冬の日」)

「それ」は「延子～眠れません」までの手紙の長い内容を承けており、段落を越えた長い内容を持ち込んでいる。

「発話等の内容」を持ち込む場合、情報量が多く、「コレ」と「ソレ」はいずれも文と連文レベルの長い言語単位の内容を持ち込む傾向が見られる。

4. まとめ

以上、「人物」「物体」「行為・心情」「事態・様相」「発話等の内容」を言語単位によって分析し、「コレ」と「ソレ」の傾向を比較した。「コレ」「ソレ」を問わず、持ち込み内容が同じカテゴリーであれば、持ち込み内容の長さ（言語単位）もほとんど同じ傾向であることが分かった。その結果は以下のようにまとめられる。

- 1) 持ち込み内容のカテゴリーにおいて、「コレ」は「事態・様相」など比較的抽象的なものが多いほか、物語で叙述の焦点になりやすいため、具体的な「人物」を持ち込むことも比較的多い。それに対して、「ソレ」は「物体」また「行為・心情」など具体的なものや動作を持ち込みやすい。
- 2) 持ち込み内容の長さにおいて、「コレ」は文と連文レベルの長い内容を持ち込みやすいのに対し、「ソレ」は連文レベルの長い内容を持ち込むことが少ない。
- 3) 「ソレ」の持ち込み内容は、語句や節、文レベルの比較的短い内容で表されることの多い「物体」「行為・心情」などで、具体的なものを持ち込みやすい。「コレ」の持ち込

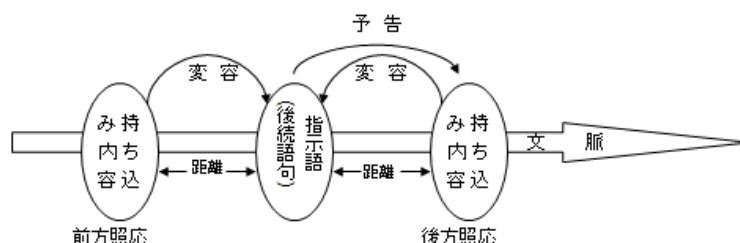
み内容は、文か連文レベルの長い内容で表されることの多い「事態・様相」「発話等の内容」のようなより抽象的なものとなりやすいと考えられる。

この結果から「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容とその長さに相関性があることが見出され、また「コレ」と「ソレ」の使用傾向の差異が見出された。ただし、これは持ち込み内容とその長さを現象として捉えたに過ぎず、その背景に働く原理はまだ十分に検討されていない。たとえば「物体」を持ち込む場合、基本的に「ソレ」が用いられやすい傾向があるが、少数でありながら「コレ」も 24 例見られる。「コレ」と「ソレ」がどのような選択基準で用いられるかはまだ明らかにされていない。今後さらに「コレ」と「ソレ」の選択の基準を別の観点から追及する必要があるだろう。

【注】

- (1) 片村（1984）は小説の文章において、文脈指示であっても、「コ」は現場指示の機能を果たし、「ソ」は現場指示的な機能を持たず、文脈指示の機能のみ担うと述べている。金水・田窪（1990）は「視点遊離のコ」の用法を提起し、小説などの文章に話し手の視点を自由に話中の登場人物に近づけることができると指摘している。藤井（2004）は視点という角度から物語における指示語を検討し、「この」は描出表現に用いられやすいと指摘している。いずれも小説テキストの特徴を考慮して行われた指示語の研究である。
- (2) 市川（1978）は「文段」という言語単位を設定しているが、佐久間（2000）は談話の「話段」という概念を加えて、文章・談話を直接に構成する言語単位を「段」という概念を規定している。
- (3) 第一章において、文脈展開機能の定義づけとその四つの側面を指摘し、次の図で示した。

【附図 1 指示語の文脈展開機能にかかわる側面】



- (4) 調査資料は以下の通りである。（総計 20 編、約 35 万字。すべて CD-ROM 版『新潮文庫の

100冊』にある中・短編小説である。)

- ①「山椒大夫」(森鷗外、1915年)、②「高瀬舟」(森鷗外、1916年)、③「鼻」(芥川龍之介、1916年)、④「芋粥」(芥川龍之介、1916年)、⑤「生まれ出づる悩み」(有島武郎、1918年)、⑥「赤西蠣太」(志賀直哉、1918年)、⑦「小僧の神様」(志賀直哉、1920年)、⑧「売色鴨南蛮」(泉鏡花、1920年)、⑨「ある心の風景」(梶井基次郎、1926年)、⑩「冬の日」(梶井基次郎、1927年)、⑪「焼跡のイエス」(石川淳、1946年)、⑫「変化雑載」(石川淳、1948年)、⑬「パニック」(開高健、1957年)、⑭「不意の唾」(大江健三郎、1958年)、⑮「樹々は緑か」(吉行淳之介、1960年)、⑯「雁の寺」(水上勉、1961年)、⑰「初夜」(三浦哲郎、1961年)、⑱「焼土層」(野坂昭如、1968年)、⑲「まゆ墨の金ちゃん」(池波正太郎、1972年) ⑳「芸者変転」(池波正太郎、1972年)
- (5)「清兵衛と瓢箪」という作品は『小僧の神様』(岩波文庫 2002年)において、「瓢箪」の「箪」は旧字体の「箪」で表記されている。本節の考察は表記についてではなく、指示語についてであるため、「箪」はすべて新字体の「箪」に改める。
- (6)「清兵衛と瓢箪」において、「ソレ」(19例)は「コレ」(3例)の6倍強であり、ほかの20編の小説の比率(559(ソレ)/147(コレ)=4倍弱)よりやや高い。「清兵衛と瓢箪」における「コレ」「ソレ」の詳細はp.155の【資料3】を参照。
- (7)「清兵衛と瓢箪」において、「コレ」は総計3例ある。(17)以外の2例は次のようである。
- ①「そしたら、きっと誰にも売らんといて、つかあせえのう。すぐ銭持って来やんすけえ」くどく、これを言って走って帰って行った。
 - ② 清兵衛は今、絵を描くことに熱中している。これが出来た時に彼にはもう教員を恨む心も、十あまりの愛瓢を玄能で破ってしまった父を恨む心もなくなっていた。

第二節 語り手の視点と「コレ」「ソレ」

—「芋粥」を通して—

1. はじめに

指示語の文脈指示用法については、これまで主に日常会話や評論文が対象とされ、小説テキストにおける指示語に関する研究はあまりされていない。小説は書き手がそのまま表現主体となる論文などと違い、書き手が生み出した語り手の視点で登場人物や事物を見ている点に特徴がある。小説の地の文の視点の特質について、藤井（2004）は次のような点を挙げている。

- 1、表現者（作者）ではなく、語り手の視点から表現されること
- 2、語り手と作中の人物や物事との距離は自由に変わりえること
- 3、語り手の視点は、登場人物の視点にも自由に移動しえること

小説テキストにおいて、視点という角度から指示語を考察する試みも出てきた。金水・田窪（1990）が「視点遊離のコ」の用法を提起し、小説などの文章に語り手の視点を自由に話中の登場人物に近づけることができると指摘している。これは上記の藤井が述べた3の特質と一致している。メイナード（2006）は物語において、指示表現は語り手の描写方法のストラテジーとして選択されており、「コ」は心理的な近さを表現して物語の内部構成の操作に力を発揮することができると論じている。ただし、メイナードの言う視点は認識論の中のそれであり、しかも、物語のジャンルのみならず、説明文や論文なども含めたディスコースの表現性という観点からの考察なので、小説の語り手の視点からの観点とは少し異なる面がある。また、中村（2010）は、表現主体の存在を映し出す言語的条件の一つとして指示語を捉え、指示語と視点の位置との関係を考察しようとしている。このように文学作品の視点と指示語の関わりに着目する理論的な研究がいくつか見られるが、これを作品分析に基づいて裏付ける実践的な考察はまだ十分ではない。藤井（2004）は語り手の視点を四分類し、「羅生門」における指示語と視点との関わりを検討し、「その」は主にディエゲーシス的な表現を作るのに対し、「この」は主にミメシス的な内容を作ると実践的な考察をしている（注1）。その結論は「羅生門」を対象とした考察なので、他の小説を資料として検証する必要があると考える。

筆者は、小説テキストにおける指示語の役割を考察することを大きな課題としている。本節ではその一環として芥川龍之介の「芋粥」を題材として、「コレ」「ソレ」を取り上げ、視点との関わりや持ち込み内容の側面から、小説テキストにおける使用の特徴を明らかにすることを目的とする。「芋粥」を資料とするのは、物語世界に視点を置いた小説が多いが、この小説においては、語り場から解説的に事物について紹介する叙述が多く見られるため、語り場の視点を含めた考察が可能であることによる。なお、必要に応じて、ほかの小説のデータを利用する(注2)。

2. 視点の分類

本節では小説に見られる語り手の視点ごとに指示語「コレ」「ソレ」との関わりを見ていく。視点についての議論は多く行われているが、統一した定義や分類はない。ここでは、藤井(2004)(2005)、山岡(2005)と中村(2010)の視点分類についての先行研究を、特に藤井(2004)の分類方法(注3)を参考に、指示語「コレ」「ソレ」の性質を配慮して、語り手の視点を分類する。

小説において、語り手が事態を認知し表現する位置、いわゆる視点は二つに分けることができる。I、語り場、つまり物語世界の外にある II、物語世界の中に入り込んで事物を見る場である。詳しく分類すると、

I 語り場に視点がある場合

- ①物語世界を現場的あるいは主観的に捉えた場合
- ②物語世界を概括的あるいは客観的に捉えた場合

II 物語世界に視点が入り込んだ場合

- ③物語世界を現場的あるいは共感的な視点で捉えた場合
 - a 人物の身近に視点を置いて継起的動作を描写する場合
 - b 人物の視点に共感する内容を描写する場合
- ④物語世界を概括的あるいは客観的な視点で捉えた場合
 - a 事件を大きく進める動作を描写する場合
 - b 事件に関わる事項を解説・説明する場合

となる。以下、I①、②、II③a、③b、④a、④bの六種類について、「コレ」「ソレ」の実例を挙げて説明しておく。なお、各種類において、典型的で分かりやすい例を挙げるために、ほかの小説にある例を挙げる場合もある。

2.1 I 語りの場に視点がある場合

①物語世界を現場的あるいは主観的に捉えた場合

例： これは清兵衛という子供と瓢箪との話である。

(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」)

志賀直哉の小説「清兵衛と瓢箪」の冒頭の一文である。「これは～である」の構文は「これ」についての解説文であり、物語世界に入る前の語り場において物語全体を指示している表現である。語り手が読み手を意識して、自分の認識の範囲内にある事物として主観的に提示し、語り出す。これはI①の典型的な例であるといえる。

②物語世界を概括的あるいは客観的に捉えた場合

例： 最後に蠣太と小江との恋がどうなったかが書けるといいが、昔の事で今は調べられない。それはわからず了いである。

(志賀直哉「赤西蠣太」)

これは「赤西蠣太」の最後の一段落である。「それ」は「蠣太と小江との恋がどうなったか」という事柄を指示している。語り手が語り場で物語世界の事柄を客観的に捉えたものとして提示している。

①と②は共に語り場での視点による表現と解釈され、例文のように、解説的な名詞文や形容詞文に多く見られる。ただし、両者において、語り手が表現事物に対する態度が異なっている。①は語り手が表現事物に関して、主観的に読み手に説明するものであるのに対して、②は語り手が表現事物に関して、客観的にその事物を示すものである。

2.2 II 物語世界に視点が入り込んだ場合

2.2.1 II ③物語世界を現場的あるいは共感的な視点で捉えた場合

③a 人物の身近に視点を置いて継起的動作を描写する場合

例： 彼は胸をどきどきさせて、

「これ何ぼかいな」と訊いて見た。婆さんは、

「ぼうさんじゃけえ、十銭にまけときやんしょう」と答えた。彼は息をはずませながら、

「そしたら、きっと誰にも売らんといて、つかあせえのう。すぐ銭持って来やんすけえ」くどく、これをいって走って帰って行った。

(志賀直哉「清兵衛と瓢箪」)

この例では、「訊いて見た」、「答えた」を承けて、清兵衛がそう「行って走って帰って行った」というように、動作が次から次へと継起的に起こっている。この場合、動作が次々起こり、前後にも時間的に近いのである。この中に用いられた「これ」は物語の現場で語り手が清兵衛のすぐそばに立って、その場を見ているような視点で、現場を迫真的に表現する効果を上げている。II③a の典型例である。この場合、継起的な動作の描写であるため、動詞文に多く見られる。

③b 人物と視点を共有して見た内容を描写する場合

例： 彼は何か妙にどきどきした。それをおさえようとしても何処へ力を入れていいか解らなかつた。今にも小江が見えたら機会を逃さずこれを渡さなければならぬ。彼はそう思って手紙を握ったままその手を袴の割れ目に入れて待った。

(志賀直哉「赤西蠣太」)

この例文は赤西蠣太が小江に艶書を渡そうと思っているときの描写であり、「これ」は小江への「艶書」を指し示している。「彼は何か妙にどきどきした。それをおさえようとしても何処へ力を入れていいか解らなかつた」まではまだ語り手がよそで登場人物の「彼」を見ている視点からの事物に関する解説であるため、ここに含まれる「それ」は後述のII④bである。しかし、「今にも小江が見えたら機会を逃さずこれを渡さなければならぬ」という表現となると、「そう思って」から分かるように、視点の転換が起こって、語り手が「彼」と同じ立場になって事物を考えるようになっていく。つまり、赤西蠣太の思考内容が地の文となり、語り手が登場人物と同じ視座にあり、共有した視点で事物を見、聞き、感じ、思考する表現である。「これ」は手に握っている「手紙」なので、空間的に身近なものであるから、身近な視点で捉えている。この場合は事項についての解説なので、名詞文、形容詞文、「ている」文、「ない」文が多く見られると考えられる。

2.2.2 II ④ 物語世界を概括的あるいは客観的な視点で捉えた場合

④a 事件を大きく進める動作を描写する場合

例： じっさい、父の喜左衛門は凝り性であった。越前の松平家の菩提寺である大安寺から、住職の杉田承仙がわざわざ茶筌をつくってくれと書簡をよこした時も、喜左衛門は有頂天になってすぐにはつくらなかつた。ありあわせの煤竹をつかうのを快しとしなかつたのである。住職から再度の督促がきて、ようやく半年目にそれを完成した。

(水上勉「越前竹人形」)

「それ」を含む文は作品の中に喜助の父が頼まれて茶筌を作ったことの経過を述べる部

分である。「それ」は「茶筌」のことを指し示し、「つくってくれと書簡をよこし」てから、「それを完成した」という動作の間に時間的に緊密な連続性はなく、「完成した」という概括的な動作でその出来事を大きく進めた表現である。これは、II③a のようなある場面を描写する継起的・具体的な動作ではなく、事件経過の骨組を構成する段階的な大きな動作である。この場合は、動作であるため、動詞文に多く見られる。

④b 事件に関わる事項を解説・説明する場合

例： 彼は妻のこんな様子を見た事がなかった。その変に惨めな感じが、胸を打った。妻を自分はこんなに扱っているのだろうか。妻がこんなに扱われていると感じているのだろうか。その感じが胸を打った。妻は頭から被った搔卷の襟から、泣いたあとの片眼だけを出し、彼を睨んでいた。それは口惜しい笑いを含んだ眼だった。

(志賀直哉「山科の記憶」)

「それは口惜しい笑いを含んだ眼だった」は、語り手が物語世界のある場面の事物(「片眼」)について解説している部分である。「口惜しい」は妻の心理を含んでいるが、表現全体は登場人物の視点より、現場を客観的に見ている語り手の視点であると解される。この場合は、解説・説明的な表現形式である名詞文や形容詞文などに多く見られる。

以上のように、本節では「コレ」「ソレ」の使用に関わる語り手の視点を六種類に分けておく。以下で取り上げる「芋粥」は語りの場の視点の内容を含み、これら六種類の視点の例を得ることができるため、語り手の視点という角度から分析するのに好適な材料である。内容としては主に三つの部分に分けられ、(一)、五位の格好や趣味や経歴などを紹介している部分、(二)、五位が摂政関白の家で芋粥を食べる時の出来事、(三)、藤原利仁が、狐を使って五位に芋粥を飽きるほど食べさせた部分である。(一)は語りの場の視点の内容であり、(二)(三)は主に物語の世界に入り込んだ視点による部分である。

3. 持ち込み内容と視点との関わり

物語の表現構造を分析するには、2. で見たような語り手の視点から指示語を考察するのみならず、視点の対象になるもの、つまり、被視点のことを考察するのも指示語の特質を見るうえで有効である。そこで本節では、「コレ」「ソレ」の持ち込み内容を分類し、それらが語り手の視点とどのように関わり合うのかを考察したい。

本節では、「コレ」「ソレ」の持ち込み内容を本章の第一節と同様に、以下の六種類のカテゴリーに分類する。

人物：名前や性別や官職名などで人間を表現するものである。

物体：「鳥」「雪」など有形で具体的なものである。

行為・心情：行為とは「笑う」「行く」など具体的な動作の表現で、心情とは喜びや苦悶など心理的活動の表現である。

事態・様相：事態とは物事の状態やなりゆきで（事柄や出来事も含む）、様相とは物事のありさまや様子などである。

発話等の内容：発話、考え、手紙などの具体的な内容である。

その他：「力」「関係」など以上の五種類のカテゴリ以外のものである。

上記のように語り手の視点を六種類に分け、カテゴリ別に「芋粥」の内容を調査すると、次の【表1】のようになる。

【表1 「芋粥」における「コレ」「ソレ」の持ち込み内容と視点】

内容 視点	人物		物体		行為・心情		事態・様相		発話等の 内容		その他		合計	
	コレ	ソレ	コレ	ソレ	コレ	ソレ	コレ	ソレ	コレ	ソレ	コレ	ソレ	コレ	ソレ
I①	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0
I②	0	0	0	0	0	3	0	5	0	0	0	0	0	8
II③a	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3
II③b	1	0	1	4	1	2	1	3	0	0	0	1	4	10
II④a	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3
II④b	2	1	1	6	1	5	0	6	0	1	0	0	4	19
合計	8	1	2	12	2	11	2	14	0	4	0	1	13	43

【表1】に示すように、「芋粥」において、「コレ」は13例で、「ソレ」は43例である。第一節で見たように、ほかの20編の小説においても、「ソレ」が多く、小説は基本的に「ソレ」を使用するということが分かる。

語り手の視点の項目から特徴を見ると、語り手の場のI①の場合は「コレ」の例のみ見られ、②は「ソレ」の例のみ見られる。また、物語世界に入り込んで、II④aの場合「ソレ」のみ見られる。それ以外の場合は、すべて「コレ」「ソレ」両方の使用例が見られる。それらの詳細については、3.1以降で視点ごとに具体的に分析していく。

ところで、持ち込み内容の項目から見れば、「物体」、「行為・心情」、「事態・様相」、「発話内容」と「その他」の各項目において、「ソレ」の数量が優位である。しかし、「人物」に限っては、「コレ」が8例で、優位である点は注目される。

「芋粥」において、「コレ」が人物を持ち込む場合が8例も見られ（総計13例）、しかもその中6例は主人公あるいは主人公を含む人物を持ち込んでいる。それに対して、「ソレ」は人物を持ち込む場合は1例のみである。つまり、登場人物、特に主人公に対して「コレ」を多用する傾向が見られるのである。これは、「人物」以外の場合すべて「ソレ」のほうが多いのと対照的である。登場人物を持ち込む場合に「コレ」が多用される原因はなんだろうか。次の二つの点が考えられる。

一つは、語り手が読み手より、主人公についての情報をよく知っているという点である。金水・田窪（1990）はこの場合の「コ」を「解説のコ」と名付けている。「解説のコ」は話し手があるまとまった内容を解説する際、聞き手に対して内容の把握、情報量などの点において優位に立っていると述べている。情報量において優位に立っているということは、その内容をよく知っており、心理的に対象に対して親近感を持つということである。それについて、馬場（1991）は、「コ」と「ソ」は話し手とその指示対象との間の距離（心理的・空間的・時間的）を表すことができ、「コ」は空間的に近いまたは心理的に親近感を持つ対象を示すのに対して、「ソ」は空間的にある距離が置かれるまたは心理的に親近感を持たない対象を示すと指摘している。それを適用すれば、小説において、「コレ」と「ソレ」は語り手が表現事物に対する空間的・心理的距離を表すことができるといえよう。つまり、その「人物」やストーリーについて、語り手が既に知っており、語り手にとって認識の範囲内のものであり、語り手との心理的な距離がより近いことを表している。または、ある場面において、語り手が主人公のすぐそばに立って、主人公を身近な存在として取り上げる場合、空間的距離が近いので、「コレ」を用いるといえる。

もう一つは、正保（1981）が指摘したように、「情報の焦点となるものは『コ』で指示されることが多い」のであり、つまり、「コレ」は表現事物を焦点化する機能があるという点である。要するに、語り手が物語を叙述する時、他の事物と区別して、主人公に焦点を当て、取りたてて表現するため、「コレ」を用いるのでありとされる。

以上は、「コレ」が「人物」に多い理由として考察したが、以下では、上記の「コレ」と「ソレ」の性質からその持ち込み内容、語り手の視点との関わり全般について、具体例を挙げて考察する。

3.1 語りの場に視点がある場合

語りの場に視点がある場合は、さらに二つに分けられる。一つは物語世界を現場的あるいは主観的に捉えた場合（I①）で、もう一つは物語世界を概括的あるいは客観的に捉えた場合（I②）である。まず、小説の冒頭を見てみよう。

(1) 元慶の末か、仁和の始にあった話であろう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めていない。読者は唯、平安朝と云う、遠い昔が背景になっていると云う事を、知ってさえいてくれれば、よいのである。——その頃、摂政藤原基経に仕えている侍の中に、某と云う五位があった。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちゃんと姓名を明にしたいのであるが、生憎旧記には、それが伝わっていない。(略) ——とにかく、摂政藤原基経に仕えている侍の中に、某と云う五位があった。これが、この話の主人公である。

(芥川龍之介「芋粥」(一)) 「これ」……I①、「それ」……I②

この冒頭の二段落において、語り手は語りの場で物語の主人公について紹介している。「これ」が2回出現し、いずれも「人物」である「某と云う五位」を持ち込んでいる。しかも、「これが(も)～である」という名詞文の文型で、「これ」についての解説である。語り手が読み手を意識して、自分の認識の範囲内にある事物を現場にあるかのような態度で提示し、語り出すため、I①の分類に属すると考えられる。

I①は、以上の2例以外に、2例あり、総計4例である。【表1】に示したように、いずれも「コレ」を用いており、しかも「人物」を持ち込む場合である。そのうち、3例が主人公の五位を持ち込むが、もう1例は藤原利仁という「人物」(第二の主人公)を指し示している。いずれも「人物」に焦点を当てて、特別に取り上げている例と解される。

I①の場合では、すべて「人物」を持ち込む「コレ」を用いた例であり、「ソレ」を用いた例が見られない。【表1】の分析で既に述べたように、それは「コレ」が「人物」を持ち込みやすい性質と関係があるからである。語り手が語りの場で物語世界の事物を捉えると、物語の現場ではないため空間的距離が生じにくく、主に心理的な距離を表すことになる。「コレ」(人物)は語り手にとってよく知っていることで、心理的に親近感を持つ対象であると考えられる。

一方、(1)において、五位の具体的な姓名(本研究で「事態・様相」という項目に属する)について、「それ」を用いて指示し、「それが伝わっていない」と語り手が説明してい

る。これは、語り手がやや距離を置いて、中立的な態度で事態を見ているのである。この「それ」は語り手が語りの場で物語世界の事物を客観的に捉えたもので、I②の分類に属している。このように、①と②はともに同じ語り手の視点で捉えたものであるが、「コレ」か「ソレ」の使用によって、表現事物に対する距離や親近感の違いが見られる。

【表1】に見られるように、I②の例は総計8例あるが、いずれも「ソレ」を用いており、しかも「行為・心情」と「事態・様相」を持ち込む例である。語り手にとって、「ソレ」の持ち込み内容がやや距離がある対象であり、その中に、語り手の意識の中に対象が不明確で、確かではないと判断して「ソレ」を用いた例もある。上記の(1)の「それが伝わっていない」もその例である。この小説の8例のI②の場合に、すべて「ソレ」が用いられ、しかも、そのうちの5例は否定文である。文脈指示の「ソレ」が否定的な文に多く見られるのはなぜであろうか。

(1)の「何の誰と、ちゃんと姓名を明にしたいのであるが、生憎旧記には、それが伝わっていない」の「それ」は表面的には姓名を指すのであるが、実際は、語り手はその具体的な姓名は何であるかが分からないので確定できない内容である。正保(1981)は次の例を挙げ、「ソ」のこの性質を論じている。

○ もし卑弥呼が九州の女王とすれば、倭人伝に特筆されたその大墳墓はどこにあるのか。国造磐井ですら巨大な古墳の址を残している。卑弥呼の古墳はそれより更に大規模なものでなければならぬのに、一向にそれらしいものがないというのはどうしたわけか。
(村雨退二郎『史談あれやこれ』)

この例に見られる「それらしい」の「それ」は「国造磐井」の「巨大な古墳」「より更に大規模な」はずの「卑弥呼の古墳」を意味している。しかし、その「卑弥呼の古墳」は実存しているかどこにあるかは不明である。このように「確と同定出来ないような対象」を指し示す場合、「ソ」で承けることが多い。これは「ソ」特有の性質で、この場合、「コレ」と置き換えられないと指摘している。金水・田窪(1990)が述べたように、「ソ」は直接認識ではなく、間接経験的領域のものを表すため、この例のように予想外や不明になるものがあっても当然である。そこで、語り手がそのような曖昧な内容の事物について説明する時、積極的な肯定表現ではなく、否定表現が多くなると考えられる。

(2) 彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品隲して飽きる事を知らなかった。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ唇の女房と、その女房と関係があったと云う酒のみの法師とも、屢彼等の話題になった。その上、

どうかすると、彼等は甚、性質の悪い悪戯さえする。それを今一々、列記する事は出来ない。(芥川龍之介「芋粥」(一)) I②

この例では、「それを今一々、列記する事は出来ない」という表現から、語り手が語りの場に立って物語世界について説明できないものを述べているのであることが分かる。「それ」は同僚の侍たちが五位についてのいろいろなことを話して彼をからかうという「事態・様相」を持ち込んでいる。つまり、語り手が「それ」(「事態・様相」)と少し距離をとって、具体的に「列記」せず、曖昧に扱い、否定の表現を取って解説しているのである。語り手が語りの場で物語世界の事物を見、それを特定せず、客観的に扱う時に、「ソレ」を用いているのであると解される。

以上考察したように、「コレ」は語り手の主観的な態度を示し、「人物」を持ち込みやすく、I①の場合に用いられやすい。一方、「ソレ」は「行為・心情」、「事態・様相」を客観的に持ち込み、I②の場合に用いられやすいと考えられる。

3.2 物語世界に視点が入り込んで、事物を現場的あるいは共感的な視点で捉えた場合

現場的あるいは共感的視点は、人物の身近に視点を置く継起的動作の描写(II③a)と人物の視点に共感する内容の描写(II③b)に分けられる。

3.2.1 II③a 人物の身近に視点を置いて継起的動作を描写する場合

表現事物を現場的あるいは共感的な視点で見、人物の身近に視点を置いて継起的動作を叙述する場合(II③a)の例を見てみよう。

(3)「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないそうな」

五位の語が完らない中に、誰かが、嘲笑った。錆のある、鷹揚な、武人らしい声である。五位は、猫背の首を挙げて、臆病らしく、その人の方を見た。声の主は、その頃、同じ基経の恪勤になっていた、民部卿時長の子藤原利仁である。肩幅の広い、身長の群を抜いた逞しい大男で、これは、燂栗を噛みながら、黒酒の杯を重ねていた。もう大分酔がまわっているらしい。(芥川龍之介「芋粥」(二)) II③

ここは前述の(二)の部分で、五位が摂政関白の家で芋粥を食べる時に起こったことである。「これは、燂栗を噛みながら、黒酒の杯を重ねていた」の「これ」は藤原利仁という「人物」を持ち込み、その人物の飲食場面において、具体的な動作を次々と継起的に描くのである。語り手が物語世界に入って、そばで見てるように、ある場面の具体的かつ継起的な動作を叙述しており、臨場感の強い描写である。継起的な動作の叙述なので、動詞

文に多く見られる。

この分類には、「ソレ」の例も見られる。

(4) 「どうじゃ」

「……」

五位は、その中に、衆人の視線が、自分の上に、集まっているのを感じ出した。答え方一つで、又、一同の嘲弄を、受けなければならない。或は、どう答えても、結局、莫迦にされそうな気さえする。彼は躊躇した。もし、その時に、相手が、少し面倒臭そうな声で、「おいやなら、たつてとは申すまい」と云わなかったら、五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べていた事であろう。

彼は、それを聞くと、慌しく答えた。

「いや……忝うござる」

(芥川龍之介「芋粥」(二)) II③a

「それ」は藤原利仁の「どうじゃ」という質問の「発話内容」を持ち込む。五位は「それを聞くと、慌しく答えた」のように、動作「聞く」の直後に動作「慌しく答えた」が起こった。つまり、人物の傍で現場を見ているような視点で、次々と継起的動作を具体的に描写するのである。

【表1】に示したように、II③aの場合、「コレ」「ソレ」の両方が見られる。「コレ」は「人物」を持ち込み、その具体的な動作を特定・強調するゆえ、現場を迫真的に再現し、臨場感を引き出すのである。一方、「ソレ」は「物体」や「発話内容」を持ち込んでおり、登場人物の動作に関する場面を具体的に叙述するといっても、語り手とその継起的動作との間に置かれた距離が感じられる。

このように、同じく人物の身近に視点を置いて継起的動作を描写するといっても、「コレ」か「ソレ」の使用によって、その持ち込み内容に対する語り手の態度が異なっている。

3.2.2 II③b 人物の視点に共感する内容を描写する場合

人物の視点に共感する内容の描写、いわゆる「描出表現」(「描出話法」)の場合の例を見てみよう。

(5) どうもこう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となって現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待っていたのが、如何にも、無駄な骨折のように、見えてしまう。出来る事なら、何か突然故障が起って一旦、芋粥が飲めなくなってから、又、その故障がなくなって、今度は、やっとこれにありつけると云うような、そんな手続きに、万事を運ばせたい。

(芥川龍之介「芋粥」(三)) II③b

(5) の内容は、語り手の視点で五位を見ているというより、語り手が主人公の五位と一緒にあって、視点を共有して起こった心理活動である。地の文ではあるが、「～運ばせたい」という表現は人物の心理表現で、登場人物の内面に入り込んだ視点で見ているのである。

「これ」は「物体」の芋粥を持ち込み、ここで頭の中に想像して、その芋粥に関する具体的なシーンが浮かんでくる効果を引き出せる。表現事物に対し、「ソレ」ではなく、「コレ」を用いていることで現場性、具体性を有する表現となっている。

ところで【表1】によると、「コレ」が4例で、「ソレ」が10例であり、持ち込み内容にある程度広がりが見られる。次に、「ソレ」の例を見てみよう。

(6) すると、夕方、此処へ着くまで、利仁や利仁の従者と、談笑しながら、越えて来た松山、小川、枯野、或は、草、木の葉、石、野火の煙のにおい、——そう云うものが、一つずつ、五位の心に、浮んで来た。殊に、雀色時の靄の中を、やっと、この館へ辿りついて、長櫃に起してある、炭火の赤い焰を見た時の、ほっとした心もち、——それも、今、こうして、寝ていると、遠い昔にあった事としか、思われぬ。五位は綿の四五寸もはいた、黄いろい直垂の下に、楽々と、足をのぼしながら、ぼんやり、われとわが寝姿を見廻した。(芥川龍之介「芋粥」(三)) II③b

「そう云うものが、一つずつ、五位の心に、浮んで来た」と提示したように、次の内容は五位の心理活動の内容である。「それも、今、こうして、寝ていると、遠い昔にあった事としか、思われぬ」も五位の思考である。「それ」は先行の「利仁や利仁の従者と、～炭火の赤い焰を見た時の、ほっとした心もち」という長い内容を持ち込むが、主にその「心もち」、つまり「行為・心情」を持ち込む。「それ」は昔そういう様相や事態に対して起こった気持ちなので、語り手にとっても、五位にとっても、やや空間的にも時間的にも、心理的にも距離のある「行為・心情」である。後続の「こうして、寝ている」のいまここという現場性を特定する「こう」と対比になっている。

このように、人物の視点に共感する内容の描写であっても、その視点が表現事物との空間的・心理的な距離の遠近によって、「コレ」「ソレ」の使用が異なってくる。また、人物の心について描写する内容であるため、「～ている」動詞文や形容詞文や名詞文で表現することが多い。

3.3 物語世界に視点が入り込んで、事物を概括的あるいは客観的な視点で捉えた場合

語り手が物語世界に入って、表現事物を概括的あるいは客観的な視点で見る場合も二つ

に分けられる。まずは事件を大きく進める動作を叙述する場合である。

3.3.1 II④a 事件を大きく進める動作を描写する場合

事件を大きく進める動作は、II③aの人物の身近に視点を置く継起的動作とは異なる。継起的な動作はある場面での次から次へと起こる具体的な動作であり、事件の大きな進展を表すことができない。それに対して、事件を大きく進める動作は、事件の進展段階を表す。次の例を見てみよう。

(7) 利仁は今朝五位を誘うのに、東山の近くに湯の湧いている所があるから、そこへ行こうと云って出て来たのである。赤鼻の五位は、それを真にうけた。久しく湯にはいらないので、体中がこの間からむず痒い。芋粥の馳走になった上に、入湯が出来れば、願ってもない仕合せである。こう思って、予め利仁が牽かせて来た、蘆毛の馬に跨った。 (芥川龍之介「芋粥」(三)) II④a

「それ」は、「事態・様相」を持ち込むが、「それを真にうけた」、「こう思って」、「馬に跨った」は継起的な動作ではなく、「うけた」はある事件に対して、段階的な進展を表す動作である。この動きがあってから、後述の狐に出会ったことや芋粥を飽きるほど食べたことが起こった。これはII③aのようにある現場で具体的な継起的な動作の描写ではなく、事件の骨組みとなる大きな展開を叙述している。

(8) 三井寺には、利仁の懇意にしている僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐の馳走になった。それがすむと、又、馬に乗って、途を急ぐ。行手は今まで来た路に比べると遙に人煙が少ない。殊に当時は盗賊が四方に横行した、物騒な時代である。 (芥川龍之介「芋粥」(三)) II④a

「それ」は、先行の「二人はその僧を訪ねて、午餐の馳走になった」という「行為・心情」を持ち込む。「それがすむ」と「馬に乗って、途を急ぐ」の間に時間的な経過があり、ある場面に起る具体的・継起的な動作を捉える表現ではない。「二人はその僧を訪ねて、午餐の馳走になった」という大きな行為が事件の一段階となり、二人が狐に出会ってから芋粥に招待されるまでの事件の筋として、場面の進展を表す表現を作っている。(7)と同じく、動きと動きの間は緊密ではなく、大きな時間の経過がある表現である。

【表1】に示したように、II④aの視点の場合、「ソレ」3例のみで「コレ」は見られない。また、持ち込み内容は「行為・心情」と「発話等の内容」のカテゴリーである。一般的に、物語の進展を表す大きな動作を叙述する際、語り手は現場性を求めるのではなく、事件とある距離を保ち、概括的な視点でその事件の進展を見ている。したがって、冷靜的・

中立的な態度で前後の内容を連結する「ソレ」を用いるのが中心となるのであろう。

3.3.2 II④b 事件に関わる事項を解説・説明する場合

語り手が物語世界に入って、事件に関する事項を解説する際、「コレ」・「ソレ」を両方用いる。この II④b の場合は説明的な描写であるという点では、I の視点と近い。二者の異なるところは、II④b は語り手が物語世界に入り込んだ視点で事物を解説するのに対して、I は物語世界に入らず、その外の語りの場で物語世界の事物を見ている点である。

物語世界の事物に対して、語り手が客観的に解説するとき、「ソレ」を用いることが中心となっている。

- (9) その涯には、一帯の山脈が、日に背いているせいか、かがやく可き残雪の光もなく、紫がかった暗い色を、長々となすっているが、それさえ蕭条たる幾叢の枯薄に遮られて、二人の従者の眼には、はいらない事が多い。

(芥川龍之介「芋粥」(三)) II④b

「それ」は「物体」である「一帯の山脈」に関する情報を持ち込んでいる。語り手が物語世界に入って、客観的な視点で山脈について説明している。解説や説明であるため、一般的に形容詞文・名詞文の場合が多い。

しかし、物語世界の事項に関して説明・解説するとき、「コレ」の使用例も見られる。

- (10) しかし幸に談話の中心は、程なく、この二人を離れてしまった。これは事によると、外の連中が、たとい嘲弄にしる、一同の注意をこの赤鼻の五位に集中させるのが、不快だったからかも知れない。(芥川龍之介「芋粥」(二)) II④b

ここの「これ」は先行の「談話の中心は」「この二人を離れてしまった」という「行為」を指し示している。その場面での事物に対して、「これは～からかもしれない」という構文で解説している。(9) のような客観的な捉え方と違って、(10) はクローズアップの手法のように、ある事物に焦点を当て、それを特別に扱い、その事物を際立たせて表現するのである。「コレ」は「人物」を持ち込むことが多く見られるが、(10) のように「行為」を特に際立たせて表現する場合も見られる。【表 1】によると、II④b の場合、「コレ」「ソレ」は「人物」のみならず、「物体」や「行為・心情」等様々な事物を持ち込むことがあり、持ち込み内容にある程度広がりが見られる。それらについて、中立的な態度で解説するか際立たせて表現し解説するかによって、「コレ」か「ソレ」が選択されていると思われる。

4. まとめ

以上、「芋粥」において、六種類の視点と「コレ」「ソレ」の相関を考察してきた。語り手の視点のあり方によって、「コレ」「ソレ」の使い分けがなされることが分かった。その要点をまとめると、以下ようになる。

- (1) 語りの場に視点がある場合、物語世界を現場的あるいは主観的に捉えた時、「コレ」が用いられやすく、一方、物語世界を概括的あるいは客観的に捉えた時、「ソレ」が用いられやすい傾向が見られる。
- (2) 物語世界に視点が入り込んで、物語世界を現場的あるいは主観的な視点で捉えた場合、人物の身近に視点を置いて継起的動作を描写する場合にも、人物の視点に共感する内容を描写する場合にも、「コレ」「ソレ」両方が使用可能である。現場的あるいは共感的な視点と言っても、語り手がある事物に対して、自分との関わりを強く感じる時に「コレ」を、すこし距離を置いて見る時に、「ソレ」を選択して用いるのである。その心理的な違いによって、「コレ」「ソレ」の使用が異なってくるのであると考えられる。
- (3) 物語世界に視点が入り込んで、物語世界を概括的あるいは客観的な視点で捉えた場合、事件を大きく進める動作の描写には、「ソレ」が用いられやすい。それに対して、事件に関わる事項の解説・説明の時、「ソレ」の使用が多いが、その事項を強調して捉える場合には、「コレ」の使用も少なくない。

語り手の視点が強い I①、②の場合、まだ物語世界に入っておらず、語り手が表現事物に関して、空間的な距離はまだ生じていないため、「コレ」「ソレ」は主に心理的な距離を表している。また、II④の場合は、物語世界に入り込んでいるが、事件の現場に立っているのではなく、概括的に事件を見るため、この場合にも空間的な距離は発生しにくいと考えられる。一方、人物視点が強い場合、つまり、II③の場合、語り手が事件の現場に立って、登場人物のすぐそばに立って事物を見ており、あるいは登場人物と共有した視点から物事を見ているため、いずれにおいても、語り手と表現事物との間に空間的な距離が生じている。このため、「コレ」「ソレ」は空間的な距離を表すことが多くなるのである。

上記全ての視点を通して、「コレ」「ソレ」の大きな使用傾向がうかがわれる。すなわち、「コレ」は「人物」を持ち込みやすく、語り手の認識の範囲内の事物または心理的・空間的に近い事物を、現場的・具体的に捉える場合に用いられる。それに対して、「ソレ」は「物体」「事態・様相」を持ち込みやすく、語り手が表現対象と心理的・空間的に距離を保ち、

中立的・概括的に捉える場合に用いられる。

以上は「芋粥」において、語り手の視点を分類して指示語「コレ」「ソレ」を考察した結果であるが、今後いろいろな作品で検証する必要がある。

【注】

- (1) 藤井（2004）は、「ディエゲーシス（物語 Diegesis）は、対話を含まない純粋な物語的叙法を意味し、ミメーシス（模倣 Mimesis）はそれと対比的に、対話などによる演劇的な再現を意味する」と述べている。また、藤井（2004）では、前者を「叙述（する）」、後者を「解説（する）」「描写（する）」「描出表現」などの用語として用いている。
- (2) 「芋粥」は1916年9月に『新小説』で発表された芥川龍之介の短編小説である。「芋粥」及びほかのテキストはすべてCD-ROM版『新潮文庫の100冊』によった。ただし、「清兵衛と瓢箪」は岩波文庫の『小僧の神様』（2002）によった。
- (3) 藤井（2004）は物語世界を表現する視点には、語り手の視点のみによる場合と、語り手の視点と登場人物の視点とが共有されるいわゆる「描出表現」の場合とがあると指摘している。そのため、指示語「こ」「そ」の使い分けを考えるために、次の四種類に分類している。I 語り手の視点から遠い存在を示す表現に用いる「そ」、II 語り手の視点から遠い存在を示す表現に用いる「こ」、III 登場人物の視点から遠い存在を示す表現に用いる「そ」、IV 登場人物の視点から遠い存在を示す表現に用いる「こ」。

第三節 小説の会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」

—地の文の叙述との関わりを中心に—

1. 先行研究と問題の所在

小説の文章は大きく分けて地の文と会話文によって構成されている。両者が違う働きをしている。会話文は登場人物が発する言葉で、カギカッコなどの符号によって、引用範囲が明確に区別されるもので、直接話法とされる。それ以外は地の文で、基本的に語り手が語っている。これまで地の文における文脈指示の指示語については研究が見られるが、現場指示、特に会話文における現場指示については、ほとんど研究されていない。第二章で、各指示用法の指示語が文脈展開に関与することを考察し、現場指示も文脈展開に関与することができることを明らかにした。本節では、小説の地の文との関わりから会話文における現場指示用法の指示語を考察し、その指示語の対象物について前後の地の文でどのように表現されているかを明らかにする。

現場指示は、庵（2007）が「現場指示はテキスト外指示の典型的なものである」と指摘したように（注1）、文脈指示のように言語文脈のものと照応せず、言語文脈以外の発話の現場において、五官で認知できる対象を対象物とする場合である。また、堀口（1978a）は、「現場指示とは、基本的には、対話・講演など話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において、多くの場合身ぶり・手ぶり・表情などの表現行為を伴いつつ、話し手が現に感覚していて聞き手にも知覚されるはずだとする事物を対象として、コ・ソ・ア系の語を用いて指示する用法である」と定義している。このように、現場指示の対象物は言語文脈に依存せず、発話現場にある実物や様態である。つまり、現場指示の成立には、話し手、聞き手と現場にある対象物の三者が必要である。

次の具体例で現場指示を見てみよう。

○（A はB の近くにある醤油の瓶を指差し）

A: ちょっと、それ取ってくれる？

B: これ？どうぞ。

A の「それ」と B の「これ」はいずれも会話の現場にある実物の醤油を指示して言う。現場指示である。ところで、同じ対象物に対して、なぜ A は「それ」を、B は「これ」を

用いて指示するのであろうか。

現場指示の「コ」と「ソ」の区別について、金水・田窪（1990）は現場指示の「コ」の対象物は「話し手が現在働きかけているもの・処理中のもの・勢力を及ぼしつつあるもの」であり、それに対して、「ソ」の対象物は「聞き手の知識・知覚」範囲の「聞き手領域」にあると述べている。つまり、現場指示の「コ」「ソ」の使用前提は話し手・聞き手の両者とも現場にある対象物が知覚できる状態にある。ただ、「コ」の場合は対象物が話し手の勢力範囲に、「ソ」の場合は対象物が聞き手の勢力範囲にあるのである。この指摘によると、対象物である醤油はBの近くにあり、Bのコントロールできる範囲、すなわち勢力範囲にあるので、Bは「これ」を用いて指示している。一方、醤油の位置はAにとって、Bより遠いので、Aはそれが聞き手のBの勢力範囲にあると意識して醤油を「それ」で指示している。対象物について、話し手が知覚したものはすべて「コ」で指示することが可能であるが、聞き手の領域にある場合に「ソ」で指示する。要するに、「コ」の使用は聞き手のことを要求していないが、「ソ」は対象物が聞き手の領域に属することが前提である。このように、現場指示の「コレ」と「ソレ」の使用は対象物が話し手と聞き手のどちらの勢力範囲に属すかと関わっているのである。

これらの研究によって、現実の会話における現場指示の「コ」と「ソ」の違いが明らかになった。ところで、文章、特に登場人物の会話の場面が描かれる小説の文章においても、現場指示用法がありうると考えられる。

小説の文章において、会話文の場合、すなわち、登場人物が発する言葉が直接話法で表現される場合に、登場人物の視点から見れば、話し手、聞き手、そして現場指示の対象物もあるため、現場指示の成立条件を満たすことができる。したがって、会話文において現場指示用法もありうると考えられる。ただし、この会話の場面は現実の会話の場面ではなく、言語文脈によって模擬されたものである。この模擬の会話の場面は現実の会話の場面とは異なるところがある。

長田（1995）は現実の会話では、「話の場」（会話の場面）が先にあり、話し手と聞き手が言語だけでなく、行動などを通して相互に相手を確認することができる状況にある。それに対して、文章において、「話の場」が存在せず、登場人物の「話の場」に相当するものは読者が同時に共有せず、その「話の場」についてはすべて言語によって表現されていると述べている。つまり、文章において、会話の現場が架空の現場で、文字言語によって作られている。そのため、会話文における現場指示の成立の諸要素も言語によって構築され

ており、その現場指示の対象物が何であるかも前後の言語文脈によって提示されていると考えられる。ここの「提示」は文脈指示の「照応」の意味とは違い、テキスト外指示の内容を理解するためには、言語文脈による場面の構築が必要である。要するに、一般的に、小説の文章では、地の文において語り手が物語について説明・描写している。それを基底に、登場人物の言葉が書き写されているのが会話文である。そのため、会話が行われる場面について、主に地の文で説明されている。たとえば、次の例を見てみよう。

(1) いま、周二は広告紙の裏に新しい赤鉛筆で、際限もなく「壽」を書いていた。壽、
壽、壽、……。

「まあ、周ちゃん、それ一体何？」と、なんにでも口を出す桃子叔母さんは訊いた。

「それは模様なの？記号なの？」

「これ、コ、ト、ブ、キ」と、周二は折角の壽を知らぬ叔母に背を向けたまま、一語々々怒ったように力をこめて言った。 (北杜夫「楡家の人びと」)

これは物語世界の登場人物の会話である。桃子叔母さんの「それ」と周二の「これ」は、ともに現場にある広告紙の裏に赤鉛筆で書かれた壽、壽、壽という対象物を指示して言う。

「これ」「それ」の対象物は会話の現場にある実物であるため、現場指示用法である。会話の場面や対象物について、先行の地の文に「いま、周二は広告紙の裏に新しい赤鉛筆で、際限もなく「壽」を書いていた。壽、壽、壽、……。」という描写がある。もしこのような叙述がないと、「これ」「それ」は何を指示しているかは読者が分からないのである。この場合、先行の地の文の叙述は読者にとって、「これ」「それ」が何であるかの提示である。文章理解の角度からいえば、先行の地の文には「これ」「それ」の指示の対象物を理解するための文脈が含まれており、対象物の情報についての提示である。

このように、小説の会話文において、話し手・聞き手・現場にある対象物という現場指示の成立条件、つまり、話し手、聞き手と両者とも知覚できる現場の対象物が揃っており、現場指示が存在しているのである。また、「コレ」「ソレ」が指示している現場の対象物について先行の地の文に提示がある。要するに、地の文によって会話の場面設定がなされていると考えられる。会話文に出る現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物は会話の現場にあるので、その場面設定に対象物についての提示があるのである。しかし、場合によっては、その提示が後続の地の文にまた前後の会話文にあることもあると考えられ、その対象物についての情報がどこでどのように提示されているかを本節で調べる。

また、文章において、話し手の「コレ」と「ソレ」の使い分け、対象物が話し手と聞き

手のどちらの勢力範囲に属すかについても文字言語によって表現されている。具体的に言語文脈によってどのように描かれているのかも(1)を例として説明する。

桃子叔母さんの「それ」を含む発話の先行文脈に聞き手である周二が対象物を「書いていた」という動作についての叙述から、対象物は周二の勢力範囲に属すことと、桃子叔母さんはその現場にある対象物を見ていることが分かる。ここの「書く」動作は「見る」「認める」などの動作と異なり、対象物に直接影響を与えているので、対象物に働きかける動作とする。対象物に働きかけるというのはその対象物が動作主の勢力の及ぶ範囲にあり、動作主の勢力範囲に属しているといえる。一方、「これ」を含む発話の先行文脈にある対象物についての会話の場面の叙述は「それ」と同じであるが、ここで周二は話し手であり、先行の地の文は話し手が対象物に働きかける動作についての叙述であると解される。

このように、「これ」と「それ」は先行文脈にある対象物の属す勢力範囲についての叙述が異なるのである。「これ」は先行文脈に話し手が対象物に働きかける動作を行う叙述があるのに対して、「それ」は対象物に働きかける動作を聞き手が行う叙述があるのである。

(1)のように、小説においては、先行の地の文によって会話の場面が設定され、「コレ」「ソレ」の対象物についての説明が見られる。また、「コレ」「ソレ」の先行文脈にその対象物は話し手の勢力範囲に属すか聞き手の勢力範囲に属すかについての叙述も見られる。

一般的に、小説の会話文における現場指示の対象物が何であるかは前後の文脈において、どのように提示されているか、またそれぞれの提示の場合に、「コレ」と「ソレ」の違い、つまりその対象物は話し手の勢力範囲に属すか聞き手の勢力範囲に属すかについて言語文脈においてどのように描かれているか。この二つの課題を明らかにするために、本節では、会話文における現場指示によく見られる「コレ」「ソレ」を対象として、その指示の対象物についての情報が提示されている文脈の位置(提示先)をいくつかに分けて考察する。

2. 「コレ」「ソレ」と指示の対象物の提示先

会話文における現場指示の対象物についての提示は(1)のように先行の地の文にある場合もあれば、後続の地の文や前後の会話文にある場合もある。また、提示なしの場合もあると考えられる。本節では、その提示先を先行の地の文、後続の地の文、先行の会話文、当会話文、後続の会話文、提示なしという六種類の場合に分けて調べる。CD-ROM版『新潮文庫の100冊』に収録された40編の小説(注2)を資料とし、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物及び話し手・聞き手についての情報の提示を調べた。結果は次の

【表 1】 のとおりである。

【表 1 会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」とその対象物の提示先】

	コレ								ソレ							
	会話文における現場指示の「コレ」								会話文における現場指示の「ソレ」							
	地の文		会話文			提示なし	小計	総数*	地の文		会話文			提示なし	小計	総数
	先行	後続	先行	当会話文	後続				先行	後続	先行	当会話文	後続			
こころ	2						2	112								579
山椒大夫	6						6	26	1						1	50
芋粥	1						1	19								62
赤西蠣太	1						1	16								63
生まれ出*	2	1					3	17	1						1	128
売色鴨南	1						1	10								12
痴人の愛	8	3	1				12	165	1						1	542
ある心の	1						1	6								27
放浪記	6	1					7	117								165
銀河鉄道	1	1		2			4	6								71
雪国	4	2	2	2			10	37								142
風立ちぬ	2						2	30	1						1	322
路傍の石	10	3	1			4	18	82	2		2				4	286
ビルマの	8	4					12	218								393
人間失格	3	1		3			7	77	2						2	261
野火	2						2	81								174
二十四の	5	3		1		2	11	58								376
あすなろ	5	2					7	69	3						3	184
金閣寺	2	1					3	96								117
裸の王様	4						4	35	1						1	90
点と線	2	2					4	132								316
不意の嘩								3								42
樹々は緑	1	1					2	11								38
雁の寺	4	6					10	28	1						1	76
榎家の人	41	8	1	1	3	4	58	495	4	1	1	1			7	1784
砂の女						3	3	71	1						1	265
さぶ	16	2					18	162	2						2	483
聖少女	7	2					9	124								397
黒い雨	8	1		1			10	148	2						2	329
華岡青洲	5	3					8	87	4						4	272
戦艦武蔵	1						1	36								343
人民は弱	2						2	187								354
青春の蹉	4			2	1		7	91	1						1	462
塩狩峠	5	1					6	70								378
ブンとフ	5	2					7	89								103
花埋み	5	5				1	11	215								576
まゆ墨の		1	1				1	3								48
太郎物語	11	5	2	3	1		22	95								414
冬の旅	5	2					7	124	1						1	335
女社長に	7	10		1	1	1	20	172								453
合計	203	73	8	16	6	16	322	3649	28	1	3	1			33	11512

* 1、小説の名称（注 2 を参照）は最初の 4 文字を取っている。

2、総数とは、「あれこれ」のような慣用的表現を除外して、文脈指示、現場指示、絶対指示と指示語系接続詞を合計した数である。

【表 1】によると、「コレ」の総数は 3649 例で、「ソレ」の総数（11512 例）の約三分の一であるが、会話文における現場指示の数量は 322 例で、「ソレ」（33 例）の 10 倍ぐらいとなっている。つまり、「コレ」は現場指示に用いられやすく、より現場的であるといえよう。対象物の提示先を見ると、「コレ」と「ソレ」は、両者とも先行の地の文の場合が最も

多く、「コレ」は203例で全体の63%を占めており、「ソレ」は28例で全体の85%を占めている。さらに、先行と後続の地の文の場合を合わせると、「コレ」は276例で全体の86%を占め、「ソレ」は29例で全体の88%を占めるようになっている。このように、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物が何であるかは主に地の文によって情報が提示されており、会話の場面が地の文によって設定されているのである。

しかし、「コレ」と「ソレ」においては、異なる点もある。「コレ」は先行・後続の地の文の場合にのみならず、先行・後続の会話文、提示なしなど各場合に例が見られ、その提示先は広がりがある。それに対して、「ソレ」は主に先行の地の文の場合に例が集中しており、先行の会話文の場合にもすこし例が見られるが、ほかの場合には例がないか1例のみ見られる。つまり、「ソレ」の対象物についての提示が先行の地の文と会話文に偏っている点に「コレ」との違いが見られる。

以下は会話文における現場指示の「コレ」と「ソレ」を分けて、その対象物の提示先別に具体的に対象物・話し手・聞き手に関する叙述を分析し、両者の前後の文脈との関わりについて考察する。

3. 「コレ」の場合

【表1】によると、会話文における現場指示の「コレ」は総計322例で、その対象物の提示先は六つの場合にわたって広く見られる。そのうち、最も多いのは先行の地の文の場合(203例)で、全体の63%を占めている。次に多いのは後続の地の文の場合(73例)で、先行の地の文の場合の三分の一ぐらいである。当会話文の場合に16例見られ、また、先行の会話文に8例、後続の会話文に6例見られる。そのほか、提示なしの場合も16例あり、目立っている。

対象物・話し手・聞き手に関する叙述について、「コレ」の場合、指示の対象物は話し手の勢力範囲に属し、聞き手の領域に属していない。そこで、以下は指示の対象物と話し手の関わりについての叙述を通して、「コレ」は前後の文脈とどのように関わっているかを考察する。具体的に地の文、会話文、提示なしの三つの場合に分けて見る。

3.1 地の文にある場合

「コレ」の対象物についての提示が地の文にある場合、先行の地の文にある例は203例で、後続の地の文の例(73例)より圧倒的に多い。まず、先行の地の文にある例を挙げる。

(2) 吟子は握ったままの右手を差し出した。

開くと中に一寸ほどの錦織の小袋があり、中は白い紙で包まれ、開くと、「俵瀬神社」と書いてある。お札だった。

「母さんに貰ったの、これを握って眠るわ」 (渡辺淳一「花埋み」)

「これ」は吟子が会話の現場にある俵瀬神社のお札を指示して言うのである。会話の場面は先行の地の文「吟子は握ったままの右手を差し出した。～お札だった」の叙述によって作られ、「これ」の対象物である俵瀬神社のお札について、「『俵瀬神社』と書いてある。お札だった」という提示がある。このように先行の地の文によって、場面設定と対象物の提示がなされているのである。

また、話し手と指示の対象物の関わりについて、先行の地の文に話し手である吟子はその対象物であるお札を「握ったままの右手を差し出した」「開く」という叙述が見られ、話し手が対象物に働きかける動作についての叙述がある。対象物が話し手の勢力範囲に属するしともいえる。

上記のように、一般的に会話文に現場指示の指示語が出てくると、まず先行の地の文にその対象物についての提示があると予測される。小説の基盤は地の文であり、地の文によって会話の場面設定が完成されると思われるからである。

次に、対象物についての提示が後続の地の文にある例を見てみよう。この場合、先行の地の文に対象物についての提示が見られない。

(3) 「貴女お一人ですか……」

事務員の人達は、みすばらしい私の姿をジロジロ注視していた。

「え、そうです。知人が酒屋をしまして、新聞を見せてくれたのです。是非乗せて戴きたいのですが……国では皆心配してますから。」

「大阪からどちらです。」

「尾道です。」

「こんな時は、もう仕様おまへん。お乗せしますよってに、これ落さんように持つて行きなはれ……」

ツルツルした富久娘のレッテルの裏に、私の東京の住所と姓名と年齢と、行き先を書いたのを渡してくれた。 (林芙美子「放浪記」)

「これ」の対象物は現場にある富久娘のレッテルの裏に「私の東京の住所と姓名と年齢と、行き先を書いたの」という証明書のようなものである。その対象物が何であるかは後

続の地の文に提示がある。後続の地の文も先行の地の文と同じく小説の基底であり、場面設定に大きな役割を果たしている。「これ」が先に会話文に出ており、後続の地の文にその対象物についての提示がなされる。また、話し手と「これ」の対象物との関わりについて、発話の直後に、話し手である事務員が対象物であるレッテルを「渡し」た動作についての叙述が見られる。

このように、後続の地の文は先行の地の文ほど例が多くないが、先行の地の文と同じく対象物についての提示がなされており、会話の場面設定に大きな役割を果たしている。また、対象物についての情報の提示がなされる場所に、話し手が対象物に働きかける動作の叙述が見られる。

3.2 会話文にある場合

「コレ」の対象物についての提示が地の文に見られなく、会話文にある場合である。この場合は先行の会話文、当会話文と後続の会話文と三種類に分けられる。

まず、先行の会話文にある場合は8例見られる。

(4) 三浦のまゆ墨も口紅も雨に叩かれ洗われて、糸瓜顔が紙のように白かった。

(中略)

そして、ぐぐっと息をつまらせたかとおもうと、見る見る死相をあらわし、

「牛堀先生。ふところに、まゆ墨の豊紙が入っている。出して、下さい」

「よし……これか」

「はあ。小さな筆が入っている。それをぬらして、まゆ墨をたっぷりつけ、私の手に……」

「む……こうか、これでよいか？」

「はあ……顔をふいて下さい」

「よし、よし」

(池波正太郎「まゆ墨の金ちゃん」)

先行の地の文によって三浦が死ぬ場面が設定されているが、「牛堀先生」の発話に出る「これ」の対象物が何であるかは提示されていない。先行の三浦の発話「ふところに、まゆ墨の豊紙が入っている。出して、下さい」という提示から、「これ」は三浦の「ふところに」ある「まゆ墨の豊紙」を指示していることが分かる。地の文に「まゆ墨の豊紙」についての提示がないので、会話文を読んで、推論して対象物が何であるかが分かるのである。

次に、「コレ」の対象物についての提示が当会話文にある場合は16例ある。この場合、

当発話以外、前後の文脈に対象物について提示が見られない。

(5) 駒子は床の上にちょこんと坐ると、一枚しかない座蒲団を島村にすすめて、

「まあ、真赤。」と、鏡を覗いた。

「こんなに酔ってたのかしら？」

そして箆笥の上の方を捜しながら、

「これ、日記。」

「ずいぶんあるんだね。」

その横から千代紙張りの小箱を出すと、いろんな煙草がいっぱいつまっていた。

(川端康成「雪国」)

当発話以外の会話文と地の文から「これ」の対象物についての提示が見当たらない。当会話文「これ、日記」というところから「これ」の対象物が日記であることが分かり、この発話は対象物が何であるかの提示である。後続の地の文には現場についての叙述があるが、「日記」についてではなく、その他の「小箱」についてである。また、話し手と対象物の関わりについて、「これ」の話し手である駒子が「箆笥の上の方を捜しながら」という動作が直前に叙述されているので、「これ」の対象物である日記についてもその捜す動作の及ぶ範囲であると思われる。間接的に話し手が対象物に働きかけている叙述であるといえる。

「コレ」の対象物についての提示が後続の会話文にある場合は6例見られる。

(6) 馬鹿でかいメニューに目を丸くしながら、伸子は目を走らせたが、何やら聞き慣れない料理が並んでいる。

(略)

「しかし、あなたはまだ何ととっても若い。ああいう連中の隠れた悪意に立ち向かうすべをご存知ないでしょう。——あ、料理が来ましたよ。食べながら話しましょう」

「これ、何ですか？ 貝ですか？」

「いや、エスカルゴ——かたつむりですよ」

伸子はギョッとして目を見張った。

——食事も終わり近くになると、柳は話を続けた。

「つまり、あなたには味方が必要です」 (赤川次郎「女社長に乾杯」)

(6) は後続の会話文にのみ「これ」の対象物についての提示が見られる。先行の地の文に食事の場面が設定されており、「聞き慣れない料理が並んでいる」という叙述があるが、

「これ」の対象物が明確に提示されていない。後続の会話文「いや、エスカルゴ——かたつむりですよ」から、直前の質問にある「これ」は「エスカルゴ」つまり「かたつむり」を意味していることが分かる。また、話し手と対象物の関わりについて、文脈から話し手である伸子が対象物に対して動作を行っているかどうかは分からないが、現場にある対象物を話し手が見ており知覚できる状態にあると考えられる。

上記のように、対象物についての情報が会話文に提示されている場合、前後の地の文に会話の場面が設定されているが、「コレ」の対象物については明記されていない。先行・後続・当会話文から、対象物が何であるかが分かる。

3.3 提示なしの場合

「コレ」の対象物が提示なしの場合は16例見られる。この場合、前後の文脈にその対象物が何であるかについて明記されず、対象物は登場人物にとっては現場にあるもので分かっているはずであるが、読み手はこの文脈では分からない。

(7) きょうも放課後、入学準備の勉強をやってから、吾一はいつものように元気よく、路地の奥に帰って行った。と、うちの中から、父の太い声が、とぎれ、とぎれに聞こえてきた。彼は急に、うちの横に立ちどまってしまった。

「いや。おれは行かない。なんと言ったって、おれはそんなところには行かないぞ。」

(略)

「バカにしてやがる。——おい、なんかないか。こんなもんじゃ、酒は飲めやせんよ。」

「……………」

「さかな屋へ行って、なんか取ってこい。それから、酒もこれっばかりじゃ、たりやしない。もっと取ってこい。」

吾一は、うちの戸ぶくろのそばに、コウモリのように吸いついていた。

(山本有三「路傍の石」)

「これ」は登場人物が現場に残っている酒の量を指示して言う。前後の文脈に具体的に酒がどのぐらいの量が残っているかが明確に提示されず、ただ量が多くないと想像できる。このように、前後の文脈において対象物について明確に叙述されていない場合は、対象物が具体的に何であるかが不明であるため、提示なしとする。この場合、(7)のように「これ」が量や程度を示す場合は6例である。それ以外に、次のようなものも見られる。

(8) 一方、志方は志方さんと呼ばれていた。そのことに志方は特別気にかけている気

配もなかったが吟子は使用人にだけは注意をした。

「これからは志方さんではなく旦那さまとお呼びしなさい」もとは黙ってうなずいたが、次の日から使用人達はしめし合せたように「お呼びになっています」とか「これを見て下さいとのことです」というように「志方さんが」という主語を外して言うようになった。 (渡辺淳一「花埋み」)

(8) の「これ」が何を指示するのかは前後の文脈から分からない。つまり、「これ」の対象物が何であるかが不明である。しかし、分からなくても「これ」の対象物は現場にある何かのものであると分かれば十分である。ここの「これ」を「それ」と置き換えて、「それを見て下さいとのことです」にすると、不自然である。

このように、指示の対象物が何であるかは前後の文脈において、提示されていない場合に、登場人物が対象物に働きかける動作の主体として「これ」を用いやすいのである。

4. 「ソレ」の場合

【表 1】に示したように、「ソレ」が 33 例のみあり、「コレ」に比して、現場指示用法が非常に少ない。そのうちの 28 例 (85%) は提示先が先行の地の文にあり、提示先の分布が偏っていることが分かる。また、提示先が先行の会話文にある場合も 3 例見られる。それ以外に、当会話文にも後続の地の文にもそれぞれ 1 例見られるが、その 2 例とも「楡家の人びと」にある例で、例外的なものと想像される。

また、現場指示の「ソレ」は対象物が聞き手の勢力範囲に属すと話し手が意識している場合なので、聞き手が対象物に働きかける動作についての叙述があると考えられる。以下は【表 1】に見られる地の文と会話文の場合に分けて、それぞれの場合において、「ソレ」の対象物についての情報はどのように提示されているか、また、聞き手と対象物の関わりについてどのように叙述されているかを具体的に検討する。

4.1 地の文にある場合

「ソレ」の対象物についての提示が地の文にある場合は、ほとんど先行の地の文にある例 (28 例) で、後続の地の文にある例は 1 例のみである。

(9) 鮎太は冴子を突きのけると、懐ろに手を入れた。カステラの紙包みは見る影もなくひしゃげていた。カステラを包んでくれた少女に悪いと思った。

「何、それ」

「お菓子を貰ったんだ」

「加島さんに？」

加島というのが、大学生の名前らしかった。

「わたしに半分頂戴！」

「いやだ」

(井上靖「あすなる物語」)

「それ」は冴子が鮎太の懐ろにあるカステラの紙包みを指示して言うのである。「何、それ」の直前の地の文に会話の場面が設定され、対象物についても明確な提示がなされている。話し手・聞き手・対象物の関わりについて、直前の地の文に、「それ」の話し手である冴子の対象物を見ており知覚しているが、働きかける叙述が見られない。聞き手である鮎太は対象物に対して「懐ろに手を入れた」という動作を行う叙述が見られ、対象物は聞き手の勢力範囲にあることが分かる。

このように、「ソレ」の対象物についての提示が先行の地の文に明確になされ、聞き手が対象物に働きかける動作の叙述もあるのである。

「ソレ」の対象物についての提示が後続の地の文にある例は次の1例である。

(10) 聖子は裾を気にしながらしゃんと立ちあがり、ふしだらな恰好でビリケンさんの朗読にすっかり熱中して聞きとれている桃子に、まるでその姉そっくりのけだかい視線をながすと、そのまま部屋を出た。そしてこの二人の、楡家の一面の代表ともいえる姉妹は、間もなく玄関から出てゆく気配がした。

「いやだ、それ熱すぎるったら！」

隣室からは米国の甘える声がきこえた。下田の婆やに世話されて粥をすすらせて貰っている楡家の末っ子は、十分に病気の特権を利用しているのだ。すると、桃子は急にビリケンさんの読みあげる呪縛から解き放された。たちまち彼女は空腹を覚えだした。

(北杜夫「楡家の人びと」)

楡家の末っ子である米国は婆やを聞き手にして、婆やに「世話されて」「すすらせて貰っている」「粥」に対して、「ソレ」を用いて指示している。先行の地の文に米国の会話の場面についての叙述が見られず、聖子と桃子のいる場面が叙述されている。ここの「いやだ、それ熱すぎるったら！」は隣室の突然の発話である。特殊な表現方式であると考えられる。直後の地の文「隣室からは～のだ」は先行の会話文を説明するのである。その発話の場面が説明されており、「それ」の対象物についての情報が提示されているのである。また、聞き手と対象物の関わりについて、後続の地の文に聞き手の婆やが対象物「粥をすす

らせ」る動作の叙述が見られる。

4.2 会話文にある場合

「ソレ」の対象物についての提示が会話文にある場合、先行の会話文にある3例と当会話文にある1例で、総計4例である。

まず先行の会話文にある例を見てみよう。

(11) 老僧は僕が詳しく云うのを聞くと、傍に坐っていた中年の女に蚊の泣くような声で云った。

「あんな、三帰戒とな、それから開経偈と讚仏偈と、それから、阿弥陀経と白骨の御文章を持っておいでんされ」

女が立って隣の部屋から持って来ると、

「あんな、このお人に、それをお目にかけてあげんされ」と云った。

蚊の泣くような声だが、女は云われるままにすらすらと動いて見せた。

(井伏鱒二「黒い雨」)

「それ」の対象物は現場にある三帰戒、開経偈、讚仏偈、阿弥陀経と白骨の御文章である。先行の会話文にその対象物についての内容があり、対象物が何であるかは提示されている。直前の地の文に聞き手である女がその対象物を「持って来る」動作についての叙述から、聞き手が対象物に働きかけており、対象物は聞き手の勢力範囲にあることが分かる。

次の(12)は対象物が当会話文にある例である。

(12) 「何をおっしゃるのです、御自分でお腹をお痛めになったお子さんじゃありませんか」

と、下田の婆やは、青雲堂の小母さん、おうめさんが出してくれた芋羊羹を丁寧に楊枝で切りながら、生真面目にたしなめた。

「そうよ、そうよ。あたしって子供の産み方も下手なら育て方も下手糞なんだわ。まあ藍さま(彼女は小さな姪に対しても楡家のまがいものの伝統的な呼び方をした)、いい服ね、ほんとにいいわ、それ。あなたって赤ん坊のときは憎らしいほど可愛かったのよ。聡がその逆に醜くって。あたしはあんたが憎らしかったわ。可愛すぎたから。今だって結構まだ可愛いけど」

(北杜夫「楡家の人びと」)

ここの「それ」は下田の婆やが現場にいる聞き手である藍さまが着ている服を指示している。当会話文に「いい服ね」というところから対象物が何であるかが分かる。それ以外

にその服についての叙述が見られない。ここの「いい服ね」という提示がないと、「それ」の使用が不自然で、使いにくい。文脈に直接話し手・聞き手が対象物である服に対して何か動作をするという内容が明記されていないが、その服は聞き手が着ているので、聞き手の勢力範囲にあると考えられる。

以上見たように、「ソレ」の場合、指示の対象物が後続会話文にある例が見られない。つまり、先行文脈に対象物と聞き手の情報が叙述され、それが前提条件として、後続文脈に「ソレ」が用いられている。

5. 「コレ」「ソレ」と前後の文脈との関わり

会話文における現場指示の「コレ」と「ソレ」は、2. 3. 4. で検討したように、以下の異同が見られる。「コレ」と「ソレ」はいずれも対象物についての提示が地の文にある場合が最も多いのが一致した点である。一方、「コレ」は対象物についての提示が様々な場合に見られるのに対して、「ソレ」は対象物についての提示が先行の地の文と会話文に偏っている点に違いが見られる。なぜこのような一致する点と異なる点が現れているのであろうか。

前者の原因は、小説の地の文と会話文の関係にあると考えられる。永野（1986）は「地の文は文章全体の基底を貫いている意味で主であり、会話文は地の文にはめこまれたものとしての位置を占めるという意味で従である」と述べ、「地の文が会話文を支える」と指摘している。このように両者の機能は対等ではない。小説の文章において、一般的に、地の文は語り手が物語について説明・描写している。それを基底にして、登場人物の発する言葉が会話文となる。すなわち、会話が行われる場面は、主に地の文で表現されるため、地の文によって会話の場面設定がなされている。その会話文に出る現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物は会話の現場にあるため、その場面設定に対象物の情報についての提示があると考えられる。そのため、「コレ」「ソレ」に関わらず、対象物についての提示が地の文にある場合が多いのである。

「コレ」は対象物についての提示が六つの場合すべてにわたって広く見られるのに対して、「ソレ」は対象物についての提示が先行文脈に偏るという相違点については、両者は前後の文脈による制限が異なるからであると考えられる。

会話文における現場指示は会話文で完結すると思われるが、1. で既に述べたように、小説の会話の場合は現実の会話と異なり、その場面は言語文脈によって設定されているのである。そのため、文章の表現として、叙述の順序の問題が出てくる。現場指示の「コレ」

「ソレ」は会話文にあっても、その対象物についての情報が前後の文脈にあり、または関わっているのである。その関わりから見れば、「コレ」においては、先行・後続の地の文・会話文、当会話文の様々なところに対象物についての提示がなされている。また、提示なしの場合も多く見られる。文脈から見れば、「コレ」の使用は前後の文脈と関わらず、自由に用いられるといえよう。極端に言えば、その対象物についての提示が明確に叙述されなくても「コレ」を用いることができる。一方、「ソレ」は先行文脈に聞き手と対象物についての関係が明確に叙述されてから用いられている。「ソレ」は常に聞き手を意識して用いられるので、対象物と聞き手との関係を叙述しないと、用いることができなくなるのである。文章の展開においても、そのような特徴が反映され、先行文脈に対象物と聞き手について明確に提示がなされているのである。聞き手の情報を提示することが必要であるため、「コレ」に比して、先行文脈に叙述が多くなされており、「ソレ」は対象物と聞き手についての内容を表現してから用いられる傾向があると考えられる。

6. まとめ

本節では小説の会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」を対象とし、その指示の対象物についての提示がなされる位置を通して、「コレ」「ソレ」と前後の文脈との関わりを見てきた。

対象物についての提示の位置から見れば、「コレ」「ソレ」はいずれも地の文にあるのが一般的である。地の文は小説の基底として、そこに会話の場面が設定されているからである。そこに話し手または聞き手が対象物に働きかける動作についての叙述がなされ、その対象物がだれの勢力範囲に属すかが分かるのである。一方、「コレ」と「ソレ」は下記のような相違点も見られる。

「コレ」は様々な場合に用いられ、「ソレ」に見られない対象物について提示なしの場合まである。話し手さえその対象物が分かれば、対象物と聞き手についての提示がなくても「コレ」が用いられる。文脈から見れば、「コレ」は前後の文脈と関係なく、自由に用いられていると考えられる。それに対して、「ソレ」は先行の文脈に対象物についての提示が明確になされており、その文脈を承けて「ソレ」が用いられている傾向が見られる。「ソレ」は基本的に対象物についての説明が先行文脈にあり、そのような先行文脈を前提条件として用いていると考えられる。

【注】

(1) 庵(2007)はテキスト内指示は文脈指示のように照応が言語的文脈内で完結するもので、テキスト外指示は現場指示や観念指示のように照応が言語的文脈では完結しないものであると指摘している。

(2) 調査資料は以下の通りである(総計40編、約475万字)。

1. 「こころ」(夏目漱石、1914年)、2. 「山椒大夫」(森鷗外、1915年)、3. 「芋粥」(芥川龍之介、1916年)、4. 「赤西蠣太」(志賀直哉、1918年)、5. 「生まれ出る悩み」(有島武郎、1918年)、6. 「売色鴨南蛮」(泉鏡花、1920年)、7. 「痴人の愛」(谷崎潤一郎、1924年)、8. 「ある心の風景」(梶井基次郎、1926年)、9. 「放浪記」(林芙美子、1930年)、10. 「銀河鉄道の夜」(宮沢賢治、1934年)、11. 「雪国」(川端康成、1935年)、12. 「風立ちぬ」(堀辰雄、1937年)、13. 「路傍の石」(山本有三、1937年)、14. 「ビルマの豎琴」(竹山道雄、1947年)、15. 「人間失格」(太宰治、1948年)、16. 「野火」(大岡昇平、1951年)、17. 「二十四の瞳」(壺井栄、1952年)、18. 「あすなる物語」(井上靖、1953年)、19. 「金閣寺」(三島由紀夫、1956年)、20. 「裸の王様」(開高健、1957年)、21. 「点と線」(松本清張、1958年)、22. 「不意の唾」(大江健三郎、1958年)、23. 「樹々は緑か」(吉行淳之介、1960年)、24. 「雁の寺」(水上勉、1961年)、25. 「楡家の人びと」(北杜夫、1962年)、26. 「砂の女」(安部公房、1962年)、27. 「さぶ」(山本周三郎、1963年)、28. 「聖少女」(倉橋由美子、1965年)、29. 「黒い雨」(井伏鱒二、1966年)、30. 「華岡青洲の妻」(有吉佐和子、1966年)、31. 「戦艦武蔵」(吉村昭、1966年)、32. 「人民は弱し 官吏は強し」(星新一、1967年)、33. 「青春の蹉跎」(石川達三、1968年)、34. 「塩狩峠」(三浦綾子、1968年)、35. 「ブンとフン」(井上ひさし、1970年)、36. 「花埋み」(渡辺淳一、1970年)、37. 「まゆ墨の金ちゃん」(池波正太郎、1972年)、38. 「太郎物語高校編」(曾野綾子、1973年)、39. 「冬の旅」(立原正秋、1975年)、40. 「女社長に乾杯」(赤川次郎、1981年)

第四章 指示連体詞「コノ」「ソノ」の後続名詞類の特徴

第一節 「コノ」「ソノ」の代行指示用法

1. 先行研究と問題の所在

指示連体詞「コノ」「ソノ」は後続の名詞や名詞句（以下後続名詞類と呼ぶ）と結合して、一つの指示表現として文章前後を内容的に関係づけ、文脈展開において重要な働きをしている（注 1）。文脈指示の「コノ」「ソノ」は代行指示と指定指示に分けることができる。これは林（1972）が文脈指示の「コノ」「ソノ」を代行指示と限定指示とに分けることを提唱し、のちに、林（1983）で限定指示を指定指示と改称したものである。林によると、代行指示とは「指す対象物を自分がそっくり代行してしまう指し方」で、指定指示とは「指定だけしている指し方」である。両者の用法について、次のような典型例を挙げることができる。

(1) しかし、もっと彼女たちに意外だったことは、そのお時さんが、傍の若い男と親しそうに何か話していることだった。その男の横顔は、彼女たちに見おぼえがなかった。
(松本清張「点と線」)

(2) 夜がふけて、少年とその母親だけが、床に横たわっているがんじょうな死体の傍にいた。母親は男のように尻をつき膝を両腕にかかえこんで身動き一つしないでいた。少年は谷に面した窓から下を見つめて、これも身動き一つせず黙りこんでいた。
(大江健三郎「不意の唾」)

(3) 残肴は、その家の侍が一堂に集まって、食う事になっていたからである。尤も、大饗に比しいと云っても昔の事だから、品数の多い割に碌な物はない、餅、伏菟、蒸鮑、干鳥、宇治の氷魚、近江の鮎、鯛の楚割、鮭の内子、焼蛸、大海老、大柑子、小柑子、橘、串柿などの類である。唯、その中に、例の芋粥があった。
(芥川龍之介「芋粥」)

(1) は林の言う指定指示の例である。「その男」は、先行の「傍の若い男」を指示しているが、「その」は「対象物」である「傍の若い男」を「指定だけしている指し方」である。つまり、「その」のみならず、「その」＋後続名詞の「男」全体で先行文脈の「傍の若い男」

を指示する用法である。一方、(2) は林の言う代行指示の例である。「その母親」は先行の「少年」の「母親」を指示しており、「その」は「対象物」である「少年」を「そっくり代行してしまう指し方」である。「母親」に相当する語句は先行文脈に出ておらず、「その」のみ先行文脈の指示対象「少年」を代行する用法である。このように、指定指示は「コノ」「ソノ」と後続名詞類が全体で指示対象と照応する用法であり、代行指示は「コノ」「ソノ」単独で指示対象と照応する用法である、と規定することができる。(3) も代行指示であり、「その中」の「その」は直前の波線を引いたところの「残肴は～串柿などの類である」という広い内容を指示している。

林(1983)は文脈指示をこのように二分類した上で、「夢十夜」における代行指示「ソノ」の後続名詞類について、「上、中、後、次、周囲、傍、(片)端、一つ、度、顔、口、幹」のようなものが挙げられ、「相対的位置」や「時間上の相対関係」や「人の体の中の『顔』『口』、松の木の中の『幹』」のように、空間存在における全部中の部分」を表すことばが見られ、大部分は「相対関係の表示」であり、「相対関係を示すことばが来るといふ非常にはっきりした傾向が見られる」と述べた。また、この現象について、庵(2007)は代行指示の場合、「ソノ」の後続名詞類が1項名詞であることが原則的であるという統語的特徴に注目した。1項名詞とは、「著書」「作者」のように内部に「誰の」「何の」を「統語的」な「項」として取るもので、「相対名詞を包含する概念」であると述べ(注2)、「動名詞/派生名詞、非飽和名詞句といった概念」との関連性を考察した。

庵の論によって、林の言う「相対関係の表示」は1項名詞の一部分であり、代行指示の後続名詞類はすべて1項名詞に属することが明らかになった。しかし、1項名詞は広い概念であり、たとえば、先に挙げた(2)の「母親」のような具体的な人物を表す語もあれば、(3)の「中」のような抽象的な関係を表す語もある。そのため、それらをさらに分析する必要がある。(2)の「その母親」は直前に「少年と」のような文脈上の条件があるために、「その」は代行指示になると解されるが、「少年と」のような文脈がないと、代行指示になる可能性が低い。しかし、(3)の「中」は具体的な実物や人物ではなく、抽象的な関係を表す語である。そのため、「中」は何を意味するのかを理解するのに「何の」を補う文脈が必要であり、このような名詞が続く時、「その」はもともと代行指示になりやすい。このように、後続名詞類が同じ1項名詞であっても、具体的な人物を表す語より、抽象的な関係を表す語は代行指示になりやすいのである。要するに、後続名詞類の意味のカテゴリーによって、代行指示になりやすいものとそうでないものがあると考えられる。

このような後続名詞類の意味のカテゴリーについて、林は位置、時間、人体やものの部分などに触れたが、本節では、さらに範囲を広げて代行指示の後続名詞類の傾向を把握する。そこで、小説の地の文における代行指示の「コノ」「ソノ」を対象とし、後続名詞類の意味のカテゴリーを七種類に分けて、(1) どのようなカテゴリーが代行指示になりやすいか、(2) そのカテゴリーにおいて「コノ」「ソノ」は文脈展開上にどのような役割を果たしているかについて考察する。

2. 後続名詞類の分類

問題の所在で述べたように、後続名詞類のカテゴリーが違っていると、「コノ」「ソノ」は代行指示になりやすい場合とそうでない場合がある。そこで、後続名詞類をカテゴリーに分類して考察する。林と庵によって指摘されたいくつかのカテゴリーを踏まえつつ、本節では小説に見られる文脈指示の「コノ」「ソノ」(代行指示と指定指示を合わせて)の後続名詞類を以下の七種類のカテゴリーに分類する。なお、例示した語に「*」を付したものは1項名詞である。

人物：「親*」「人」「男」のような普通名詞、「志乃(名前)」「五位(官職名)」のような固有名詞など人間を表すもの。

物体：「鳥」「紙」のような空間を占める具体的な物体や「顔*」「羽根*」のような人間か動物の体の一部分を表すものに加えて、「光」「声*」「電気」のような空間を占めない物質も特殊な物体と見なす。

人間行動：人間の行為、心情、思考などである。具体的に言えば、「笑い」「行き」など具体的な動作を表すもの、「喜び」や「苦悶」など心情を表すものである(注3)。

事態・様相：事態とは「出来事」「運命」のような物事の状態やなりゆきで、様相とは「様子*」「美しさ*」のような物事のありさまや様子などのものである。「会話」「話」のような発話等の内容も事態・様相とする(注4)。

時間：「時*」「際*」「頃*」のような限定のない時間表現と、「日」「夜」「年」(この3語は場合によっては1項名詞になる)のような具体的に限定された時間表現のもの。

場所：「地方」「広間」「辺り*」など一定の空間を表わすもの。ただし、文脈によって、「建物」のような場所を表す語であっても、空間より、一つの塊として意味する場合、物体のカテゴリーに入れる。

抽象的名詞：「おかげ*」「とおり*」「場合*」「ため*」など具体的な事物ではなく、「コノ」「ソノ」と結合して前後の抽象的な関係を示すもの。

上記の後続名詞類のカテゴリー別に、CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』に収録された 20 編の小説（注 5）の地の文における「コノ」「ソノ」の用例を調べ、代行指示に絞って、後続名詞類の特徴及び「コノ」「ソノ」の文脈展開における働きを考察する。

3. 後続名詞類と代行指示の「コノ」「ソノ」

上記の小説の地の文における文脈指示用法の「コノ」「ソノ」を代行指示と指定指示に分けて、その後続名詞類をカテゴリー別に整理すると、以下の【表 1】のような結果となる（参考のために指定指示を入れておく）。

【表 1 資料における「コノ」「ソノ」の後続名詞類と指示用法】*

	人物		物体		人間行動		事態・様相		時間		場所		抽象的名詞		合計	
	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ
代行指示	0	5	0	73	0	0	0	37	35	156	9	69	14	47	58	387
指定指示	93	99	63	187	43	68	65	128	10	22	54	31	2	6	330	541
合計	93	104	63	260	43	68	65	165	45	178	63	100	16	53	388	928

*【表 1】の「コノ」「ソノ」が代行指示である場合の後続名詞類の詳細は pp. 156-158 の【資料 5】を参照。なお、この 20 編の小説の地の文における指示語「コノ」「ソノ」の全体は p. 159 の【資料 6】を参照。

【表 1】に示したように、代行指示の場合、「コノ」は 58 例で、全体（388 例）の 15% を占めるのに過ぎないのに対して、「ソノ」は 387 例であり、全体（928 例）の 42% を占めている。この表から、「ソノ」は「コノ」に比べ、代行指示に用いられやすいことが分かる。

また、カテゴリーの項目を見ると、「ソノ」は「人物」「物体」「事態・様相」「時間」「場所」「抽象的名詞」の大部分のカテゴリーに用いられる。それに対して、「コノ」は「時間」「場所」と「抽象的名詞」の場合にのみ用いられ、特に「時間」「抽象的名詞」の場合に、代行指示の数量が指定指示を上回るのは、ほかのカテゴリーでは見られない現象であると分かる。このような分布上の偏りは、用法上の特徴を予測させる。

以下は後続名詞類のカテゴリー別に代行指示の「コノ」と「ソノ」の特徴を考察する。

なお、「人間行動」は代行指示の用例がないため、扱わない。

3.1 後続名詞類が「人物」である場合

後続名詞類が人物である場合、【表 1】に示したように、「コノ」の代行指示の例はない。一方、「ソノ」はわずかながら、代行指示の例が見られる。

(4) 同心を勤める人にも、種々の性質があるから、この時只うるさいと思って、耳を掩いたく思う冷淡な同心があるかと思えば、又しみじみと人の哀を身に引き承けて、役柄ゆえ気色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあった。場合によって非常に悲惨な境遇に陥った罪人とその親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が幸領して行くことになると、その同心は不覚の涙を禁じ得ぬのであった。

(森鷗外「高瀬舟」)

「その親類」の「その」は同一文中にある「罪人」を代行し、「その親類」は「非常に悲惨な境遇に陥った罪人」の「親類」という意味である。典型的な代行指示である。

このような代行指示は総計 5 例ある。具体的には、「罪人とその親類」が 2 回出ており、「少年とその母親」「モミジ屋と、その相手」「緋縮緬のと並んでいた、そのつれ」のような表現で、いずれも「a とソノ b」(b は a という人物の相対的關係にある人を表す語である)の形である。しかも、代行対象が「ソノ」の直前にあり、文内レベルの照応である。「ソノ」は人物を代行し、「親類」「つれ」「母親」「相手」は代行対象である人物との相対的關係を表す語である。これらの語は人物を表すが、「誰の」という前提がある。つまり、このような語は「人」「少女」のような単独で考えられる概念を表す語とは違い、ある人に対して相対的關係の意味を持つもので、1 項名詞でもある。

ところで、後続名詞類が人物である場合、なぜ「コノ」は代行指示に用いられないのか。竹田(2001)は、一般に、「コノ+名詞類」全体で先行文脈から指示対象を探索すると指摘している。上述の相対的關係を表す語、たとえば上記の(4)の「その親類」を「この親類」と置き換え、「場合によって非常に悲惨な境遇に陥った罪人とこの親類とを、…」とすると、読み手は「この親類」全体で先行文脈に「親類」に当たる人物についての叙述があると推測するであろう。この場合、「この」は「罪人の」と読み取るのは不自然で、「この親類」は、「罪人の」「親類」以外の先行文脈にある人物を探索するのが自然である。このように、「コノ+人物」全体で先行文脈の人物を指示する傾向を持つため、「コノ」は代行指示に用いられにくい。

以上分析したように、後続名詞類が人物である場合、「コノ」は代行指示に用いられにくく、「ソノ」のみ代行指示に用いられる。代行指示の「ソノ」の後続名詞類は相対的な関係にある人物を表す語であり、「a とソノ b」(b は a という人物の相対的な関係にある人) の形が多く、いずれも文内レベルの照応である。

3.2 後続名詞類が「物体」である場合

後続名詞類が物体である場合、代行指示は「コノ」の例がなく、「ソノ」の例(73例)のみ見られる。その原因は、前節 3.1 で述べたように、「コノ」は後続名詞類と全体で先行文脈のものを指示するのに対して、「ソノ」は単独で先行文脈のものを指示する用法を持つことに関わると思われる。

- (5) 或日、けたたましく犬の吠える声がするので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまわして、毛の長い、痩せた尨犬を逐いまわしている。それも唯、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁しながら逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。(芥川龍之介「鼻」)

「その顔」は先行文脈にある「中童子」の「顔」を意味し、「その」は「中童子」を代行するので、代行指示である。代行対象である「中童子」は「その」と同じ文にあり、すぐ直前の文脈にあるので、「なんの顔」かすぐ分かる。「顔」は「そ」、つまり「中童子」の体の一部分である。また、次のようなものの一部分を表す語もある。

- (6) 雪の為に薄くぼかされた真黒な大きな山、その頂からは、火が燃え立つように、ちらりちらり白い波頭が立っては消え、消えては立ちして、瞬間毎に高さを増して行った。(有島武郎「生まれ出づる悩み」)

「その頂」の「その」は直前の「山」を代行し、「その頂」は「山」の「頂」を意味する。「頂」は「山」の一部分である。

【表 1】に見られる 73 例の代行指示はすべて後続名詞類が 1 項名詞である。そのうち、37 例は「目」「手」「顔」「足」「羽根」など人間か動物の体の一部分を表す語で、「ソノ」は「誰の」という意味となっている。また、28 例は「頂」「ふた」「下枝」などものの一部分を表す語である。このように、体の一部分または物体の一部分を表す語は全体の 90% を占めている。

要するに、後続名詞類が物体である場合は、人物の場合と似ており、「ソノ」のみ代行指示に用いられる。後続名詞類の大部分は体や物体の一部分を表す語で、全体に対して部分的・相対的なものが多いといえる。

3.3 後続名詞類が「事態・様相」である場合

後続名詞類が事態・様相である場合、「コノ」「ソノ」の代行指示の傾向は「人物」「物体」の場合と同じく、「ソノ」の使用例（37例）のみ見られる。

(7) 徳川時代には京都の罪人が遠島を言い渡されると、高瀬舟で大阪へ廻されたそうである。それを護送して行く京都町奉行附の同心が悲しい話ばかり聞せられる。或るときこの舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがっていなかった。その仔細を尋ねると、これまで食を得ることに困っていたのに、遠島を言い渡された時、銅銭二百文を貰ったが、錢を使わずに持っているのは始だと答えた。

（森鷗外「高瀬舟」）

「その」は代行指示であり、「その仔細」の「その」の代行対象は直前の一文にある「兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがっていなかった」という内容である。その内容を直後で承けているので、「その仔細」が何を意味するのかが明確である。

後続名詞類が事態・様相である場合、「仔細」以外に、「姿」「始終」「恰好」「美しさ」「滑らかさ」「調子」「人品」などが見られ、人間や事物のある一面としての事態・様相を表している1項名詞である。人物、物体の場合と似ており、全体に対して部分的・相対的なものを示す表現が多いと考えられる。

3.4 後続名詞類が「時間」である場合

「コノ」「ソノ」は後続名詞類と一緒に、時間・場所を表現することができる。この点において、「コレ」「ソレ」と異なる（「コレ」「ソレ」は時間と場所を表すことができない）。後続名詞類が時間である場合、「コノ」（35例）「ソノ」（156例）はいずれも代行指示があり、しかも指定指示より多く用いられている。代行指示が多く見られるのはなぜであろうか。

(8) 或る日、五位が三条坊門を神泉苑の方へ行く所で、子供が六七人、路ばたに集って何かしているのを見た事がある。「こまつぶり」でも、廻しているのかと思って、後ろから覗いて見ると、何処かから迷って来た、扈犬の首へ縄をつけて、打ったり

殴いたりしているのであった。臆病な五位は、これまで何かに同情を寄せる事があっても、あたりへ気を兼ねて、まだ一度もそれを行為に現わした事がない。が、この時だけは相手が子供だと云うので、幾分か勇気が出た。そこで出来るだけ、笑顔をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、勘忍してやりなされ。犬も打たれば、痛いであろう」と声をかけた。(芥川龍之介「芋粥」)

「この時」は五位が子供たちが「尨犬」をいじめているのを見た「時」を指し示している。先行文脈に時間についての語句が現れておらず、「この」は五位は子供たちが「尨犬」をいじめているのを見たことを代行し、「この時」は前述のすべての関連内容、つまり「或る日、五位が三条坊門を神泉苑の方へ行く所で、～打ったり殴いたりしているのであった」という内容をそのまま承けて、このことが起こった時の意味である。

「その時」の場合はどうなるであろうか。

(9) ようやく、山田が店の奥から出てきた。指を焦がしそうに短くなった煙草を灰皿の中で揉み消すと、大きく一つ伸びをし、
「さて、残りを刈るとしようか」

その時鏡の中には頬の削げた蒼白い山田の顔が映っていた。髭の剃り痕が、青々としていた。(吉行淳之介「樹々は緑か」)

「その時」は先行の事件進行「山田が～一つ伸びをし」、発言したという時である。先行文脈に「時」を表す語句がなく、「その」は直前の叙述された行動や事態を代行している。

上記2例のように、「この時」と「その時」はいずれもある行動または事態が発生し、すぐ次に、その発生時間について「その時」か「この時」が出てくる。つまり、先行文脈を承けて、「時」を付け加えて、同じ時間の条件の下で、次の行動や事態が叙述され、物語が展開していくのである。小説では、時間を表す名詞において、このような型が確立されているため、代行指示に用いられやすいと考えられる。

後続名詞類として、「とき(時)」が最も多い(「このとき」は23例(全体の66%)で、「そのとき」は68例(全体の44%))。それ以外では、「コノ」において、「間」(絶対指示の「この間」ではない)(3例)、「際」(2例)、「日」(2例)が多く、「ソノ」において、「日」(21例)、「後」(13例)、「頃」(ごろ)(9例)が多く見られる。いずれも1項名詞であり、行動や事態が起こった「とき」(「日」、「際」など)の意味である。

このように、後続名詞類が時間である場合、「人物」「物体」「事態・様相」の場合のように先行文脈から具体的なものを切り取って持ち込むのではなく、前述内容をそのまま承け

て、同じ時間の下で、後述事件が起こる。「このとき」「そのとき」は前件と後件をつなぐ接続語（注6）に近い表現として多く用いられる。

3.5 後続名詞類が「場所」である場合

後続名詞類が場所である場合、時間の場合と似ており、「コノ」「ソノ」はともに代行指示の例が見られる。特に「ソノ」は代行指示が多い（69例）ことが目立っている。

- (10) 護岸工事に使う小石が積んであった。それは秋日の下で一種の強い匂いをたてていた。荒神橋の方に遠心乾燥器が草原に転っていた。そのあたりで測定の巻尺が光っていた。（梶井基次郎「ある心の風景」）

「そのあたり」はただの「草原」の「あたり」ではなく、先行の「荒神橋の方に遠心乾燥器が草原に転っていた」ところの「あたり」の意味である。「その」のみで先行文脈と照応しており、代行指示である。「そのあたり」は先行の行動や事態の発生した場所の「あたり」で、前述の内容を承けて、同じ場所という条件のもとで、後述の行動や事態が起こる。時間の場合と同様に、前件と後件は同じ時空間を条件として共有している。

また、「コノ」においても、(10)の「そのあたり」と同じく、前述の内容を承ける例が多く見られる。

- (11) 寺のちかくまで行くと、この界限は停電ではなかったのか、家家の窓にちらほら灯影がうつっていた。寺の門に入って、すぐ小屋の表口にはかからずに、塀と小屋とのあいだの、灌木の植込の中を、くもの巣にからまれながらくぐり抜けて、裏手の縁側のまえ、しめてある雨戸をがたがたとゆすると、それが内側から引かれて、あがりこんだところがたった一間らしく、その六畳敷のなかばには箆笥とか行李とか、女学生などのもちそうな本箱に古雑誌を積んだやつまで押しこんであって、あいている場所は三畳ばかりの、まん中にひくいちゃぶ台、それをかこんで、女も入れて三人ですわるともういっぱいであった。（石川淳「変化雑載」）

「この界限」は先行の「行く」という行動の目的地である「寺のちかく」を中心とした「界限」であると解される。

このように、場所の場合も時間の場合と似ており、ある場所である行動や事態が起こり、そのすぐ次に「そのあたり」、「この界限」のような表現をとっているのである。

その後続名詞類として、「コノ」は「あたり」（3例）、「界限」（3例）などが見られる。一方、「ソノ」は「上」（接続詞の「そのうえ」ではない）（11例）、「中」（7例）、「下」（5

例)、「あたり」(5例)、「そば」(4例)、「前」(4例)など例が多く見られる。いずれも1項名詞で、しかもある場所の相対的な位置を表す語である。ある行動や事態が起こり、直後に、「そのあたり」「この界限」のような表現が用いられ、その行動や事態の起こった場所において、次の行動や事態が叙述される。先行文脈をそのまま承けて後続文脈につないでおり、接続語に近い働きを持っている。

3.6 後続名詞類が「抽象的名詞」である場合

抽象的名詞は、「おかげ」、「場合」、「ため」などのように抽象的な関係や内容を示すものであり、前述の「人物」「物体」「事態・様相」のような具体的な事物や様相とは大きく異なっている。

この場合、これらの名詞は「コノ」「ソノ」と結合して前後の事柄を抽象的な関係として示すため、「コノ」と「ソノ」はいずれも代行指示の例が指定指示より圧倒的に多く見られる。

(12) 「俺はやはり腸捻転になったのだろう」と蠣太が苦しげに云った。「どうもそうかと思われます」と安甲が答えた。その時蠣太は可恐い顔をして安甲をにらみつけた。安甲はびっくりした。すると直ぐ、蠣太は反って穏かにこう云った。「何でも本当の事を云ってくれ」安甲は「へえ」と頭を下げた。「俺の病気は医者が診たところで助かるまい」と蠣太が云った。さすがの安甲もこの場合「へえ」とは云えなかった。黙っていると……、 (志賀直哉「赤西蠣太」)

(13) 秋になってから県庁が新築され、大規模な不正が発覚した。そのため人事異動が起って俊介の課でも課長が交替した。新任の課長は不正の火元といわれる資材課から移って来たのだが、山林課の仕事の内容についてはまったくのしろうとだった。 (開高健「パニック」)

(12)の「この場合」は『俺の病気は医者が診たところで助かるまい』と蠣太が云ったという「場合」である。「この場合」の「場合」についての叙述は先行文脈に出ておらず、「この」は直前の内容をそのまま承けて、「場合」を加えて、接続語のように、前後の内容が接続されている。(13)の「そのため」も(12)の「この場合」と似ており、前後の内容の接続関係を示している。「県庁が新築され、大規模な不正が発覚した」「ため」の意味になっている。

後続名詞類は抽象的名詞である場合、「コノ」において、「場」(4例)、「場合」(3例)な

どが見られるのに対して、「ソノ」において、「中」(10例)、「ため」(6例)、「たび」(5例)、「場」(4例)などが見られ、後続名詞類の内容に違いが見られるが、いずれも1項名詞である。

ところで、後続名詞類が抽象的名詞である場合、なぜ「コノ」「ソノ」は代行指示に用いられやすいのであろうか。(12)の一部分の内容を略して、次のように書き換えたものを例に考えたい。

？(12)「俺はやはり腸捻転になったのだろう」と蠣太が苦しげに云った。「どうもそうかと思われます」と安甲が答えた。その時蠣太は可恐い顔をして安甲をにらみつけた。さすがの安甲もこの場合「へえ」とは云えなかった。黙っていると……、もともと(12)では、「この場合」は『俺の病気は医者が診たところで助かるまい』と蠣太が云った」という内容を承けているが、もしこのように書き換えると、「この場合」はその直前の内容、つまり「蠣太は可恐い顔をして安甲をにらみつけた」までの内容を承けていると解釈するであろう。要するに、ここの「この場合」はもとの(12)と違う内容を承けても、意味が通じる。それは、「この」は先行文脈から具体的な物体や人物を切り取って持ち込むのではなく、直前の内容をそのまま漠然と受け、「場合」を付け加えて、接続語のような働きによって、前後の文脈を接続しているからである。つまり、「この場合」という表現は接続語的な機能を持つ語句といえるであろう。

このように、後続名詞類は抽象的名詞である場合、「コノ」「ソノ」と結合して前件と後件を接続し、接続語に近い働きをしている。先行文脈にその抽象的名詞に相当する内容がある可能性が低く、代行指示になりやすいのである。なお、「時間」「場所」の場合も、抽象的名詞の場合と似ており、「この時」、「そのあたり」が先行文脈を広く承けて後続文脈につなぎ、文脈展開において接続語に近い役割を果たしていると考えられる。

4. まとめ

本節では、小説の地の文における代行指示の「コノ」「ソノ」と後続名詞類のカテゴリーとの関わりについて見てきた。

後続名詞類のカテゴリーを見ると、「人物」「物体」「事態・様相」の場合に、「ソノ」のみが代行指示に用いられている。それに対して、「抽象的名詞」「時間」「場所」の場合に、「コノ」「ソノ」は両方とも代行指示に用いられている。とりわけ「コノ」は「時間」「抽象的名詞」が後続する時、代行指示が指定指示を上回っている点が注目される。

後続名詞類はすべて庵の言う 1 項名詞であることが確認されたが、カテゴリー別に特徴を見ると、「人物」「物体」「事態・様相」「場所」の場合には、「相手」「顔」「枝」「美しさ」「そば」のような相対的・部分的な概念を表すものが多く、林の言う「相対関係の表示」の例が多いことが確認された。しかし一方、「時間」「抽象的名詞」の場合には、「とき」「場合」のような「相対関係の表示」でないものも多く指摘された。後者のような特徴は「コノ」「ソノ」の文脈展開の機能とも関わっていると考えられる。

後続名詞類が「時間」「場所」「抽象的名詞」である場合に、「コノ」「ソノ」はいずれも、先行文脈の広い内容を承け、後続文脈に続ける表現が多く、「その時」「この場合」のような表現で接続語に近い用法が見られた。ただし、「ソノ」は後続名詞類に、「人物」「物体」「事態・様相」のような具体的な内容の名詞をとる場合もあるのに対して、「コノ」はそのような具体的な内容の後続名詞類をとることはなく、後続名詞類と合わさってもっぱら接続語のような表現を作る点に違いが見られた。

【注】

- (1) 本研究の第一章において、文脈展開と指示語の文脈展開機能について論述している。
- (2) 相対名詞という術語の初出は松下（1924）である。松下は「人」「鳥」「政治」など他物に関係せずに単独に考えられる概念を表す「絶対名詞」に対し、「相対名詞」を「他物に対して相関係してのみ具備的に考えられ、単独に考えては意味の具備しない概念を表す語である」としている。
- (3) 第三章の「コレ」「ソレ」についての考察では、このカテゴリーを「行為・心情」としたが、本章では「人間行動」とする。
- (4) 第三章では、「発話等の内容」を一つのカテゴリーとしたが、本章では、「事態・様相」の一部とする。
- (5) 調査資料は以下の通りである（総計 20 編、約 36 万字）。
 - ①「山椒大夫」（森鷗外、1915 年）、②「高瀬舟」（森鷗外、1916 年）、③「鼻」（芥川龍之介、1916 年）、④「芋粥」（芥川龍之介、1916 年）、⑤「生まれ出づる悩み」（有島武郎、1918 年）、⑥「赤西蠣太」（志賀直哉、1918 年）、⑦「小僧の神様」（志賀直哉、1920 年）、⑧「売色鴨南蛮」（泉鏡花、1920 年）、⑨「ある心の風景」（梶井基次郎、1926 年）、⑩「冬の日」（梶井基次郎、1927 年）、⑪「焼跡のイエス」（石川淳、1946 年）、⑫「変化雑載」（石川淳、1948 年）、⑬「パニック」（開高健、1957 年）、⑭「不意の唾」（大江健三郎、1958 年）、⑮

「樹々は緑か」(吉行淳之介、1960年)、⑩「雁の寺」(水上勉、1961年)、⑪「初夜」(三浦哲郎、1961年)、⑫「焼土層」(野坂昭如、1968年)、⑬「まゆ墨の金ちゃん」(池波正太郎、1972年) ⑭「芸者変転」(池波正太郎、1972年)

調査資料について、次の点に留意した。1、新潮文庫は流布本であり、原作の表記と変わっているが、「コノ」「ソノ」の用例を取り出すことに支障がないと考えられる。2、長編小説の場合、指示語はどこを何を指示するのか、分からなくなりやすいため、中・短編の小説を資料とした。3、作家の個人差を避けるため、一人の作家は2編以内の小説を対象とした。4、叙述内容を揃えるために、三人称小説も一人称小説も対象とした。5、時代的には大正初期の1915年から昭和後期1972年までである。

(6) 接続語について、会田貞夫・中野博之・中村幸弘(2004)では、「接続語」は「接続文節」とも呼び、「および」「それに」「しかし」のような前後の文節や前後の文と文とを接続している文節である。「主語」「修飾語」などと同じく文中で役割としての名称であり、「接続詞」は品詞としての名称であると解説している。

第二節 「コノ」「ソノ」の指定指示用法

1. 先行研究と問題の所在

文脈指示の「コノ」「ソノ」は代行指示と指定指示に分けることができる。第四章第一節では、代行指示を中心に小説の地の文における「コノ」「ソノ」の後続名詞類について、「人物」「物体」「人間行動」「事態・様相」「時間」「場所」「抽象的名詞」の七種類のカテゴリーに分けて考察したが、指定指示の場合については、十分に検討していない。そこで、本節では、その続きとして、指定指示の「コノ」「ソノ」の後続名詞類について、カテゴリーを分けてその特徴を考察する。

林（1983）は文脈指示を代行指示と指定指示に二分類した上で、「夢十夜」における指定指示について、「コノ」の22例のうち、13例が「反復」で、残りの9例が「表現のとらえ直し」としている。それに対して、「ソノ」の23例のうち、「反復」は7例で、「表現のとらえ直し」は16例であると指摘している。「反復」とは「先行する名詞を反復して指定する形」であり、「表現のとらえ直し」とは「先行詞」を別の「名詞句に変えて受けとめている」場合であるとしている。

庵（2007）は林（1983）の考察を踏まえ、指定指示の場合の「コノ」「ソノ」の交代可能性を通して、両者が用いられる文脈を考察し、その相違点として、先行文脈の「言い換え」や「ラベル貼り」の場合は「コノ」しか使えないことを指摘した。庵の言う「言い換え」は「コノ」の後続名詞類が言い方を換えて先行詞を表現する場合である。たとえば先行詞は人物の名前「エリザベス」で、後続文脈で指示表現「この女優」を用い言い換えており、「女優」は「エリザベス」の「言い換え」である。「ラベル貼り」は「先行する発話や文連続を指示しそれらに名付けをする（ラベルを貼る）用法」である。庵は「ラベル貼り」の例として、次のようなものを挙げている。

- 夜、ある町の外科医のところへ大怪我をした男が治療を受けにきた。住所をきくと隣の町から来たという。「隣の町なら、有名な外科医がいるのに、どうしてわざわざここまで来たんです？」

このジョークのおちは読者に考えていただこうと思う。

（織田正吉『ジョークとトリック』）

庵は「このジョーク」は波線のついた先行文脈の長い内容に名付けをする（ラベルを貼

る)用法であると指摘している。庵は「ラベル貼り」は「言い換え」とは別に扱うが、筆者は「ラベル貼り」は先行文脈の反復ではなく、先行文脈を言い換えて指示語を用いている以上、言い換えの一種であると考え。また、庵の指摘とは異なり、場合によっては、言い換えに「ソノ」の使用も可能である。たとえば、次のようなものである。

- (1) 玩具の兵隊のような派手な制服を着たサーカスの男が、一郎の手にグラブをはめた。檻の中に入れられた。直立しているカンガルーと向い合うと、その動物の方が一郎より背が高かった。カンガルーは、じっと立っているだけである。しかし、一郎が拳を突出すと、動物も反射的にグラブをはめた前肢をピョコンと振る。

(吉行淳之介「樹々は緑か」)

「その動物」は先行の「カンガルー」を指示し、「動物」は「カンガルー」の上位語で、言い換えである。このように、「その」が言い換えに用いることができるのである。

上記のように、先行研究は指定指示の下位分類について統一した基準がない。さらに、庵の指摘では、「この女優」の「女優」が「エリザベス」の上位語で、「上位型の言い換え」とされている。一方で、「このジョーク」は先行の長い事柄をまとめて表現しており、「ラベル貼り」とされている。このように、後続名詞類が人物のカテゴリーである場合と事柄のカテゴリーである場合とでは言い換えの具体的な用法が異なっており、後続名詞類のカテゴリーは言い換えの具体的な用法と関係していると思われる。そこで、統一した観点で指定指示を分類し、「コノ」「ソノ」の後続名詞類との関わりを考察する必要がある。

本節では先行研究を踏まえ、指定指示の下位分類を規定し、分類したうえで、小説の地の文における指定指示の「コノ」「ソノ」の用例を調査する。また、後続名詞類を第一節と同様に七種類のカテゴリーに分けて考察し、それぞれの指定指示用法の特徴を明らかにする。

2. 「コノ」「ソノ」の文脈指示用法の分類

本研究では、先行研究を踏まえ、指定指示の分類を次のように規定する。まず指定指示を反復と言い換えに二分し、言い換えの下位分類として、「上位型の言い換え」、「内包型の言い換え」、「ラベル貼りの言い換え」、「類義型の言い換え」と「カテゴリーの転換」の五種類に分類しておく。以下は例を挙げて説明する。引用例はすべてCD-ROM版『新潮文庫の100冊』による。

2.1 反復

反復とは、先行文脈にある名詞類が「コノ」「ソノ」の後続名詞類として再び出現する場合である。本研究は林（1983）の「反復」の概念と用語を受け継ぎ、用いている。

- (2) しかし、もっと彼女たちに意外だったことは、そのお時さんが、傍の若い男と親しそうに何か話していることだった。その男の横顔は、彼女たちに見おぼえがなかった。
- （松本清張「点と線」）

「その男」は先行の「傍の若い男」を指示しており、「男」が反復されている。

2.2 言い換え

言い換えとは、「コノ」「ソノ」の後続名詞類が先行文脈に出現していないが、先行文脈には相当する語句がある場合である。林（1983）の言う「表現のとらえ直し」に相当する。庵（2007）の言う「言い換え」より広い概念である。本研究では、言い換えを具体的に次の五種類に分類する。

2.2.1 上位型の言い換え

庵（2007）は先行詞をその上位概念で言い換えたものを「上位型の言い換え」としている。本研究では、この概念を受け継ぎ、「上位型の言い換え」という用語と概念を用いる。

- (3) そのときには劇薬一〇八〇剤を使ったので、一夜あけて訪れるとネズミは巣穴の周辺でバタバタ死んでいた。この薬は微量でも神経をたちまちマヒさせるから、ネズミは自分の死体をかくす余裕なくその場でたおれてしまうのである。

（開高健「パニック」）

「この薬」は先行文脈の「劇薬一〇八〇剤」の言い換えである。「薬」は様々な薬の集合であり、「劇薬一〇八〇剤」はその中の一種である。つまり、「薬」は「劇薬一〇八〇剤」の上位語である。

2.2.2 内包型の言い換え

庵（2007）は「上位型の言い換え」以外に、「内包型の言い換え」も言い換えの一種としている。庵の言う「内包型の言い換え」とは後続文脈で先行詞をその属性で言い換えた場合である。本研究でも、「内包型の言い換え」を用いる。

- (4) 彼らはひとびとに失政を説き、うやむやに葬られた過去の不正事件の数々をあげきたて、官僚の腐敗をののしり、ピロツティ・スタイルの県庁舎を指さして鼻持ちならぬまやかしの近代主義だときめつけたのである。彼らの一人はその採光のゆき

とどいた、輝くようなガラス張り建築物のなかでおこなわれている卑屈で暗い政治を弾劾する材料の一つとして、どこから探り出したのか、俊介の家へ上申書ボイコット事件のいきさつを聞きにやって来た。(開高健「パニック」)

先行文脈の「ピロッチェ・スタイルの県庁舎」を、「その採光のゆきとどいた、輝くようなガラス張り建築物」という長い名詞句で指示している。「その」の後続名詞類は先行の「県庁舎」の具体的な様子・属性であり、「内包型の言い換え」である。

2.2.3 ラベル貼りの言い換え

「ラベル貼りの言い換え」は以下の「この作業」のような表現で先行内容を承けて、まとめるような言い換えである。庵(2007)の言う「ラベル貼り」は「言い換え」とは異なり、独立した概念として用いている。本研究では言い換えの一種とする。

(5) 慈念は慈海の胸に耳をあててじっとしていた。やがて鉢頭をうなずかせて立ち上ると表庭へもどった。百日紅の下の蔭の葉を手くらがりの中でむしり取りはじめた。この作業は一時間余かかった。慈念の手は蔭のアクで黒くよごれた。慈念はその葉を床下に何どもはこんだ。(水上勉「雁の寺」)

「この作業」は先行の慈念が「百日紅の下の蔭の葉を手くらがりの中でむしり取」ることを指示している。先行文脈に「作業」という語がないが、「作業」についての具体的な内容がある。それにまとめて捉え、ラベルを貼るように言い換えているため、「ラベル貼りの言い換え」とする。

2.2.4 類義型の言い換え

「コノ」「ソノ」の後続名詞類が先行詞の意味と似ており、先行詞を類義的な表現で言い換えた場合を「類義型の言い換え」と言う。

(6) 弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと云った。それを抜いて遣って死なせたのだ、殺したのだとは云われる。しかしそのままにして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云ったのは、苦しさに耐えなかったからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかった。苦から救って遣ろうと思って命を絶った。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。(森鷗外「高瀬舟」)

「その苦」は先行の「苦しさに耐えなかった」ことの言い換えである。「苦」は「苦しさ」と意味が似ており、「類義型の言い換え」である。この場合は反復に近いと考えられる。

2.2.5 カテゴリーの転換

後続名詞類が先行文脈で表わされた内容のカテゴリーとは異なり、「カテゴリーの転換」の言い換えもある。

(7) さらに課長の個人的反撃をそらしておく必要がある。彼に対する反感を解消することだ。これには、ひとまずイタチの不正を見逃してやることだ。証拠の伝票やイタチや供給の事実の証言など、材料は豊富にこちらでにぎっているのだから、告発しようと思えばいつでもやれるわけだ。いざとなれば、まずい手だがこの刃をチラつかせるということも考えられる。苦しまぎれだが、さしあたっていまのところピラミッドの重圧を逃げるにはこの手にたよるよりしかたないのだ。

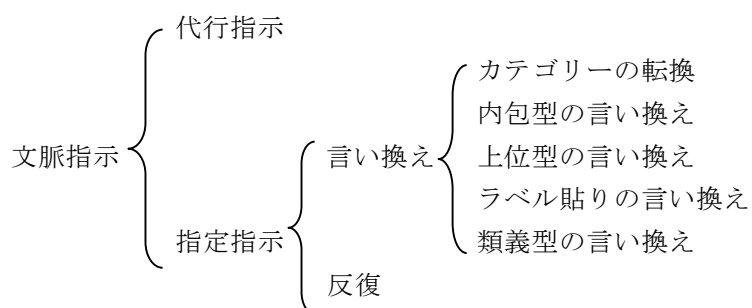
(開高健「パニック」)

「この刃」とは先行の波線のついたところの内容を指示し、告発の際の有力な武器の意味である。比喩的なものであると言っても、先行文脈では「反撃」や「告発」という事柄を示す表現であるが、いきなり「刃」という違うカテゴリーの表現を用いているため、「カテゴリーの転換」とする。

2.3 「コノ」「ソノ」の文脈指示用法の分類のまとめ

本節で示した分類の関係を図で表現すると、次の【図1】のようになる。

【図1 「コノ」「ソノ」の指示用法の分類】



【図1】において、指定指示の「コノ」「ソノ」は大きく言い換えと反復に分け、言い換えにまた五種類の下位項目を設けた。「上位型の言い換え」と「内包型の言い換え」は庵(2007)の提唱した概念と用語で、本研究では、それを受け継いで用いる。「ラベル貼り」は庵(2007)によれば、言い換えとは別の指示用法であるというが、本研究では「ラベル貼りの言い換え」と考え、言い換えの一種とする。「カテゴリーの転換」と「類義型の言い換え」は本研

究で新しく設けた分類である。これらの中で、「カテゴリーの転換」は後続名詞類のカテゴリーが先行文脈のカテゴリーとは異なるため、最も言い換えの転換度が強いものである。それに対し、「類義型の言い換え」は反復に近いと、言い換えの転換度が弱いと考えられる。

3. 「コノ」「ソノ」の指定指示用法

【図1】の分類に沿って、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』の20編の小説における地の文の指定指示「コノ」「ソノ」の用例を調べると、【表1】のような結果となる（参考として代行指示も挙げておく）。なお、調査資料は第四章第一節と同様である。

【表1 20編の小説における「コノ」「ソノ」の指定指示用法】

	指定指示								代行指示	合計
	反復	言い換え						小計		
		上位型	ラベル	内包型	類義型	カテゴリー	小計			
コノ	126 (32%)	66 (17%)	113 (29%)	22 (6%)	0 (0%)	3 (1%)	204 (53%)	330 (85%)	58 (15%)	388 (100%)
ソノ	296 (32%)	46 (5%)	123 (13%)	27 (3%)	49 (5%)	0 (0%)	245 (26%)	541 (58%)	387 (42%)	928 (100%)

【表1】に示したように、「コノ」「ソノ」はいずれも指定指示が多く、その場合、「コノ」(85%)は「ソノ」(58%)より比率が高いことが分かる。また、反復においては、「コノ」と「ソノ」の比率はいずれも32%で、差が見られない。一方、言い換えにおいては、「コノ」は204例で全体の53%を、「ソノ」は245例で全体の26%を占めている。比率から見れば、「コノ」は「ソノ」の約2倍であり、「ソノ」より言い換えるの用法が多い。つまり、庵の指摘した通り、「コノ」が言い換えにおいては用いられやすいことが確認された。ただし、庵は「ソノ」は言い換えに用いられないという指摘とは異なり、「ソノ」の言い換えるの用例も決して少なくないことが分かる。

金水・田窪(1990)は「解説のコ」を提起し、話し手があるまとまった内容を解説する際、聞き手に対して内容の把握、情報量などの点において優位に立って、「コ」を用いると述べている。情報量において優位に立っているということは、その内容をよく知っており、

心理的に対象に対して親近感を持つということである。つまり、「コ」は対象を解説的に表現する効果を持つ。そのため、言い換えのような先行文脈を解説的に指示する場合に用いられやすいと考えられる。

さらに、言い換えの下位項目を見ると、「コノ」「ソノ」はいずれも「ラベル貼り」が最も多く（「コノ」113例（29%）、「ソノ」123例（13%））、「上位型」も多い（「コノ」66例（17%）、「ソノ」46例（5%））というところに「コノ」と「ソノ」の共通点が見られる。「コノ」「ソノ」が後続名詞類と合わせて先行文脈を指示しており、一般的に後続名詞類が長くないため、総称的・概括的に言い換える場合が多い。ゆえに、「上位型」と「ラベル貼り」の言い換えが多いのである。

一方、「ソノ」は「類義型」に多く用いられる（49例、5%）のに対して、「コノ」は用いられないのは対照的である。また、「カテゴリーの転換」に「コノ」が3例見られるのに対し、総数の多い「ソノ」の例が見られないのも特徴的である。つまり、「コノ」は「ソノ」より、転換度の強い言い換えに用いられやすいと考えられる。

このように、指定指示において、反復の場合に、「コノ」と「ソノ」との使用が特に差が見られないのに対して、言い換えの場合に大きく異なっている。そのため、以下は主に言い換えの場合に重点を置いて、「コノ」と「ソノ」を考察する。

4. 後続名詞類と「コノ」「ソノ」の言い換えの用法

「コノ」「ソノ」の後続名詞類によって、指示用法が異なる可能性があることを1.で述べた。そのため、その後続の名詞類は指示用法を考察するのに非常に重要である。以下は後続名詞類と「コノ」「ソノ」の指定指示用法との関わりを解明するために、【表1】の詳細として、後続名詞類をいくつかのカテゴリーに分けて、言い換えの各分類の特徴を具体的に考察する。

ここで第一節の代行指示を考察した場合と同様に、「コノ」「ソノ」の後続名詞類を「人物」、「物体」、「人間行動」、「事態・様相」、「時間」、「場所」と「抽象的名詞」の七種類に分ける。上記の資料における用例を後続名詞類のカテゴリー別に整理すると、以下の【表2】のような結果となる（参考のために反復を入れておく）。

【表2】に示したように、言い換えの場合、「コノ」において、最も多いのは「人物」59例で、以下「事態・様相」55例、「人間行動」33例と続いている。一方、「ソノ」において、最も多いのは「事態・様相」87例で、次に多いのは「物体」64例で、三番目に多いのは「人

間行動」52例である。「コノ」と「ソノ」はいずれも、「事態・様相」「人間行動」の場合に多く見られ、「人物」「物体」の場合には、両者の相違点が見られる。また、それぞれのカテゴリーにおける「コノ」と「ソノ」の共通点として、「人物」「時間」の場合に、「上位型」が多く用いられ、「人間行動」「事態・様相」「場所」の場合に、「ラベル貼り」が多く見られる。また、「物体」の場合には、「上位型」と「ラベル貼り」がともに多く見られる。つまり、後続名詞類のカテゴリーによって言い換えの種類が異なることが分かる。

【表2 「コノ」「ソノ」の後続名詞類と指定指示用法】

	人物		物体		人間行動		事態・様相		時間		場所		抽象的名詞		合計		
	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	
反復	34	76	35	123	10	16	10	41	4	12	32	22	1	6	126	296	
言い換え	上*	38	18	11	19	2	0	2	1	4	3	9	5	0	0	66	46
	ラ*	10	1	12	16	27	34	49	67	2	1	12	3	1	0	113	123
	内*	9	2	4	9	4	6	4	9	0	2	1	0	0	0	22	27
	類*	0	2	0	20	0	12	0	10	0	4	0	1	0	0	0	49
	カ*	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
	小計	59	23	28	64	33	52	55	87	6	10	22	9	1	0	204	245
合計	93	99	63	187	43	68	65	128	10	22	54	31	2	6	330	541	

*上：上位型の言い換え ラ：ラベル貼りの言い換え 内：内包型の言い換え
類：類義型の言い換え カ：カテゴリーの転換

以下は、後続名詞類のカテゴリー別に、言い換えの場合の「コノ」「ソノ」の用法を具体的に考察する。

4.1 後続名詞類が「人物」である場合

後続名詞類が人物である場合、【表2】に示したように、「コノ」(59例)は「ソノ」(23例)の2倍強である。人物に対して、「コノ」を用い、言い換えて指示する傾向があると思われる。また、言い換えの下位分類を見ると、最も多いのが「上位型」で、「コノ」38例で「ソノ」18例である。「コノ」は「ラベル貼り」(10例)と「内包型」(9例)も多く見られる点に「ソノ」との違いも見られる。

まず、最も多く見られる「上位型」の例を挙げる。

(8) 五位は、風采の甚揚らない男であった。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が

下っている。口髭は勿論薄い。頬が、こけているから、頤が、人並はずれて、細く見える。唇は——一々、数え立てていけば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出来上っていたのである。

この男が、何時、どうして、基経に仕えるようになったのか、それは誰も知っていない。
(芥川龍之介「芋粥」)

(9) 津枝というのは母の先生の子息で今は大学を出て医者をしていた。が、嘗て堯にはその人に兄のような思慕を持っていた時代があった。(梶井基次郎「冬の日」)

(8) の「この男」は先行段落の「五位」という人物の言い換えであり、また「男」は「五位」の上位語である。(9) の「その人」は先行の「津枝」を指しており、「津枝」という名前の人を後続文脈で「その人」と言い換えて、「人」は「津枝」の上位語であり、(8) と同じく「上位型の言い換え」である。

後続名詞類について、「コノ」「ソノ」はいずれも「男」「女」「人」のような上位語で先行文脈にある人物を表す場合が多い。人物が具体的な存在であり、その上位概念の「人」「男」「女」で言い換えやすいと考えられる。そのため、「人物」の場合に、「上位型」の言い換えが多く見られるのである。

また、「コノ」は「ラベル貼り」と「内包型」の言い換えもそれぞれ 10 例、9 例見られる。次に、「ラベル貼り」の例を見てみよう。

(10) 外国兵をのせた一台のジープが夜明けの霧のなかを走ってくる。(略)

それは夏のあいだ閉ざされている分教場前の広場へとまり、五人の外国兵と一人の日本人通訳がそれから降りた。かれらは広場のポンプを動かして常に白濁している水を飲み体をぬぐった。かれらを村の大人たちや子供たちが遠まきにとりまいて見守った。

(略)

そこでかれらは、なんの気がねもなしに、この遠来の客を見まもることができるというわけだった。(略)
(大江健三郎「不意の唾」)

先行の長い内容は「外国兵」についての叙述である。後続文脈に「この遠来の客」と言い換えて、先行の叙述された「外国兵」の様子を要約的に捉えた「ラベル貼り」である。

このように、人物の場合に、「ソノ」は「上位型」のみ多く見られるのに対し、「コノ」はそれ以外、「ラベル貼り」と「内包型」の言い換えも多く見られるのである。

4.2 後続名詞類が「物体」である場合

後続名詞類が物体である場合、「コノ」と「ソノ」はいずれも「上位型」と「ラベル貼り」の例が多くあるという共通点が見られる。さらに、「ソノ」は「類義型」が20例で最も多いのに対して、「コノ」は例がないのは対照的である。

まず、「コノ」「ソノ」がともに多く見られる「上位型」の例を見てみよう。2.2.1で挙げた(3)のように、「この薬」は先行文脈の「劇薬一〇八〇剤」を指しており、「上位型」である。次の(11)は「ソノ」の例である。

- (11) 老人の坐っているところは、それが往来の目に入るにはあまりに近すぎた。それだけでなく老人の売っているブリキの独楽はもう田舎の駄菓子屋でも陳腐なものにちがいがなかった。堯は一度もその玩具が売れたのを見たことがなかった。
- (梶井基次郎「冬の日」)

「その玩具」は先行の「ブリキの独楽」を意味している。この場合、(3)の「コノ」の例と同じく、「上位型」である。

「コノ」と「ソノ」の違いについて、金水・田窪(1990)は、話し手からの心理的距離に関して中和的な「ソ」に対して、近称の「コ」が明らかに文脈指示では有標であり、何らかの強調的な効果をもたらすと指摘している。このように、「コノ」は対象物を強調的に捉えるのに対し、「ソノ」は対象物を中和的に捉えている点に両者の違いが見られると考えられる。

最も多く見られる「ソノ」の「類義型」の例を見てみよう。

- (12) 少女は含み笑いの声を立てながら、荷物をまとめはじめた。そして、ちらりと横目で油井を睨んだ。その眼は、意外に媚めかしい色で光った。
- (吉行淳之介「樹々は緑か」)

「その眼」は先行文脈にある「横目」の言い換えである。また、「眼」は「横目」と意味が近く、類義的なものである。物体以外のカテゴリーにおいても、「ソノ」の「類義型」の例が29例見られ、「ソノ」特有の用法であると考えられる。

4.3 後続名詞類が「人間行動」である場合

後続名詞類が人間行動である場合、「コノ」「ソノ」はいずれも「ラベル貼り」の言い換えが最も多く見られるのが特徴である。

「ラベル貼り」の「コノ」の例は2.2.5で挙げた(5)のように、「この作業」は先行の

作業の具体的な行動を要約的に捉え、ラベルを貼るように言い換えているのである。次に「ソノ」の例を見てみよう。

(13) それから、ふいにジープがむきをかえると村へ入って来た道をひきかえして行った。村の人間は子供もふくめて誰一人それに注意をはらわず、ごく日常的な動作をしていた。道が村を出はざれるところで、女の子供が犬の耳をなでてやっていた。外国兵のなかでいちばん澄んだ青色の眼をした男が菓子の包みを投げてやったが、女の子供も犬も身うごき一つしないでその遊びをつづけた。

(大江健三郎「不意の唾」)

「その遊び」は先行の「女の子供が犬の耳をなでてやっていた」という具体的な行動にラベルを貼るように言い換えている。このように、「コノ」「ソノ」の後続名詞である「作業」と「遊び」はいずれも短い名詞である。それは先行行動の内容を要約的に捉えるため、まとめるような「ラベル貼り」が多いのであると考えられる。

また、「ソノ」において、「類義型」も12例見られる。

(14) 山田理髪店の背の高い椅子に坐った一郎の髪の毛をつまみ上げて、山田は、
「いよいよ丸坊主にするのか、ちょっと情ない心持だろ」
と言い、鏡の中の一郎の顔を見てニヤリと笑った。
「平気さ」
一郎は笑い返したが、その笑いが幾分こわばった。

(吉行淳之介「樹々は緑か」)

「その笑い」は「一郎」の「笑い返した」という動作を意味している。「笑い」は「笑い返した」とは、表現としては似ており重ねるところがあり、「類義型」である。

後続名詞類として、「作業」「遊び」「格闘」など行動を表す語、「悩み」「感じ」「衝動」など心情を表す語が見られ、先行行動をまとめて言い換える「ラベル貼り」が多い。

4.4 後続名詞類が「事態・様相」である場合

後続名詞類が事態・様相である場合、「コノ」「ソノ」はいずれも「ラベル貼り」の例が多く見られる。

(15) 里子はよびかけた。
「和尚さんが呼んではる」
「は」

慈念は小さく返事すると立ち上った。

「あんた、だまって学校休んどるそうやないの。先生が叱りに来やほったえ」

里子はしかしこの言葉をなるべくやわらかくいったのである。

(水上勉「雁の寺」)

- (16) 彼は小江が恐ろしい人のような気がして弱った。こんな事ではならぬと思っ
頭を殊更に今自分がなし遂げつつある侍としての使命に向けて見たが、然しこの
場合たしかに美しい小江は強者で醜い自分は比較にならぬ弱者だと思わずには
いられなかった。性の異う関係で美醜が直ぐ様強弱になる場合があるものだが蠣
太には殊にその感が深かった。彼はその圧迫に堪えられない気がした。彼は落ち
つきなく廊下から人のいない側の部屋に入ったり、又出たりしていた。

(志賀直哉「赤西蠣太」)

(15) の「この言葉」も (16) の「その圧迫」も、先行の波線部の里子の発言を、または先行の波線部の長い事態をまとめて承けており、いずれも「ラベル貼り」である。この2例のように、一般的に事態・様相の場合は先行内容の叙述が長い。その長い内容を「コノ」「ソノ」と短い後続名詞類と一緒に承けるため、まとめるような言い換え、すなわち「ラベル貼り」が多いと考えられる。

後続名詞類として、「コノ」「ソノ」はいずれも「こと」「言葉」「話」「様子」「事件」など長い内容をまとめるような形式名詞やそれに準じる抽象的な語が多く見られる。事態・様相の場合は人間行動の場合と似ており、先行の内容をまとめて要約的に捉えるため、「ラベル貼り」が多いのである。

4.5 後続名詞類が「時間」である場合

後続名詞類が時間である場合、「コノ」「ソノ」はいずれも大部分は代行指示である。第四章第一節ですでに述べたように、語り手が事件の進行を語り、ある動作または事柄が起こり、すぐ次に、「その時」か「この時」が出ており、次へと文脈が展開していくのである。そのため、指定指示の例が少ない。

【表 2】に示したように、少ない言い換えの例の中に、「コノ」「ソノ」はいずれも「上位型」が多く見られる。

- (17) 慈念の通学している紫野大徳寺にある中学から、蓮沼良典という教師が孤峯庵をたずねてきたのは七月十二日のことだった。この日、折悪しく慈海は風邪をひ

いて寝ていた。 (水上勉「雁の寺」)

(18) 私は、志乃の一と月を綿密に調べて、一夜をえらんだ。

それは、いわば、私と志乃との初夜であった。私たちが、夫婦として、はっきりと生殖の意志をもち、自然のままに迎える初めての夜である。私たちは、心を抑えて、その初夜を待った。

そして、その夜がきた。 (三浦哲郎「初夜」)

(17) の「この日」は先行の「七月十二日」の言い換えであり、「日」は先行詞の上位語である。(18) の「その夜」は先行の「初夜」という具体的な時刻を意味している。「夜」は「初夜」の上位語である。

後続名詞類を見ると、代行指示の場合は「時(とき)」「この時」「その時」が多いのと異なり、(17) と (18) のように、「日」「夜」のような時間の単位を表す語が見られ、先行詞を言い換えて指示している。

4.6 後続名詞類が「場所」である場合

後続名詞類が場所である場合、時間の場合と似ており、代行指示が多い。代行指示が多い原因は時間の場合と同じく、ある場所である動作と事柄が起こって、そのすぐ次に「その傍」、「その辺り」のような表現をとっているためであると考えられる。

一方、言い換えにおいて、【表 2】に示したように、場所の場合は人物の場合と似ており、「コノ」は「ソノ」より多く見られ、これはほかのカテゴリーとは異なる点である。また、「コノ」「ソノ」はいずれも「上位型」と「ラベル貼り」の例がほとんどである。

まず、「コノ」と「ソノ」の「上位型」の例を挙げる。

(19) 奴頭は二人の子供を新参小屋に連れて往って、安寿には桶と杓、厨子王には籠と鎌を渡した。どちらにも午餉を入れる櫛子が添えてある。新参小屋は外の奴婢の居所とは別になっているのである。

奴頭が出て行く頃には、もうあたりが暗くなった。この屋には燈火もない。

(森鷗外「山椒大夫」)

(20) 彼は放送局の録音室を思いださずにはいられなかった。その部屋の静寂は異様である。壁とガラスとカーペットによってそこには完全な静寂が保たれている。放送局以外には地上のどこにも存在しない状態である。(開高健「パニック」)

(19) の「この屋」は先行「新参小屋」の言い換えである。「屋」は「新参小屋」の上位

語である。(20)の「その部屋」は先行の「放送局の録音室」を意味し、「部屋」は「録音室」の上位語である。このように、「コノ」「ソノ」は先行の場所の上位語と合わせて、先行の具体的な場所を指示することができる。

次に、「コノ」の「ラベル貼り」の例も多い。

(21) ことに猛火に焼かれた土地の、その跡にはえ出た市場の中にまぎれこむと、前世紀から生き残りの、例の君子国の民というつらつきは一人も見あたらず、たれもひょっくりこの土地に芽をふいてとたん一人前に成り上ったいきおいで、新規発明の人間世界は今日ただいま当地の名産と観ぜられた。このへんをうろうろするやからはみなモラル上の瘋癲、生活上の兇従と見えて、すでに昨日がなくまた明日もない。(略)

少年はどこから来てどこへ行こうとするのか。たれも知らない。この新開地では、種族を判別しがたい人間どもがどこからともなくわらわらとあつまって来て、どこへ行くともなく右往左往している中に、ひとり權威をもって行くべき道をこころえたような少年の足どりの軽さはすでに十分ひとをおどろかすに堪えた。

(石川淳「焼跡のイエス」)

先行の長い内容は新開地という場所の具体的な叙述であり、後続文脈で「この新開地」でまとめて捉え、「ラベル貼り」である。(19)(20)のように、先行の場所を総称的に捉える「上位型」の場合と似ており、先行の場所についての長い叙述を、後続文脈で概括的・要約的に捉えているのである。

このように、長く具体的に叙述された場所を、後続文脈で「上位型」と「ラベル貼り」に用いられやすいのである。

4.7 後続名詞類が「抽象的名詞」である場合

抽象的名詞は、「コノ」「ソノ」と結合して、接続語に近い働きをするのである。たとえば、「そのおかげで」「この場合」「そのため」など前後の接続関係を示している。これらは具体的な事物や様相とは異なる。この場合は、「コノ」と「ソノ」はいずれも代行指示の用例がほとんどである。指定指示の例があるとしても、「ソノ」の言い換えの例が見られず、「コノ」は「ラベル貼り」の1例のみである。

(22) (略) その頃、摂政藤原基経に仕えている侍の中に、某と云う五位があった。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちゃんと姓名を明にしたいのであるが、生

憎旧記には、それが伝わっていない。恐らくは、実際、伝わる資格がない程、平凡な男だったのであろう。一体旧記の著者などと云う者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかったらしい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがう。王朝時代の小説家は、存外、閑人でない。(芥川龍之介「芋粥」)

「この点」の「点」は具体的な概念ではなく、抽象的な名詞である。「この点」は先行の「これも、～余り興味を持たなかったらしい」という点を意味し、先行の長い内容をまとめ、ラベルを貼るように言い換えている。(22)のように「コノ」が抽象的名詞と合わせて先行文脈を言い換えて表現する例がこの1例のみで、まれである。

5. まとめ

本節では、小説の地の文における「コノ」「ソノ」の指定指示とその下位項目の分類を規定し、これらの指示用法と「コノ」「ソノ」の後続名詞類のカテゴリーとの関わりを考察した。その結果をまとめると、以下のようになる。

- 1) 指定指示において、反復には、「コノ」と「ソノ」はいずれも用いられるのに対し、言い換えには、「ソノ」より「コノ」が用いられやすいことを確認した。
- 2) 言い換えの下位項目から見れば、「コノ」「ソノ」はともに先行文脈をまとめるような「ラベル貼り」に用いられやすいという共通点が見られる。一方、反復に近い「類義型の言い換え」の場合に「ソノ」のみが用いられ、「ソノ」は「カテゴリーの転換」のような転換度の強い言い換えに用いられにくいと考えられる。
- 3) 言い換えにおいて、「人物」「物体」の場合に「コノ」「ソノ」はともに「上位型の言い換え」に用いられやすく、「物体」「人間行動」「事態・様相」の場合に「ラベル貼り」に用いられやすいと考えられる。「時間」「場所」「抽象的名詞」の場合に、特に「抽象的名詞」の場合に、言い換えに用いられにくいのである。このように、カテゴリーの性質によって言い換える種類が異なるのである。

以上のように、庵(2007)の研究で指摘した通り、「コノ」が先行詞の言い換えに用いられやすいことが確認された。本節では、加えて、「ソノ」も言い換えに用いられることを明らかにした。「コノ」「ソノ」の指示用法の分類、またそれらと後続名詞類との関わりも明らかになった。「コノ」と「ソノ」がカテゴリーにおいて使用傾向が異なることが見られたが、今後の課題として、その原因を究明したいと思う。

第五章 指示副詞「コウ」「ソウ」の後続内容の特徴

第一節 「コウ」「ソウ」の後続内容

—「コウ」「ソウ」が「発話動詞・思考動詞 + た。」に係る場合—

1. はじめに

指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」については文法的・文章論的な研究が多く見られるが、指示副詞「コウ」「ソウ」の考察は少ない。

指示副詞「コウ」「ソウ」は係る動詞の性質によって用法が異なる。行動・作用の様態を表したり、行動や作用の結果の状態を表したり、発話・思考の内容を表したりすることができる。本章では、小説の地の文に多く見られる発話動詞・思考動詞（以下、「発話・思考動詞」と略す）に係る場合の「コウ」「ソウ」を対象として考察する（注1）。

先行する「コウ」「ソウ」の文章論的研究として、佐久間（2002）と馬場（2006）の考察が挙げられる。佐久間（2002）は文章・談話の文脈展開における統括機能という観点から「コ系の文脈指示詞」が「広域の機能領域を強調して指し示し、大きな統括力を有する」のに対し、「ソ系の文脈指示詞にも、ある程度は段の統括機能があり、統括力は相対的に弱い」と述べ、「コ」と「ソ」の統括力の違いを指摘している。また、馬場（2006）は指示語系接続表現「こうして」と「そうして」の置き換え可能性を検討しながら、両者の用法の重なりとずれを考察している。先行文の内容と後続文の内容が継起的である場合、両者の用法の重なりが認められるが、「こうして」の場合は結果性の意味が前面に出、「そうして」の場合は継起性の意味が前面に出るという違いがあるとしている。馬場の考察によって、「こうして」と「そうして」がおのおの結果性と継起性に偏り、接続表現としての用法に違いのあることが解明された。

本章では、発話・思考に関わる表現が後続する場合の「コウ」「ソウ」を対象として考察する。両者に続く発話・思考に関わる表現の形式、そしてそれらと後続内容との文脈上の関わりを分析することを通して、両者の文脈展開における機能の相違点を指摘することを目的とする。

2. 「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞の表現形式

「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞の語尾や結び付く語句の表現にはさまざまな形式が見られる。【表 1】は日本の近現代小説に含まれる「コウ」「ソウ」の後続発話・思考動詞(注 2)の表現形式を終止用法と非終止用法の諸形式に分類して示したものである。なお、本章では、CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』に収録された小説(注 3)を資料とした。

【表 1 「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞の形式】

	終 止 用 法						非 終 止 用 法														合 計	
	た。 。	て いた。 。	基 本 形。 。	の だ。 。	そ の 他	小 計	て	て か ら	と	な が ら	連 用 形	連 体 形	が	ば	だ け で	ま ま	て も	き り	の は	そ の 他		小 計
コ ウ	64	0	0	5	4	73	51	0	6	1	1	20	0	3	0	0	3	0	0	2	87	160
ソ ウ	102	6	9	14	28	159	214	23	113	42	9	71	27	18	8	7	11	4	16	42	605	764

【表 1】に見られるように、「コウ」160 例中に、終止用法 73 例、非終止用法 87 例であり、数量的にはあまり差が見られない。それに対して、「ソウ」764 例中、非終止用法 605 例、終止用法 159 例と、非終止用法が終止用法の 4 倍近くにのぼる。ここから、「ソウ」は非終止用法に多く用いられ、文や文脈を続ける働きが強いと考えられる。また、「コウ」に後続する発話・思考動詞の出現形式において、最も多いのは終止用法の「た。」(64 例)であるのに対し、「ソウ」において、最も多いのは非終止用法の「て」(214 例)である。このように、「コウ」と「ソウ」に後続する発話・思考動詞の形式では、おのおの「た。」「て」へ偏る傾向が見られる。また、「コウ」において「て」も 51 例で、「ソウ」において「た。」も 102 例であり、つまり、「コウ」「ソウ」はともに「た。」と「て」の形式が多く見られる。「た。」と「て」それぞれの形式で、文脈展開及び場面の転換性において「コウ」と「ソウ」はどのように異なるのか、本節及び第二節において検討していく。

3. 問題の所在

本節では、後続の発話・思考動詞が「た。」で文を終止する場合の「コウ」「ソウ」を対象として考察する。その後続内容との文脈上の関わりを分析することを通して、両者の文脈展開における機能の相違点を指摘することを目的とする。たとえば、次のような例が見られる。

○ 「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定っていう位だから」

奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしく こう云った。 (夏目漱石「こころ」)

○ 三原は何気なしに そう言った。 そう言ってしまって、三原自身が、電気にでもかかったように、はっとした。 (松本清張「点と線」)

「いった。」に係る場合、「こう云った。」と「そう言った。」は両者とも前方照応で、一見同じように見えるが、発話・思考動詞とその後続内容との関わりを考察すると、「こう云った。」の後続内容は当小説の第三十五節で、別の話題に入り、先行の場面と完全に変わるが、「そう言った。」の後続内容は発話行動の主体が行った行動であり、前後の行動は継起的に行われているのである。

このように、「コウ」と「ソウ」に係る発話・思考動詞が「た。」で文を終止するとき（以下、「た。」と略す）、その直後の内容は先行文と行動が継起して緊密な場合もあれば、話題が転換する場合もある。「コウ」「ソウ」に係る「発話・思考動詞 + た。」の後続の内容を検討することによって、「コウ」と「ソウ」の文章展開上の機能の違いを見出すことができると考える。

そこで、本節では、「コウ」「ソウ」が「発話・思考動詞+た。」に係る場合を取り上げ、後続文との内容上の関わりから、「コウ」と「ソウ」の違いを考察する。

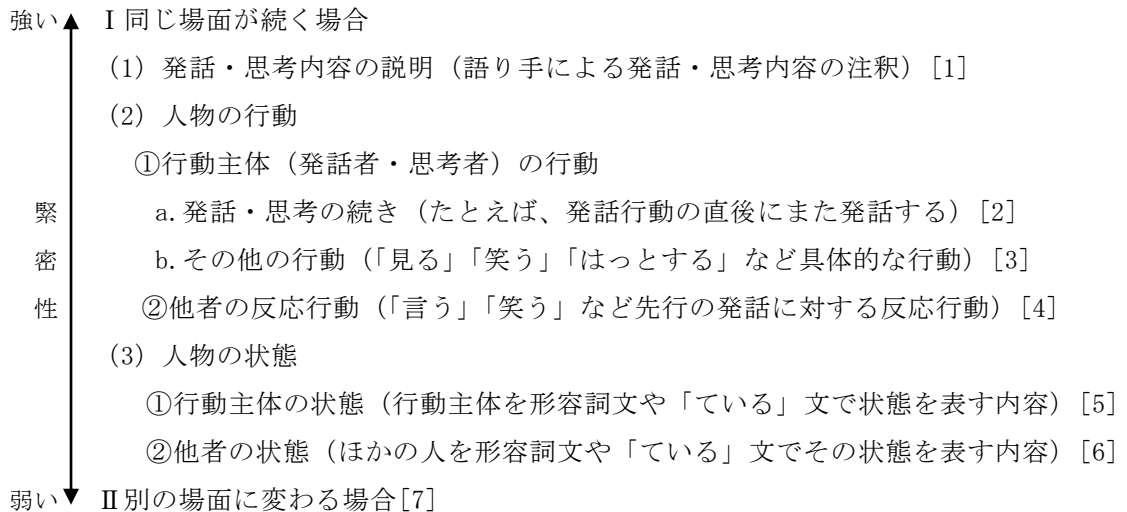
4. 「コウ」「ソウ」+「発話・思考動詞 + た。」の後続内容

本節では、発話・思考動詞「た。」の直後の一文の内容と先行の発話・思考との関わりを考へて、「Ⅰ場面が続く場合」と「Ⅱ場面が変わる場合」とに二分する。「Ⅱ場面が変わる場合」は、文脈上の大きな切れ目であり、場所の転換、登場人物の入れ替わり、長い時間の経過などである。本節では、これらを文脈上の切れ目の基準とし、後続文と先行の発話・思考との関わりの強さから考へて、【図 1】 [1]～[7]のように 7 種に細分する。

【図 1】において、Ⅰ (2)の①a、b、と②の三種類は発話・思考に継起する行動を表す内容が続く。(3)は発話・思考が行われた時点における人物の状態の描写であり、行動主体も他者も同一場面に存在する。Ⅱは、時間・空間・人物などが変わる、いわゆる場面転換が見られる場合である。これらの分類の中、Ⅰの(2)は行動の継起の代表的な場合であり、Ⅱは文脈の切れ目の代表例である。Ⅰの(1)と(3)は行動の継起でないため、時間的な展開が見られない場合である。(1)は発話・思考内容についての説明であるため、先行の発話・思考と内容上においては切れない緊密な関係である。(3)は発話・思考が行動として終わっ

ており、人物の状態についての描写へ移行する場合で、行動の描写から状態の描写へ移るため叙述の質の違いがあり、その意味で、叙述の切れ目が生じる場合である。また、IIは切れ目の典型である。

【図1 後続一文と発話・思考動詞「た。」との内容上の緊密性】



このように、後続文が発話・思考（行動と内容を含めて）との関係が緊密であるかどうか、また、後続内容は行動の継起性を持っているかどうかという二つの観点から、以下の分析を行う。

上記の観点と分類をもとに、発話・思考動詞「た。」の後続内容として、直後の一文を調べた結果が【表2】である。

発話・思考動詞「た。」の直後の文脈内容が「発話・思考内容の説明」「発話・思考の続き」「その他の行動」「他者の反応行動」である時、「ソウ」が多く見られる。一方、「他者の反応行動」「人物の状態」「別の場面」である時、「コウ」が比較的多く見られる。要するに、「他者の反応行動」の時に両者とも多く用いられる以外に、「ソウ」の場合は、先行の発話・思考についての説明や発話・思考に続く継起的な行動が後続しやすい。それに対して、「コウ」の場合は、後続内容は状態や別の場面が多く、継起的な行動が少なく、場面転換など大きな切れ目もできるという傾向が見られる。後方照応の場合は「コウ」のみが用いられ、前方照応の場合とは機能的に異なっていると見られるので、4.7 および 5 で検討する。

【表 2 後続一文と発話・思考動詞「た。」との内容上の関わり】

	前方照応							後方照応	合計	
	I 同じ場面					II 別の場面	小計			
	(1) 発話・思考内容の 説明	(2)人物の行動		(3)人物の状態						
		①行動主体		②他者の行動 の反応	①行動主体					②他者
a 発話・思考の 続き		b その他の 行動								
コウ	0	0	2	7	4	3	6	22	42	64
ソウ	18	17	14	47	0	1	5	102	0	102

以下、発話・思考動詞「た。」の後続の文脈内容を種類別に考察し、「コウ」と「ソウ」との文脈展開における具体的な異なりについて検討する。

4.1 「発話・思考内容の説明」の場合

発話・思考動詞「た。」の後続内容が「発話・思考内容の説明」である場合は、いずれも「ソウ」(18例)が用いられ、「コウ」が見られない。

- (1) 祖母のトセは、信夫が台所にみだりにはいることを、きびしく禁じていた。

(略)

「男子には男子の分があり、女子には女子の分があるのですよ。男子はお上に忠義をつくし、家の誉れをあげることだけを考えていけばよいのです」

台所に顔を出すと、トセは必ずそういった。もつとも、トセのお上は天皇になったり、徳川様になったり、定かではなかったが。 (三浦綾子「塩狩峠」)

「そういった。」の後続文「もつとも～なかったが。」は、トセの発話中の「お上」についての語り手による説明である。このように先行文についての補足・説明が行われる場合の後続文は、先行文との間に緊密な関連を持っている。こうした場合に、「ソウ」が用いられることが多い。

4.2 「行動主体の発話・思考の続き」の場合

発話・思考動詞「た。」の直後に、また同じ行動主体の発話・思考行動が続く場合である。

発話・思考の連続ともいえる。この場合も「ソウ」(17例)だけが用いられ、「コウ」の例が見られない。

(2)「おや、君は本気で惚れているのか。君の心臓はまだこの場所に在ったのか」と、油井は指をのばして、伊木の左胸の上を突いた。

「いや、自分でも驚いているんだ。三十になった男の心持ではないよ」

伊木は、まるで非難を受けたかのように、弁解する口調でそう言った。そして、その自分の口調に気付いて、ややいまいましように、

「しかし、心臓が無くなってしまふよりいいじゃないか」

(吉行淳之介「樹々は緑か」)

行動主体である伊木は「そう言った。」の直後に、また「しかし、心臓が無くなってしまふよりいいじゃないか」と発話する。先行の「そう言った。」という発話の続きとして、緊密な発話行動の連続である。

また、次のような思考行動が続く例もある。

(3) 慈海は、里子のいう意味がわかると、お、そうか、そうかと口走って、裾をかきあわした。このときも慈念の表情はひっこんだ白眼の部分瞬間だけ動かしたにすぎない。

〈強情な子やなァ〉里子は和尚のほどけた帯をうしろから締め直しながらそう思った。

〈けったいな子やなァ、何おもてはんのやろ、さっぱりわからん！〉

(水上勉「雁の寺」)

行動主体である里子は〈強情な子やなァ〉と「そう思った。」の直後に、〈けったいな子～さっぱりわからん！〉という思考が続く。この場合は緊密な思考行動の連続である。このように、「た。」の直後が発話・思考の続きである場合は、前後の行動が継起的に行われる場合であり、「ソウ」が用いられやすいのである。

4.3 「行動主体のその他の行動」の場合

発話・思考動詞「た。」の直後の文に同じ行動主体の「見る」「笑う」「はっとする」など行動を伴う表現が見られる場合である。この場合、「ソウ」が14例見られるのに対して、「コウ」は2例のみである。

(4)「東京駅も、さぞホームが汽車で混雑していることでしょうね」

目前の光景から、鳥飼は、まだ見ない東京駅を空想して言った。

「え。そりゃ、たいへんです。ホームは列車の発着が、ひっきりなしですよ」

三原は何気なしにそう言った。そう言ってしまって、三原自身が、電気にでもかかったように、はっとした。彼は、ある重大な事実思いあたってたのである。

(松本清張「点と線」)

「そう言った。」の後続文で「はっとした」という心情描写が行われ、三原の言語行動と心情行動との継起性が示されている。この点で「ソウ」の前後の内容は緊密に関連しているといえる。

「コウ」の場合は2例のみ見られる。

(5) 父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれば誰、これは誰と一々説明して遣ると、父はその度に首肯いた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「どうも色々御世話になります」

父はこういった。そうして又昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。

(夏目漱石「こころ」)

「父はこういった。」の後続内容は「そうして又昏睡状態に陥った」で、「いった」と「昏睡状態に陥」るのは同じ主体が行った行動であるが、二つの行動の間に時間の経過を読み取ることができる。もう1例も「こころ」にあり、「父は口ではこう云った。こういったばかりでなく、今まで敷いていた床を上げさせて、何時ものような元気を示した。」で、「云」う行動から「床を上げさせ」るまで時間の経過があり、短時間の継起的行動ではない。このように、「こういった。」の直後には同じ主体の連続的な行動が出現しにくい。

以上見たように、発話・思考の直後に、同じ主体の次の行動が行われる場合、前後の行動は継起的な行動の連続であり、「ソウ」が用いられやすいのである。

4.4 「他者の反応行動」の場合

発話・思考動詞「た。」の後続内容が「他者の反応行動」である場合は、「コウ」は7例、「ソウ」は47例であった。両者とも多く見られる。次の「ソウ」の例を見てみよう。

(6) 「済まないことね、学生さんに働かしちゃあ」

とお千さんは、伊達巻一つの艶な蹴出で、お召の重衣の裾をぞろりと引いて、黒天鵝絨の座蒲団を持って、火鉢の前を遁げながらそう言った。

「何、目下は私たちの小僧です」

と、甘谷と言う横肥り、でぶでぶと脊の低い、ばらりと髪を長くした、太鼓腹に角帯を巻いて、前掛の真田をちょきんと結んだ、これも医学の落第生。追って大実業家たらむとする準備中のが、笑いながら言ったのである。(泉鏡花「売色鴨南蛮」)

お千さんは「そう言った。」の直後に、甘谷が「何、目下は私たちの小僧です」と発話した。お千さんの発話に対する反応行動として甘谷が発話し、同じ場面にいる人物の継起的な行動である。

このように、主体が発話・思考行動を行った直後に、相手など同じ場にいる人がその行動に対する反応行動として、何らかの行動を行う。つまり、発話・思考によって、相手の反応が呼び起こされ、一連の発話行動などが起こるといふ形の継起的な行動であると考えられる。

一方、「コウ」の場合は、どのように用いられているのであろうか。

(7)「あのひと、まだここにいるの？」

鮎太は加島もまた、今朝あの馬車で帰ったものとばかり思っていたので、こう訊いた。

「勿論、いるわよ。わたしがいるんだもの」

そう言った冴子の眼は、いつになく熱っぽくきらきらしていた。

(井上靖「あすなる物語」)

鮎太が「こう訊いた。」の直後に冴子の発話がある。鮎太の質問に対する回答で、問いかける時の反応行動である。これは、「ソウ」が用いられる場合とどのように違うのであろうか。「～ので、こう訊いた。」は説明的な口調であり、鮎太のこの発話を取り立てて表現されている。(6)のように単なる描写と違い、説明的な表現で、先行の発話主体の発話が強調され、まとまりをつけている。このまとまりをつける表現の効果として切れ目が生じると考えられる。この点は後に5. で詳述する。

このように、「ソウ」が用いられる場合は、短時間の行動の継起と理解されるのに対して、「コウ」が用いられる場合は、継起的である点は「ソウ」と同じであるが、先行の行動主体の発話・思考にまとまりをつける点に違いが見られると考えられる。

4.5 「人物の状態」の場合 (行動主体と他者)

発話・思考動詞「た。」の直後に、行動ではなく、形容詞文や「ている」文で「行動主体

の状態」と「他者の状態」を叙述する場合が見られる。ここでは両者を「人物の状態」の場合として分析する。「コウ」は総計7例であるが、「ソウ」は1例のみ見られる。

「コウ」の場合に、行動主体の状態が4例、他者の状態が3例見られる。

(8)「何とも、忝うござった。もう、十分頂戴致したて。——いやはや、何とも忝うござった」

五位は、しどろもどろになって、こう云った。余程弱ったと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思われない程、汗が玉になって、垂れている。

(芥川龍之介「芋粥」)

(9)「おれの様な人間だって、月給こそ貰っちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」

父はこうも云った。私はそれでもまだ黙っていた。

「御前のいう様な偉い方なら、きっと何か口を探して下さるよ。頼んで御覧なのかい」と母が聞いた。

「いいえ」と私は答えた。

(夏目漱石「こころ」)

(8)は発話の直後に、その行動主体の状態、つまり「余程弱ったと見えて、～垂れている」という内容が来る。(9)は発話の直後に、発話者の相手である「私」の「それでもまだ黙っていた」という状態を表す内容が続く。このように、(8)と(9)は後続文に行動ではなく、発話者の状態、または同じ場にいる他者の状態が描写されている。先行の発話と同じ場面ではあるが、継起的な行動ではなく、人物の状態の描写が続く。

「ソウ」の1例は「塩狩峠」にある「菊はそう言った。信夫は何となく釈然としなかった。」という例である。「ソウ」が用いられ、直後に他者である信夫の心理状態についての内容が続く。

この場合は、継起的な行動ではなく、場面を停止し、人物の状態について描写する部分において、「コウ」が多用されていることが分かる。

4.6 「別の場面」の場合

発話・思考動詞「た。」の後続内容が「別の場面」である場合、「コウ」は6例あるのに対し、「ソウ」は5例見られる。それぞれの「た。」の総数から見れば、「コウ」のほうがより高い比率を占めている。

まず、「コウ」の例を見てみよう。

(10) ——無理に短うしたで、病が起ったのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。

翌朝、内供が何時ものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が、一晚の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明い。(略) (芥川龍之介「鼻」)

内供は「こう呟いた。」の直後は、改段され、翌朝の新たな場面に移行している。文脈上、大きな切れ目が生じている。「コウ」を使用することで、「呟いた。」は場面を取り立てる強調的な表現となり、この発話の部分が一つのまとまりになる。この場合、「コウ」を含む部分は、それまでの文脈を統括し、一つの場面的まとまりを形成する効果を果していると思われる。

次のように、「ソウ」の使用に場面転換が見られるものもある。

(11) この言葉ははげしく私を刺し、いたたまれぬ気持ちにさせた。(略)

「二組別々にどこかへ身を隠そうよ。二時間たったら又ここの東屋へかえって来よう」

柏木が、まだ飽きもせずブランコに乗っている男女を見下ろしながら、そう言った。

柏木や令嬢と別れた私は、下宿の娘と共に、東屋の丘から北へ降り、また東のほうへ迂回してゆく緩い坂を登った。(三島由紀夫「金閣寺」)

柏木が「そう言った。」の直後には一行の空白があり、場面の転換が見られる。その次の一文に「私」が「東屋の丘から～坂を登った。」は、先行の柏木の発話場面から転換し、別の場所へ移動したという内容である。しかし、先行の発話を特に強調せず、中立的に叙述しているのである。また、次の場面の初めの、「柏木や令嬢と別れた私」には、先行文をふまえて時間経過が感じられる。その他の4例のうち、2例は別の章に入り、他の2例は翌朝のことや宴会の場が終わってからのことが叙述されている。いずれも時間が経過した上で別の場面が変わる場合である。用例は略すが、これらの例の「そういった。」も特に内容を強調せず、後続の内容に続けている場合である。

このように、「別の場面」の場合、「コウ」が「ソウ」より多用され、文脈の大きな切れ目が生じやすい。これに対して、「ソウ」が用いられるのは、場面が変わるとしても、中立的に内容が叙述されており、先行の発話・思考が特に強調されず、淡々と後続内容が続く場合である。

4.7 後方照応の場合

後方照応は「コウ」にのみ見られる。発話・思考動詞の 95%は「いう」である。「こういった。」の直後の内容はその発話内容であり、「こういった。」は直後の発話内容を統括している。前方照応の場合は、その発話内容は先行文脈にあり、「こういった。」「そういった。」という行動は常にその発話内容と一体のものとして解されるため、後方照応の場合も、後方に示される発話内容と一体のものとして解されるべきである。そこで、発話内容の直後の一文の内容を分析する必要がある。その内容を整理すると、【表 3】のようになる。

【表 3 発話・思考内容の後続一文の内容と先行内容との関わり】

I 同じ場面					別 の 場 面	合 計
発 話 ・ 思 考 内 容 の 説 明	行 動 主 体		他 者			
	発 話 ・ 思 考 の 続 き	そ の 他 の 行 動	反 応 行 動	状 態		
0	0	2	23	12	5	42

【表 3】に見られるように、多いのは「他者の反応行動」と「他者の状態」の場合で、「別の場面」も 5 例ある。行動主体の「その他の行動」も 2 例見られるが、「発話・思考内容の説明」と行動主体の「発話・思考の続き」の例は見られない。つまり、後続内容は「他者の反応行動・状態」と「別の場面」が来やすく、行動主体の発話・思考行動と発話・思考内容が一応終わって、一つの部分としてまとまりが付けられている傾向が分かる。(5) で見たように、「コウ」で発話・思考内容を統括し、内容にまとまりを付け、相対的な完結性を保っているのである。

次の「別の場面」と「他者の反応行動」の場合の例を見てみよう。

(12) ややあって、秋山小兵衛がこういった。

「御苦労だったな、ほんとうにありがとうよ。あとはおれがすることだ。お前に礼をするのも水臭いことだし……いずれ折を見て、お返しをさせてもらおう。おかみさんと坊やに、よろしくいっておくれ」 (池波正太郎「女武芸者」)

(13) 和自の男は、こう言った。

「私は二両連結の前部に乗っていましたがね、鼠色の防寒コートの女の人は二人いましたよ。一人は四十歳ぐらいの人、一人は二十六七歳でした。でも、その両側は会社帰りらしい女の子でした。濃紺のオーバーの男というのはいなかったように思います」

重太郎は、ポケットからお時の写真を出して見せた。(松本清張「点と線」)

(12)の後続内容は当小説の第六節になり、完全に別の場面に入る。(13)の和白の男の「言った」内容の直後に、重太郎は「ポケットからお時の写真を出して見せた」という内容が続き、発話内容の直後は他者の反応行動である。同じ場面で行われた行動であるが、後続の行動は先行の発話の主体ではなく、他者の反応行動である。

以上の「別の場面」と「他者の反応行動・状態」以外、発話主体の「その他の行動」も2例見られる。

(14)隣で汲んでいる女子が、手早く杓を拾って戻した。そしてこう云った。「汐はそれでは汲まれません。どれ汲みようを教えて上げよう。右手の杓でこう汲んで、左手の桶でこう受ける」とうとう一荷汲んでくれた。(森鷗外「山椒大夫」)

「こう云った」行動と後続の「汲」む行動は同じ主体が行ったのである。後続文の「とうとう一荷汲んでくれた」との間には、「一荷」汲むための時間が必要である。ここでもやはり時間の経過が読み取れる。もう1例は「金閣寺」にある。発話内容に「歌でもうたいましょう」という表現があり、直後に行動主体が「うたいはじめた」という内容が続く。この1例は例外的なものと考えられる。

このように、後方照応の場合、「コウ」で直後の発話・思考内容を統括し、内容にまとまりを付け、一種の完結性を保っているのである。その結果として、後続内容との間に切れ目が生じることになる。

5. 「コウ」のまとめる機能と「ソウ」の継続させる機能

前節の分析によって、「発話・思考内容の説明」「発話・思考の続き」「その他の行動」が後続する場合は前後の内容が緊密に関わっており、「ソウ」が用いられやすいことが分かった。特に、「発話・思考の続き」「その他の行動」「他者の反応行動」は行動の継起を表しており、「ソウ」が多用されている。要するに、発話・思考内容についての説明で先行内容が一区切りとして終わらず、完結性を持っていない場合、または行動の継起が表されている場合、「ソウ」が多く用いられる傾向がある。

一方、「人物の状態」「別の場面」が後続する場合、「ソウ」よりも、「コウ」が多用されている。また、「コウ」において、後方照応の場合においても、前方照応との共通性が見られ、いずれも後続内容が「他者の反応行動・状態」と「別の場面」に偏っている。このような傾向の違いは、「コウ」が単に区切りの位置に用いられやすいというだけではなく、「コウ」のまとまりをつける効果によって区切りの効果が発生していると考えられるべきではなかろうか。

金水・田窪（1990）が「解説のコ」について、「中和的なソに対し、近称のコは明らかに文脈指示において有標であり、なんらかの強調的な効果をもたらす」と指摘したように、「コ」は（7）（12）のような解説的な文脈において、強調的な効果を持つため、文中において、マーカーが付けられたような表現となる。そこで、「コ」の部分が前後の文脈から浮彫のようにとりたてて表現され、一つのまとまりとして捉えられることになる。その結果、後続内容とのつながりが緩くなり、切れ目が読み取れることにもなる。一方、中立的な「ソ」は無標であるため、そこに特に焦点が当てられず、淡々と前後の内容をつなぐため、後続内容との間に切れ目が生じにくいのである。

「他者の反応行動」が後続する場合、「コウ」と「ソウ」が両方とも多く見られる。「ソウ」が用いられる時は、（6）のように前後は短時間の行動の継起と解されるが、「コウ」が用いられる時は、（7）と後方照応の（13）のように行動主体の発話・思考にまとまりをつけ、その結果として、心理的効果として小さな切れ目が生じると推測されるのである。

この結果、「コウ」と「ソウ」の性質の違いが原因で、「コウ」はまとめる機能を発揮する場合が多いのに対し、「ソウ」はその力が弱く、単に文脈を続ける場合が多いと考えられる。

6. まとめ

本節では、小説の地の文における指示副詞「コウ」「ソウ」に発話・思考動詞「た。」に係る場合、その直後の一文の内容との関係について考察した。

「コウ」は「他者の反応行動」「人物の状態」「別の場面」が後続しやすく、文脈において切れ目が生じる場合に用いられることが多い。つまり、場面の停止、登場人物の交替、時間上の大きな経過と場所の転換など文脈上に切れ目が見られる。一方、「ソウ」は「他者の反応行動」「発話・思考内容の説明」「発話・思考の続き」「その他の行動」が後続しやすく、行動の継起・連続、または補足的な説明が続きやすい傾向がある。「他者の反応行動」

の場合、「コウ」と「ソウ」の用法の重なりが見られるが、「コウ」は行動主体の発話・思考にまとまりをつける点に違いが見られた。

これらを通して、発話・思考動詞に係る場合の「コウ」「ソウ」の文脈上に表れる機能の特徴をまとめると、単純に内容を承ける文法的機能を持つ「ソウ」は先行内容をまとめる機能が弱い。そのため、先行文脈をそのまま後続内容につなぐ場合が多く、内容の切れ目に用いられることが少ない。それに対して、強調的に指示する機能を持つ「コウ」は文脈展開上の切れ目に用いられることが多い。文脈が継続的なところに用いる場合でも、まとまりをつける表現効果があるため、継起的な内容であっても小さな切れ目を生じることがあると考えられる。

【注】

- (1) 「コウ」「ソウ」は動詞に係って、実質的な副詞として用いられる場合もあれば、後続のものと結合して接続詞や連体詞として用いられる場合もある。本章の調査資料（注 3 を参照）の地の文における文脈指示の「コウ」「ソウ」について、発話・思考動詞以外を含めたすべての用法を p. 159 の【資料 7】に示したが、そのうち、実質的な副詞として、発話・思考に係る場合の「コウ」「ソウ」が最も多く見られる。この調査によれば、「コウ」「ソウ」が動詞に係って副詞として機能する場合に、「コウ」では 73%、「ソウ」では 90%が発話・思考動詞に係る。つまり、発話・思考動詞が全体を占める比率が非常に高いのである。
- (2) 地の文の「コウ」「ソウ」の後続発話・思考動詞は、「コウ」は総計 160 例で、上位の 5 語は「いう（「いう」を含む「いいつける）」など（134 例）、「思う」（10 例）、「呟く」（2 例）、「訊く」（2 例）、「怒鳴る」（2 例）であるのに対して、「ソウ」は総計 764 例で、上位の 5 語は「いう」（509 例）、「思う」（146 例）、「考える」（19 例）、「答える」（7 例）、「信じる」（6 例）である。
- (3) 調査資料は以下の通りである（総計 30 編、約 228 万字）。
 1. 「こころ」（夏目漱石、1914 年）、2. 「山椒大夫」（森鷗外、1915 年）、3. 「高瀬舟」（森鷗外、1916 年 1 月）、4. 「鼻」（芥川龍之介、1916 年 2 月）、5. 「芋粥」（芥川龍之介、1916 年 9 月）、6. 「赤西蠣太」（志賀直哉、1918 年 9 月）、7. 「小僧の神様」（志賀直哉、1920 年 1 月）、8. 「売色鴨南蛮」（泉鏡花、1920 年）、9. 「痴人の愛」（谷崎潤一郎、1924）、「ある心の風景」（梶井基次郎、1926 年）、11. 「冬の日」（梶井基次郎、1927 年）、12. 「雪国」（川端康成、1935 年）、13. 「路傍の石」（山本有三、1937）、「ビルマの豎琴」（竹山道

雄、1947年)、15. 「二十四の瞳」(壺井栄、1952年)、16. 「あすなろ物語」(井上靖、1953年)、17. 「金閣寺」(三島由紀夫、1956年)、18. 「パニック」(開高健、1957年)、19. 「点と線」(松本清張、1958年2月)、20. 「不意の唾」(大江健三郎、1958年)、21. 「樹々は緑か」(吉行淳之介、1960年)、22. 「雁の寺」(水上勉、1961年3月)、23. 「初夜」(三浦哲郎、1961年11月)、24. 「砂の女」(安部公房、1962年)、25. 「山本五十六」(阿川弘之、1965年)、26. 「青春の蹉跎」(石川達三、1968年)、27. 「塩狩峠」(三浦綾子、1968年)、28. 「女武芸者」(池波正太郎、1972年)、29. 「まゆ墨の金ちゃん」(池波正太郎、1972年)、30. 「太郎物語高校編」(曾野綾子、1973年)

第二節 「コウ」「ソウ」の後続内容

—「コウ」「ソウ」が「発話動詞・思考動詞 + て」に係る場合—

1. 問題の所在

第一節では、「コウ」「ソウ」に後続する発話・思考動詞が「た。」形で文を終止する場合を考察し、「コウ」はまとめる機能を持ち、場面の転換に用いられやすいのに対し、「ソウ」は継続させる機能を持ち、場面の継続に用いられやすいことを明らかにした。本節では、「コウ」「ソウ」の後続表現の中で、ともに多く見られる「て」形で文を続ける場合（注1）を取り上げ、その「て」形以後文末までの内容を分析する。特に場面の転換性（注2）とまとめる機能を持つ「コウ」を中心に、「ソウ」と比較しながら考察したい。

「て」の場合は「た。」で文を終止する場合と違い、一文が終わっておらず続いているため、「て」以後文末までの内容は先行の発話・思考との関わりが強いと考えられる。「コウ」「ソウ」はともに、その後続表現として「て」形を持つが、「て」前後の場面のつながり方の傾向は異なっていると考えられる。たとえば、次のような例を見てみよう。

(1) 二郎は小屋に這入って二人に言った。「父母は恋しゅうても佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢いたいなら、大きゅうなる日を待つが好い」こう云って出て行った。 (森鷗外「山椒大夫」)

(2) 学生服に白い襷をかけた金子は、誰の眼にも強そうな兵隊に見えた。

「強そうね。でも余り無茶をしては駄目よ」

信子が言うと、

「大丈夫です。生れつき臆病だから、背後の方で小さくなっています」

そう言って、

「奥さん、元気で、いつまでもあの家にいて下さい。冬、よく風邪をひくでしょう。

気をつけないと不可ません」

しんみりと彼は言った。

(井上靖「あすなる物語」)

「こう云って」と「そう言っ

である。それに対して、「そう言って」の後続内容は「奥さん、～気をつけないと不可ません」という金子の発話で、「て」の前後は金子の連続的な発話であり、発話の場面が継続しているのである。

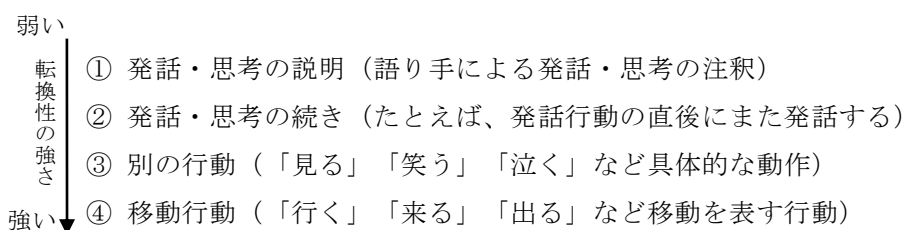
上記の例では、「コウ」の場合は、「て」の後の内容は先行発話とは場面転換が起こるが、「ソウ」の場合は場面転換が起こらず、同じ場面で発話が継起している。この2例の比較に見られるような「コウ」と「ソウ」の相違が後続表現の「て」形全体においてどの程度一般的に見られるのか検討する必要がある。

2. 「コウ」「ソウ」+「発話・思考動詞 + て」の後続内容

発話・思考動詞「て」形の後続内容を考察する際に、第五章第一節の「た。」の場合の基準に従うが、本節の「て」形の場合は、「て」から文末までの後続内容は発話・思考の行動主体以外の人物の行動や状態などが見られず、すべて発話・思考行動の主体の行動または先行発話・思考についての説明である。ただし、そのうち3例は「て」の後続の動詞にさらに「と」「が」が続く複雑な文（注3）であるが、ここでは煩雑を避け、「と」「が」より以前の内容を見る。

ここでは主体の行動や説明をより細かく観察するために動詞の性質・内容によって次の四種類に分けて分析する。

【図1 「て」の後続内容と先行の発話・思考行動との場面の転換性】



上記の四種類はいずれも先行の発話・思考についての説明あるいはその発話・思考の主体の行動である。①は発話・思考内容についての説明であるため、先行の発話・思考の場面が停止している。②③④は発話・思考に継起する行動を表す内容である。②と③の継起的な行動は同じ場面で行われるものであるが、②は発話・思考の連続で、③は別の具体的な行動によって次の行動が展開し、やや転換性が見られる。ただし、発話・思考の直後の行動なので、大きな転換がない。それらに対し、④は移動行動であるため、場所が変わり、それによって場面転換も発生すると考えられる。すなわち、これらは①から④に近づくに

つれて、場面転換の強さが高くなると考えられる。

上記の分類をもとに、発話・思考動詞「て」形の後続内容を調べると、以下の【表 1】のような結果となる。

【表 1 「て」形で文が続く場合の後続内容】

	①発話・思考の説明	②発話・思考の続き	③別の行動	④移動行動	合計
コウ	6(12%)	1(2%)	22(43%)	22(43%)	51(100%)
ソウ	38(18%)	26(12%)	130(61%)	20(9%)	214(100%)

【表 1】に見られるように、「ソウ」において、最も多いのは「別の行動」の場合（130例）で、「発話・思考の続き」（26例）と合わせて、全体の73%を占めている。この二つの場合はともに行動の継起を表しており、「ソウ」は行動の継起が後続しやすいことが分かる。また、「発話・思考の説明」は38例（18%）で、「移動行動」は20例（9%）のみである。要するに、「ソウ」の後続内容は、同じ場面にある行動の継起または発話・思考についての説明を表すものが多い。一方、「コウ」において、最も多いのは「移動行動」と「別の行動」の場合で、両者とも22例で、それぞれ全体の43%を占めている。前者は「出る」「行く」など移動行動によって場所が変わり、場面転換が発生しやすい場合で、後者は行動が継起する場合であり、「コウ」は場面の転換や行動の継起が後続しやすい傾向が見られる。

以下は発話・思考動詞「て」形の後続内容を種類ごとに具体的に分析し、「コウ」と「ソウ」が場面転換においてどのように異なるのかを検討していく。

2.1 「発話・思考の説明」である場合

発話・思考行動の直後に、その発話・思考についての説明や注釈が見られる場合である。この場合、「ソウ」は38例（18%）、「コウ」は6例（12%）で、比率から見ればあまり差がない。しかし、内容上から両者の異なるところがうかがえる。

(3) ある土曜日の午後、信夫は隆士に誘われた。隆士と歩くのは、信夫は好きだった。

だが、このごろは花見も祭りも格別楽しくはなくなった。

「勉強があるから」

信夫はそういってことわった。

「ふむ」

隆士の顔は西郷さんのようだと信夫は思う。目だけがいつも笑っていて、隆士には平気で甘えて行けるような気がする。(三浦綾子「塩狩峠」)

信夫の「そうって」の発話内容は先行の「勉強があるから」であり、隆士の誘いを断わる意味の内容である。直後の「ことわった」は発話以外の別の新たな行動ではなく、先行の発話の趣旨を説明したものである。このような場合は、場面転換が見られず、発話・思考の場面が停止している。

一方、「コウ」の場合の例を見てみよう。

(4)私とはとくの昔から先生の何もしていないという事を父にも母にも告げたとつもりでいた。そうして父はたしかにそれを記憶しているはずであった。

「何もしていないというのは、またどういう訳かね。お前がそれほど尊敬する位な人なら何かやっついそうなものだがね」

父はこうって、私を諷した。父の考えでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相当の地位を得て働いている。必竟やくざだから遊んでいるのだと結論しているらしかった。(夏目漱石「こころ」)

父の「こうって」の発話内容は先行の「何もしていないというのは、～何かやっついそうなものだがね」で、直後の「諷した」はその発話内容の要約的な説明である。上記の(3)の「そう」と(4)の「こう」はいずれも先行発話についての説明であるが、どのような違いがあるのだろうか。

金水・田窪(1990)は、指示語の現場指示用法と文脈指示用法を統一的に分析する理論的枠組みとして談話管理理論を提唱し、その観点から「コ」と「ソ」の違いを論じている。文脈指示のコは小説において、「視点遊離のコ」として捉えられる。「視点遊離のコ」とは「小説や体験談などで」、「現場や聞き手などに影響されることなく、話し手の視点を自由に話中の登場人物に近づけることができる。つまり、話の登場人物の目からみて近いと感じられるものをコで指し示す」用法である。金水・田窪(1990)がこの用法は「現場指示の拡張」と述べているように、登場人物の視点から見た現場を指すものであり、強い「現場性」を持つと考えられる。また、文脈指示のコについて、金水・田窪(1992)では、「対象の文脈上での近さ、卓立性等の点で自ずから指示対象に制約のあることは当然予測される」と述べ、文脈指示の「コ」が卓立性を有することを主張している。この理論にしたがえば、ここの「こう」は父の発話を現場的に捉え、かつ発話そのものについて卓立させ強調していると考えられる。これをもし「そう」と置き換えれば、強調的な効果がなくなる

と思われる。

発話・思考の説明である場合に、「コウ」(12%)と「ソウ」(18%)の比率にはあまり差がないようであるが、「コウ」の(4)の「諷する」以外の5例は「こうって」の直後が「論じる」「主張する」「力説する」「ゆずらない」「たのむ」であり、いずれも「ビルマの豎琴」にあるものである。この小説では、「ソウ」に比して、「コウ」の多用が目立っており、しかも、「コウ」に発話動詞が後続する例が圧倒的に多く、全体から見れば、発話を「コウ」でまとめる傾向が強い(注4)。本作は主人公の体験談的な内容であるため、語り手が「わたし」という主人公のそばに寄り添って主人公と共有した視点で発話の場面を捉えていると考えられる。そのため、発話の場面を現場性の強い「コウ」で解説的に捉えるのではないかと推測できる。この小説以外では、「コウ」は上記の(4)の1例のみであり、用例が極めて少ない。

「て」の後続内容が発話・思考の説明である場合は先行の発話・思考について補って説明するため、場面が停止している。この場合に、「コウ」と「ソウ」はともに用いられるが、「コウ」はより現場的な立場から発話・思考を強制的に捉えるという特徴が見られる。

2.2 「発話・思考の続き」である場合

発話の後にまた発話が継起し、思考の後にまた思考が継起する場合である。この場合、「ソウ」は26例あるのに対して、「コウ」はわずか1例のみである。

- (5) 「よろしい。今からでは、時日が相当たっているから、はたして効果があるかどうかわかりませんが、とにかく、いちおう、熱海と静岡の駅や宿を調査してみます。女ひとりの行動はあんがわかるものですよ」

三原は、そう言って、

「ほかに何かありませんか？」

「佐山は博多の丹波屋という旅館に、十五日から二十日まで一人で滞在していました。十五日は彼が東京から博多に着いた日です」

と鳥飼は、佐山が宿で電話が外からかかってくるのを待っていたこと、二十日の午後八時ごろに、佐山の宿での変名である「菅原」と名ざして女の呼び出し電話があったこと、佐山はすぐに出て行き、その晩に情死したと考えられることなどを話した。(松本清張「点と線」)

- (5)の三原は「そう言って」また「ほかに何かありませんか？」と発話した。発話の連

続である。この場合は、同一人物が連続的に発話するため、同じ場面で行われた継起的な行動である。

一方、「コウ」はわずか次の1例のみである。

(6) 一人の兵隊はしまいにはいらいらした調子でいいました。

「みな戦争で頭が変になって、神経衰弱になっている。婆さんじゃあるまいし、迷信めいたことをいって、あきらめのわるいことをくどくどくりかえすのは、もうよそう」

この人はこういって、悲しげな声をはりあげて、おこったようにいいました。

「いつまでも生きているの、死んでいるのって、それじゃ、あの身を挺して出かけていって同胞を救っていきぎよく散華した、水島に失敬だよ！ ことにあれは、脱走して坊主になってうろついているなんて、そんな卑怯な男じゃない！」

(竹山道雄「ビルマの豎琴」)

「こういって」の後には「いいました」があって、また発話して、(5)と同様に同じ場面にある継起的な発話である。ただし、(6)は「ビルマの豎琴」にある例で、3.1で既に述べたように、語り手が主人公と同じ視点で発話の場面を現場的に捉えていると考えられるため、現場性の強い「コウ」を用いていると考えられる。この現場的・解説的に捉えるという点において、(5)の「そう」との相違が見られる。

このように、後続内容が発話・思考の続きである場合は、先行の場面が継続しており、「ソウ」がより多く用いられるのに対し、「コウ」はほとんど用いられないのである。

2.3 「別の行動」である場合

発話・思考行動の発生後に「笑う」「見る」「泣く」など具体的な動作が継起する場合がある。この場合、「ソウ」は130例(61%)で、「コウ」は22例(43%)であり、両者とも高い比率を占めている。

(7) 「オシゲ、金あるか」

男はいきなり言った。

「あらへん」

オシゲが答えると、男は、

「持って行けよ」

そう言って、ポケットから何枚かの紙幣を取り出した。オシゲは近寄って行くと、

「おおきに」

と言って、それを受取って、鮎太のところへ戻って来た。

(井上靖「あすなる物語」)

男は「そう言って」の直後に「紙幣を取り出す」動作が行われ、前後の行動は同一人物の継起的な行動である。後続の行動が先行の発話・思考と同じ場面で行われており、場面転換が見られないが、次の行動への展開が見られる。

次に「コウ」の例を見てみよう。

- (8) 厨子王は云った。「わたくしは陸奥椽正氏と云うものの子でございます。父は十二年前に筑紫の安楽寺へ往ったきり、帰らぬそうでございます。母はその年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信夫郡に住むことになりました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなったので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人買に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ売られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持っている守本尊はこの地蔵様でございます」こう云って守本尊を出して見せた。

師実は仏像を手にとって、先ず額に当てるようにして礼をした。それから面背を打ち返し打ち返し、丁寧に見て云った。
(森鷗外「山椒大夫」)

厨子王は「こう云って」の後に、「守本尊を出して見せた」とある。発話して次の行動を取る。この場合は(7)の「ソウ」の場合と似ており、発話・思考行動の次に同一人物の別の行動が行われ、継起的な行動である。ただし、3.1で既に述べたように、(7)の「ソウ」に対して、(8)の「コウ」は厨子王の発話(行動と内容)を現場の人物(師実)の視点から現場的・解説的に捉えられたものである。

その後続の行動として、「コウ」と「ソウ」はいずれも「見る」「笑う」のような顔の動作と「取り出す」「手を当てる」のような手の動作に関わる例が多く(注5)、同じ場面で発話・思考に継起する行動が表されるのである。ただし、別の具体的な行動によって次の行動に展開する点に、やや転換性が認められる。

2.4 「移動行動」である場合

発話・思考の後に、「出る」「行く」のような場面転換を伴う移動行動が後続する場合、「コウ」は22例で全体の43%を占めているのに対し、「ソウ」は20例で、全体のわずか9%である。

移動行動の方向によって、先行の発話・思考の場面との場面転換の仕方も異なると考えられる。先行の発話・思考の場面から移動する方向によって移動行動を次の a b c の三種類に分ける。

- a 人物が主人公のいた場所からの遠ざかり：「出ていく」「行ってしまう」のように、発話・思考の主体が主人公のいた場所から遠ざかる場合
- b 人物が主人公のいる場所への近付き：「来る」「近寄ってくる」のように、発話・思考の主体が主人公のいる場所に近づく場合
- c その他：「走る」「通る」のように移動行動の方向や到着が明確でない場合

この基準にしたがって、「コウ」22例、「ソウ」20例を分類すると、【表2】のような結果となる。なお、場面転換が起こる場合に改行することが多いため、参考として移動行動の後に改行して新しい段落に移るか否かについても挙げておく。

【表2 移動行動である場合の「コウ」「ソウ】*

	a		b		c	
	数量	改行	数量	改行	数量	改行
コウ	16	13	0	0	6	3
ソウ	10	9	8	4	2	1

* 【表2】の移動動詞の詳細は pp. 160-161 の【資料8】を参照。

【表2】に示したように、「コウ」において、aは16例bは0例cは6例であるのに対し、「ソウ」においては、aは10例bは8例cは2例である。つまり、「ソウ」はa b cの三種類にわたって用いられるのに対し、「コウ」はaの場合に偏っている。

また、移動行動後に改行して新しい段落に移るかということについては、aの場合に、「コウ」では16例中13例、「ソウ」では10例中9例確認でき、ともに移動行動後に改行することが多く見られる。bの場合は、「ソウ」の8例中4例が改行し、半分を占めている。cの場合は、「コウ」は6例中3例で、「ソウ」は2例中1例が改行し、ともに半分を占めている。aの場合に改行が多いことから、一般的に場面転換が起こると推測できる。一方、bとcの場合は改行が半分ぐらいであり、場面転換が起こらない場合も考えられる。

次に、「コウ」において、最も例の多いaの場合の例を挙げる。

- (9) 「私は先へ帰るから、充分食べておくれ」 こう云って客は逃げるように急ぎ足で

電車通の方へ行ってしまった。

仙吉は其処で三人前の鮎を平げた。餓え切った痩せ犬が不時の食にありついたかのように彼はががつと忽ちの間に平げてしまった。（志賀直哉「小僧の神様」）

(10) 先生は苦笑した。懐中から褄口を出して、五銭の白銅を小供の手に握らせた。

「おっかさんにそう云っとくれ。少し此所で休まして下さいって」

小供は伶俐そうな眼に笑を漲らして、首肯いて見せた。

「今斥候長になってるところなんだよ」

小供はこう断って、躑躅の間を下の方へ駆け下りて行った。犬も尻尾を高く巻いて小供の後を追い掛けた。（夏目漱石「こころ」）

(9) の客は「こう云って」その後、「逃げるように急ぎ足で電車通の方へ行ってしまった」とある。発話者である客は主人公の仙吉のいた場所から遠ざかり、移動行動によって発話の場面が終結する。その後の内容を見ると、改行して次の段落に入り、仙吉の食べる場面に移るのである。(10) の子供は「こう断って」の直後は発話の場所から「駆け下りて行った」で、主人公の一人である先生のいた場所から遠ざかることによって発話の場面が終結する。「コウ」の大部分（22 例中の 16 例）は (9) (10) の「～ていく」「～てしまう」のような場面の終結を示す移動行動と共起している。

「ソウ」においても a の場合、すなわち「～ていく」「～てしまう」の例が 10 例見られるが、「コウ」とはどのように異なるのであろうか。次の例を見てみよう。

(11) 「よう、来たな。きょうはひとつおもしろい話をしてやろう」

男がいうと、子供たちは急に浮き足だって、わあっと逃げた。

（とにかくヤソがいいわけがない）

「いやだなあ、ヤソなんて」

信夫はむずかしい顔になった。貞行と菊はだまって、やさしく信夫を見守った。

「あしたから来ますからね」

そういって、菊はその夜帰って行った。（三浦綾子「塩狩峠」）

菊は「そういって」の後に「帰って行った」であり、菊が発話してから主人公の信夫のいた場所から遠ざかるのである。次は改行して新しい段落に移り、貞行の菊についての思い出の場面に移る。この例では (9) (10) と同様に移動行動によって発話の場面が終結するが、もし「コウ」と置き換えて「こういって、菊はその夜帰って行った」となると、場面を終結する点に同じであるが、「ソウ」に比して発話に対する強調が生じる。すなわち、

「コウ」は強調性を持ち、発話を強調している点に「ソウ」との相違が見られると考えられる。

次に、「コウ」に例がなく、「ソウ」にのみ例がある b の場合の例を見てみよう。

(12) 「どうれ、相手になって進ぜよう」

そう言ったかと思うと、オシゲはズボンのポケットから拳銃を取り出し、それを空に向けた。

「よせ！」

思わず鮎太が叫ぶと、

「射ちはしないわよ」

そう言って、拳銃を両手に捧げるようにして、鮎太の方へ近寄って来た。鮎太は自分の方に真直ぐに向けられているオシゲの、半面月光に照らされている顔に思わず見惚れた。

(井上靖「あすなる物語」)

オシゲは「そう言って」の後は「鮎太の方へ近寄って来た」という移動行動である。それによって、主人公の鮎太のいる場所に近付き、オシゲと鮎太の会話の場面が継続している。このように、b の場合は、「ソウ」が「来る」「~てくる」のような主人公のいる場所に近づく例は総計 8 例であるのに対し、「コウ」はこのような例が見られない。b は、発話・思考の主体が主人公と離れた場所で発話してから近付いてくる場合であるため、その発話に近称の「コウ」が用いられにくいのであると考えられる。

上記の例から分かるように、「~てしまう」「~ていく」は明らかに場面転換を伴い、場面の終結を示している。それに対して、「~てくる」は発話・思考行動の場所とは異なる場所に近づくことを意味するが、その場所はすでに提示された場所である。そのため、場面は継続していると考えられる。このように、移動行動の方向が異なると、場面転換の仕方にも違いをもたらすのである。

以上のように、移動行動である場合、「コウ」は「~てしまう」「~ていく」のような表現が後続し、人物が発話の場所から遠ざかり、発話・思考の場面が終結する場合に用いられやすい傾向がある。それに対して、「ソウ」も発話・思考の場面が終結する場合に用いられることがあるが、【表 3】の b のように、「来る」「~てくる」のような表現を後続し、発話・思考行動がなされる前にすでに提示された場所に近付き、場面が継続する場合もある。

3. 「コウ」に見られる場面転換の傾向と「ソウ」に見られる場面継続の傾向

2.4 で見たように、「コウ」には場面転換を示す移動行動が後続しやすく、特に発話・思考の主体が主人公のいた場所から遠ざかり、場面の終結に用いられやすい傾向がある。そしてその傾向は移動行動の種類と関わっている。ところで、なぜ「コウ」には場面転換を示す移動行動が後続しやすいのだろうか。また、なぜ「ソウ」の後続内容には移動行動が少ないのだろうか。その原因は「コウ」と「ソウ」の性質にあると思われる。

金水・田窪(1990)は文脈指示について、話し手からの心理的距離に関して中和的な「ソ」に対して、近称の「コ」が明らかに文脈指示では有標であり、何らかの強調的な効果をもたらすと指摘している。ある表現が有標であるのは、その使用が特殊なものと考えられる場合であり、無標であるとは、その使用が基本的ないしは自然なものと考えられる場合である。日本語のテキストにおいては、「ソ」は使用頻度が「コ」より高く、表現の基調となりやすいため、無標の表現となりやすい。一方、「コ」は使用頻度が「ソ」より低いため、有標となりやすく、強調的な効果が生じると考えられる。

2.1 で取り上げたように、「コウ」にはその発話・思考を現場的な立場からとりたてて強調する特徴が顕著である。「コウ」はこのような有標性という性質から、その発話・思考の部分の内容にまとまりをつける機能を持ち、その部分をマーカーを付けたように目立たせる。先行内容にまとまりが生じた結果、後続内容とのつながりが相対的に弱くなり、場面転換もそこで起こりやすいのである。そのため、表現としては、「出ていく」「行ってしまおう」のような移動行動によって発話・思考の主体が遠ざかり、場面の終結が発生しやすいという特徴も見られた。それに対して、「ソウ」は無標で、ただ前後を連結し、文脈を継続させるのであり、そのため、場面が継続する場合に多く見られるのである。場面の転換に用いても、「コウ」のようにその部分の内容を強調してまとめるのではなく、前の内容と後の内容を連結するのみである。

「移動行動」以外の三つの場合については、次のようなことが考えられる。「発話・思考の説明」の場合は、場面が停止し、「発話・思考行動の続き」の場合は、発話・思考の連続で場面が継続している。これらの場合には、場面の転換がないため、「コウ」ではなく「ソウ」が多用されるのである。「別の行動」の場合には、先行の発話・思考の場面が継続しているが、別の行動が後続するため、やや転換性が見られる。この場合に、「コウ」と「ソウ」はともに多く見られるが、「コウ」の場合は先行の発話・思考をとりたてて強調し、それによって、その部分が一つのまとまりをなしている。そのため、後続の別の行動との間に切

れ目が生じる。それに対して、「ソウ」の場合は、先行の発話・思考にも後続の別の行動にも焦点を当てず、淡々と継起的な行動として叙述されるのである。

4. まとめ

本節では、小説の地の文における指示副詞「コウ」「ソウ」に発話・思考動詞「て」形が後続する場合に、「て」の直後の内容と先行の発話・思考との関わりについて考察した。

「コウ」には「移動行動」「別の行動」が後続しやすく、特に「出ていく」「行ってしまおう」のように、発話・思考の主体が遠ざかる移動行動と共起することが多い。「コウ」は場面転換ないし場面の終結と強く関わっている。一方、「ソウ」には「発話・思考の説明」「発話・思考行動の続き」「別の行動」が後続しやすい。これらの場合は、発話・思考の場面が継続しており、行動の継起、または補足的な説明が行われているのである。つまり、「コウ」は現場的に内容を取りたてて強調し、場面転換を促すのに対し、「ソウ」はそのような場面転換が少なく、行動の継起、または補足的な説明などが後続しやすく、場面継続の用例が多いと考えられる。「コウ」に見られる場面転換の傾向と「ソウ」の場面継続の傾向は、第一節の「た。」の場合について考察した結果と一致している。すなわち、文脈において、「コウ」がまとめる機能を持ち、場面転換に用いられやすいのに対し、「ソウ」は継続させる機能を持ち、場面継続に用いられやすいのである。

「コウ」は有標な表現であり、文脈においてその部分の内容にまとまりをつけ、とりたてて強調するため、後続の行動が先行の行動との間に切れ目が生じやすい。それに対して、「ソウ」は無標な表現であり、淡々と前後の内容をつなぎ、切れ目が生じにくい。そのため、前後の行動は継起的であり、先行の場面を継続させることが多いのである。

【注】

- (1) 第一節では、【表 1】に示したように、「コウ」において、最も多い場合は「た。」(64 例)で文を終止する場合で、次に多いのは「て」(51 例)で文を続ける場合である。それに対して、「ソウ」において、最も多いのは「て」の場合(214 例)で、第三位に多いのは「た。」(102 例)の場合である。このように、「コウ」と「ソウ」に後続する発話・思考動詞の形式では、おのおの「た。」「て」へ偏る傾向が見られる。
- (2) 第五章第一節で「コウ」「ソウ」が「発話・思考動詞 + た。」に係る場合を取り上げ、「た。」の後続内容が先行の発話・思考行動の場面と続くか転換するかによって、「I 同じ場面が続

く場合」と「II 別の場面が変わる場合」に分けて、「コウ」と「ソウ」の違いを考察した。

「コウ」は「た。」の後続内容が「別の場面が変わる場合」に 11 例見られ（前方照応の場合は 6 例、後方照応の場合は 5 例で総計 11 例）、「ソウ」より多く見られる。また、「同じ場面が続く場合」でも、「人物の状態」や「他者の反応行動」が多く見られ、先行の発話・思考行動とは内容的に緊密性が弱く、場面の転換性という角度から見れば、「ソウ」より強いと考えられる。

(3) この 3 例は次のようである。

1. 私はわざとそう云って、ナオミの顔を覗き込むと、彼女は癩に触ったのか、つんと済まして、あらぬ方角をじっと視つめているようでしたが、その眼の中には、明かに悲しいような、遣る瀬ないような色が浮かんでいるのでした。（谷崎潤一郎「痴人の愛」）

2. 「さ、馬になったよ」

と、そう云って、私が四つん這いになると、ナオミはどしんと背中の上へ、その十四貫二百の重みでのしかかって、手拭いの手綱を私の口に咬えさせ、

「まあ、何て云う小さなよたよた馬だろう！もっとシッカリ！ハイハイ、ドウドウ！」と叫びながら、面白そうに脚で私の腹を締めつけ、手綱をグイグイとしごきます。

（谷崎潤一郎「痴人の愛」）

3. それではじめてかの女の母はしんけんになり、こんどはよしよしといわずに、すこし早口で、

「ま、ちょっとまってくれ、だれが銭はらうんじゃ。おとつつあんにもうけてもろてからでないと、赤はじかかんならん。それよか、おかあさんがな、アルマイトよりも、もっと上等のを見つけてやる。」

そういってその場をながされたのだが、松江のためにさがしだしてくれたのが、古いむかしの柳行李のべんとう入れとわかると、松江はがっかりしてなきだした。

（壺井栄「二十四の瞳」）

上記の 3 例はいずれも「ソウ」の場合で、「A（発話・思考の主体）+ 発話・思考動詞「て」+ 行動～と、B（別の主体）～」は 2 例（2 例とも「痴人の愛」にある）、「A + 発話・思考動詞「て」+ 行動～が、B～」は 1 例（「二十四の瞳」にある）である。この 3 例については「と」/「が」までの内容を文末とする。

(4) 「ビルマの豎琴」は竹山道雄が執筆した児童向けの作品で、1947 年から 1948 年まで童話雑誌「赤とんぼ」に掲載された。小説の地の文の発話・思考動詞が後続する場合の「コウ」

と「ソウ」について、「コウ」は 26 例で、「ソウ」は 22 例である。【表 1】の全体の数からみれば、「コウ」の比率は非常に高い。また、「コウ」の場合に、「言う」のような発話動詞は 23 例で、「思う」のような思考動詞は 3 例のみであるのに対し、「ソウ」の場合に、発話動詞は 9 例で、思考動詞は 13 例である。

- (5) その後続の表現として、「ソウ」は 130 例中、「見る」「見せる」「笑う」など顔の動作に関するものは 41 例で、「両手をひろげる」「取り出す」など手の動作は 24 例である。一方、「コウ」は 22 例中、「見る」「視線を落とす」「笑う」など顔の動作は 9 例で、「手を当てる」など手の動作は 5 例である。

終章 結論と課題

1. 本研究のまとめ

本研究では、近現代の日本語小説における指示語の文章論的機能と特徴を考察してきた。具体的には、指示語の文脈展開機能の基本概念、地の文中の文脈指示の「コ」と「ソ」との文章論的機能における相違、小説ジャンル特有の語り手の視点との関わりにおける「コ」と「ソ」、会話文中の現場指示と地の文の叙述との関わりにおける「コ」と「ソ」の相違等の問題について調査結果を示し、考察を行った。

まず、第一章では、指示語の文脈展開機能を明らかにする前提として、指示語の文脈展開機能の定義およびそれを踏まえた研究の着眼点を考察した。指示語とその持ち込み内容の距離、持ち込み内容の範囲、持ち込み内容の変容、そして指示語の後続語句の四つの側面によって、指示語の文脈展開力の強さを考察することができる。これら四つの側面の前提となる持ち込み内容の分析は、文脈展開機能を考察する中心的な課題といえる。また、「コノ」「ソノ」「コウ」「ソウ」においては、後続語句を加えた分析が必要となる。

第二章では、文章という言語文脈依存のテキストにおいて、指示語の文脈指示、現場指示、観念指示、絶対指示という四種類の指示用法がいかに文脈展開に関与しているかを考察した。小説において、文脈指示は直接先行詞と照応関係を成し、必要な情報を持ち込み、文脈展開機能を果たす。一方、現場指示、観念指示と絶対指示は文脈に直接持ち込み内容が存在する場合もあれば、存在しない場合もある。直接持ち込み内容が存在しない場合に、前後の文脈の提示から背景知識が導入され、必要な情報が持ち込まれる場合がほとんどであることを明らかにした。つまり、四用法は原則としてすべて文脈展開に関与していることを確認した。

次に、個々の指示語が小説テキストにおいてどのような文章論的機能を持ち、どのように運用されるのかを解明するために、指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」、指示副詞「コウ」「ソウ」をそれぞれ具体的に検討した。

第三章第一節では、「コレ」「ソレ」について、持ち込み内容の点から違いを考察した。結果として、「ソレ」の持ち込み内容は、語句や節、文レベルの言語単位の内容で表されることの多い「物体」「行為・心情」などで、具体的なものを持ち込みやすい。それに対して、「コレ」の持ち込み内容は、文や連文レベルのような比較的長い言語単位の内容で表され

ることが多く、「事態・様相」「発話等の内容」のような比較的抽象的なものとなりやすい。このように、持ち込み内容とその長さに相関性があることが見出され、「コレ」と「ソレ」との間に使用傾向の差異が見出された。

第三章第二節・第三節では、小説ジャンル特有の語り手の視点と指示語の使用との関わり、また地の文の叙述と会話文中の現場指示との関わりについて考察した。まず、第二節では、「芋粥」において、語り手の視点に基づいて、指示語「コレ」「ソレ」がいかにかに用いられているかを考察した。その結果、「コレ」は「人物」を持ち込みやすく、語り手の認識の範囲内の事物または心理的・空間的に近い事物を、現場的・具体的に捉える場合に用いられる。それに対して、「ソレ」は「物体」「事態・様相」を持ち込みやすく、語り手が表現対象と心理的・空間的に距離を保ち、中立的・概括的に捉える場合に用いられるということを明らかにした。次に、第三節では、会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物が前後の地の文にいかにかに提示されているかを考察した。会話の叙述は地の文中に設定され、登場人物の視点から捉える現場指示の「コレ」「ソレ」の対象物は地の文中に表現される。そのため、「コレ」「ソレ」は地の文の叙述と深く関わっていると見える。会話文中の現場指示に多く見られる「コレ」の指示の対象物は前後の文脈に表現されない例も少数見られるのに対し、「ソレ」は主として先行の地の文に指示の対象物が明確に提示されるのが原則的であることが明らかになった。

第四章では、後続名詞類との関わりという観点から「コノ」と「ソノ」を代行指示と指定指示に分けて検討した。第一節では、代行指示において、後続名詞類が「時間」「場所」「抽象的名詞」である場合に、「コノ」「ソノ」はいずれも、先行文脈の広い内容を承け、後続文脈に続ける表現が多く、「その時」「この場合」のような表現で接続語に近い用法が見られた。ただし、「ソノ」は後続名詞類に、「人物」「物体」「事態・様相」のような具体的な内容の名詞をとる場合もあるのに対して、「コノ」はそのような具体的な内容の後続名詞類をとることはなく、後続名詞類と合わさってもっぱら接続語のような表現を作る点に違いが見られた。第二節では、指定指示の場合の「コノ」「ソノ」を取り上げた。指定指示は反復と言い換えの二用法に分けられるが、先行研究が指摘するように、「コノ」が先行詞の言い換えに用いられやすいことを本研究でも確認した。さらに、言い換えに用いられないとされた「ソノ」も言い換えに用いられることを明らかにした。「コノ」「ソノ」はともに先行文脈をまとめるような「ラベル貼りの言い換え」に用いられやすいという共通点が見られる。一方、反復に近い「類義型の言い換え」の場合に「ソノ」のみが用いられ、「ソ

ノ」は「カテゴリーの転換」のような転換度の強い言い換えに用いられにくいと考えられた。また、カテゴリーの性質によって言い換えの種類が異なることも明らかにした。

第五章第一節・第二節では、「コウ」「ソウ」について、特に多く見られる発話・思考動詞が後続する場合を対象として、「た。」形で文が終止する場合と「て」形で文が続く場合を中心に、後続内容との関わりを考察した。単純に内容を承ける文法的機能を持つ「ソウ」は先行内容をまとめる機能が弱い。そのため、先行内容をそのまま後続内容につなぐ場合が多く、内容の切れ目に用いられることが少ない。それに対して、強調的に指示する機能を持つ「コウ」は文脈展開上の切れ目に用いられることが多い。文脈が継続的なところに用いる場合でも、まとまりをつける表現効果があるため、切れ目を生じることが多いと考えられた。

これらの考察を通じて得られた「コ」と「ソ」の文章論的機能の違いは次のようにまとめられる。「ソ」は短い内容から長い内容まで広く持ち込み、前後の内容を中立的に連結するものであり、小説の基本的な文脈の流れを支えるものである。「コ」は長い内容を持ち込むことが多く、特定の内容を強調し、目立たせるものであり、ある部分の内容をまとめる機能を強く持つものである。また、「コ」の指示語により、小説テキストにおける語り手が登場人物の視点に寄り添い、指示対象を現場的に捉える効果が考えられた。

2. 本研究の位置づけ

本研究では、この課題をめぐって、指示語の文脈展開機能の基本的な概念を明確にした上で、幅広い小説テキストにおいて、具体的な調査を行い、データを通して系統的に指示語の文章論的機能を明らかにしようとした。また、小説ジャンル特有の語り手の視点と指示語の使用との関わり、会話文中の現場指示と地の文の叙述との関わりについても考察を行った。本研究の序論で既に述べたように、小説ジャンルにおける指示語の文章論的機能の系統的・総合的な研究は、いまだ未開拓の領域である。そうした中で、本研究をどのように位置づけることができるかについて、理論的な側面と実証的な側面の両方から確認しておく。

まず、理論的な側面において、第一章で指示語の文脈展開機能の定義とそれにかかわる側面を細かく規定することにより、その中核となる側面を明らかにした。本研究で明らかにした指示語の文脈展開機能とは、先行部分または後続部分から必要な内容を、指示語を含む文・句に持ち込み、指示語の持ち込み内容を新たな成分の中でとらえ直すことによっ

て、新しい文脈を完成させる機能である。この定義は先行研究を承けつつ、文脈展開を理解するのに重要な概念を取り出して、再検討を加え、これまで明確に規定されてこなかった指示語の文脈展開機能の定義として定めたものである。持ち込み内容の検討は今後個々の指示語を考察するうえで重要な課題となるであろう。本研究では、これに基づき、指示語の文脈展開機能にかかわる四つの側面を提示した。すなわち、持ち込み内容の範囲、指示語とその持ち込み内容との距離、持ち込み内容の変容、指示語の後続語句であり、この四つの側面によって、指示語の文脈展開力の強さを考察することができると考えられた。今後これらの細かな観点の検討が必要になるであろう。

次に、実証的な側面において、小説ジャンルにおける指示語の文章論的機能の系統的・総合的な研究の一環として、「コ」と「ソ」の相違を具体的に指摘した。

「コ」と「ソ」の相違について、佐久間（2002）が文脈指示の「コ」が広域の機能領域を強調して指し示し、大きな統括力を有するのに対し、「ソ」は統括力が相対的に弱いと指摘している。また、馬場（2006）は置き換え可能な「こうして」と「そうして」について、先行文の内容と後続文の内容が継起的である場合、両者の用法の重なりが認められるが、「こうして」の場合は結果性の意味が前面に出、「そうして」の場合は継起性の意味が前面に出るといふ違いがあると述べている。しかし、文章論的観点からの「コ」と「ソ」の系統的・具体的な考察はまだ十分ではなく、両者の具体的な相違については未解明な部分が多かった。本研究は佐久間・馬場の研究を承けて、文章論的観点から指示語「コ」と「ソ」について、具体的な知見を示すとともに、系統的な検討を試みたものである。

指示語「コ」と「ソ」には代名詞、連体詞、副詞など様々な品詞がある。それらは品詞によって異なる特徴があり、文脈展開機能の四側面でも異なる部分があるため、具体的・系統的に考察する必要がある。本研究では、品詞を分けて、代名詞「コレ」「ソレ」のほか、連体詞「コノ」「ソノ」、副詞「コウ」「ソウ」について、具体的な調査結果により、考察した。「コ」と「ソ」とは統括力が異なることが指摘されたが、その具体的な違いは本研究の指示副詞「コウ」「ソウ」の考察によって明らかになった。すなわち、「コウ」は特定の内容をまとめる機能があり、場面の転換など文脈展開上の切れ目に用いられやすいのに対し、「ソウ」は前後の内容を連結する機能のみを持ち、場面の継続に用いられやすいという点に違いが見出された。

小説テキストにおける「コ」と「ソ」は、さらに異なるところとして、以下のものが挙げられる。

- 1) 「コレ」と「ソレ」の持ち込み内容の特徴において、「コレ」は情報量が多く、長い言語単位の内容を持ち込みやすいのに対し、「ソレ」は情報量が少なく、短い言語単位の内容を持ち込みやすいという点に両者の相違が見出された。
- 2) 文脈指示の「コノ」と「ソノ」の具体的な用法において、「コノ」は、代行指示に用いられる範囲が限られており、後続名詞類と合わさってもつばら接続語のような働きのみを用いるのに対し、「ソノ」はこのような働きのみならず、代行指示に広く用いられる。また、「コノ」は転換度の強い言い換えに用いられる点にも「ソノ」との相違が見られた。
- 3) 語り手の視点との関わりにおいて、「コレ」は語り手は心理的・空間的に近い事物を、現場的・具体的に捉えるのに対して、「ソレ」は心理的・空間的に距離を保ち、中立的・概括的に捉える点に両者の相違が見られた。
- 4) 会話文中の現場指示と地の文の叙述との関わりにおいて、現場指示に多く用いられる「コレ」は対象物が前後の文脈とは関わりが少なく、自由に用いられるのに対し、「ソレ」は先行文脈を承けてから用いられる点に相違が見出された。

3. 残された課題

本研究によって、明らかになった今後の課題と研究の方向性について述べる。

まず、大きな課題として、持ち込み内容から見た「コ」と「ソ」の使用傾向差に現れる違いの解析が挙げられる。本研究の第三章と第四章で「コレ」「コノ」と「ソレ」「ソノ」とは、持ち込み内容がカテゴリーにおいて使用傾向が異なることを考察したが、十分に検討できなかった。つまり、「コ」は「人物」「事態・様相」「場所」に多く用いられるのに対し、「ソ」は「物体」「時間」に多く用いられる。しかし、その背景に働く原理についてはいまだ十分に検討できておらず、今後さらに「コ」と「ソ」の選択の基準について具体的な表現を個別に検討するとともに、文章論と文法論的観点を合わせた追究が必要である。

次に、具体的な研究課題として、指示副詞「コウ」「ソウ」を含む連体詞的表現の研究が挙げられる。小説テキストにおいて、指示副詞「コウ」「ソウ」が形式化して、連体詞的働きをする表現である「コウシタ」「ソウシタ」「コウイウ」「ソウイウ」が多く見られるが、本研究で扱うことができなかった。これらには指示副詞とは異なる性質が現れ、文章論的機能も異なると推測される。これらは指示連体詞「コノ」「ソノ」との比較を通して、どのような用法上の特徴を持つか、調査と検討を加えたい。

これらの基本的な使用原理や指示語を含む個々の表現について、総合的に考察していくことが必要であると考えられる。

参考文献

論文・著書類

- 会田貞夫・中野博之・中村幸弘編著（2004）『学校で教えてきている現代日本語の文法』
右文書院
- 相原林司（1984）『文章表現の基礎的研究』明治書院
- アラン・クルーズ（片岡宏仁訳）（2012）『言語における意味 意味論と語用論』東京電機
大学出版局
- 庵功雄（1995）「コノとソノ一文脈指示の二用法―」『日本語類義表現の文法（下）』宮島達
夫・仁田義男（編）くろしお出版
- 庵功雄（2007）『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 井手至（1952）「文脈指示語と文章」『国語国文』21（8）
- 糸井通浩（1976）「視点と語り」『表現学論考―今井文男教授還暦記念論集―』限定版 今
井文男教授還暦記念論集刊行委員会編 今井文男教授還暦記念論集刊行委員会
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 大槻文彦（1890）『語法指南』小林新兵衛
- 岡崎友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』ひつじ書房
- 片村恒雄（1984）「文章表現における指示語の機能―小説の文章を中心に―」『表現研究』
（39）
- 金岡孝（1964）「主題と構成」『講座現代語 第三巻 読解と鑑賞』明治書院
- 金水敏（1988）「日本語における心的空間と名詞句の指示について」『女子大文学 国文篇』
39（大阪女子大学国文学科）
- 金水敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3
- 金水敏・田窪行則（1992）「日本語指示詞研究史から／へ」（金水・田窪編（1992）所収）
- 金水敏・田窪行則編（1992）『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房
- 三枝令子（1998）「文脈指示の「コ」と「ソ」の使い分け」『一橋大学留学生センター紀要』
（1）
- 阪倉篤義（1975）『文章と表現』角川書店
- 佐久間鼎（1936）『現代日本語の表現と語法』厚生閣

- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法』(改訂版) 厚生閣
- 佐久間まゆみ (1988) 「文脈と段落—文段の成立をめぐって—」『日本語学』(2)
- 佐久間まゆみ等 (1999) 「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学紀要文学部』
- 佐久間まゆみ (2000) 「文章・談話における「段」の構造と機能」『早稲田大学日本語研究
教育センター紀要』13
- 佐久間まゆみ (2002) 「接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史等編『日本語文法4 複文と談
話』岩波書店
- 塩澤和子 (2007) 「文段分析の一考察(2) —指示表現「こうした」「そうした」に観察され
る統括機能—」『文藝言語研究 言語篇』(52)
- 正保勇 (1981) 「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』国立国語研究所 大蔵省印刷局
- 鈴木泰 (1992) 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』ひつじ書房
- 高崎みどり (1988) 「文章展開における“指示語句”の機能」『言語と文芸』(103)
- 高崎みどり (1990) 「ケース 3 指示表現」寺村秀夫等編『ケーススタディ日本語の文章・
談話』おうふう
- 高崎みどり (2007) 『日本語随筆テキストの諸相』ひつじ書房
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」認知科学 3 (3)
- 竹田完治 (2000) 「文章中の文脈を指示するソレとコレについて」『計量国語学』22 (4)
- 竹田完次 (2001) 「ソノとコノの指示文脈」『計量国語学』23 (2)
- 張子如・王精誠 (2010) 「基于语料库的中日指示词量化对比研究—小说中「コ・ソ・ア」系列
与“这”·“那”的对比—」『西安外国语大学学报』18 (1)
- 張子如 (2011) 「指示語の文脈展開機能」『同志社日本語研究』(15)
- 張子如 (2012a) 「小説における指示語の文脈展開への関与—「小僧の神様」を例として—」
『2012年応用日語国際学術研究会論文集』
- 張子如 (2012b) 「小説における「コレ」と「ソレ」の文脈展開機能—持ち込み内容を中心
に—」『同志社日本語研究』(16)
- 張子如 (2014a) 「小説における「コノ」「ソノ」の代行指示用法—後続名詞類との関わりを
中心に—」『同志社国文学』(80)
- 張子如 (2014b) 「会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」—地の文の叙述との関わりを
中心に—」『同志社日本語研究』(17)
- 張子如 (2014c) 「小説における指示副詞「コウ」「ソウ」の後続表現—発話動詞・思考動詞

- に係る場合—」『表現研究』(100)
- 張子如 (2015) 「「コノ」「ソノ」の指定指示用法—後続名詞類との関わりを中心に—」
『日本言語文化研究』(19)
- 堤良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』
第7巻
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』岩波書店
- 時枝誠記 (1960) 『文章研究序説』山田書院
- 長田久男 (1984) 『国語連文論』和泉書院
- 長田久男 (1995) 『国語文章論』和泉書院
- 永野賢 (1959) 「文章論の構想」『学校文法文章論』朝倉書店
- 永野賢 (1972) 『文章論詳説』朝倉書店
- 永野賢 (1986) 『文章論総説—文法論的考察—』朝倉書店
- 中村明 (2010) 「視点と文体—視点論と坪田譲治『風の中の子供—』の分析実践」『文体論
の展開—文藝への言語的アプローチ—』明治書院
- 西田隆政 (1999) 「源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法—場面起こしと場面閉じをめ
ぐって—」『文学史研究』(40)
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 複文』くろしお出版
- 土部弘 (1962) 「文章の展開形態—<文脈>と<構成>—」『国語学』51
- 馬場俊臣 (1991) 「指示語—文脈指示のコ系・ソ系の使い分けについて—」『語学文学』(29)
- 馬場俊臣 (1992) 「指示語—後方照応の類型について—」『表現研究』(55)
- 馬場俊臣 (2006) 『日本語の文接続表現—指示・接続・反復—』おうふう
- 林巨樹 (1973) 「文章論・文論と品詞」『品詞別 日本文法講座1 品詞総論』明治書院
- 林四郎 (1972) 「指示連体詞「この」「その」の働きと前後関係」『電子計算機による国語研
究 IV』国立国語研究所
- 林四郎 (1983) 「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語新講座5 運用1』朝倉書店
- 林四郎 (1998) 『文章論の基礎問題』三省堂
- 平田由美 (1986) 「会話文と地の文—文学テキストにおける表現と表記—」『人文学報』(59)
- 藤井俊博 (2004) 「物語文における指示語と視点—「羅生門」を通して—」『同志社国文学』
(61)

- 藤井俊博 (2005) 「物語テキストの視点と文末表現」『日本語学』 24(1)
- 富士谷成章 (1767) 『かざし抄』大岡山書店 (1934年再版)
- 堀口和吉 (1978a) 「指示語コ・ソ・ア考」『論集日本文学日本語 5 現代』角川書店
- 堀口和吉 (1978b) 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 (大阪外国語大学)
- 松下大三郎 (1924) 『標準日本文法』紀元社
- 宮坂和江 (1955) 「会話文と地の文」『国文学解釈と鑑賞』20(6)
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所著 秀英出版
- メイナード 泉子・K. (2006) 「指示表現の情意一語り手の視点ストラテジーとして一」『日本語科学』19
- 森田良行 (1958) 「文章論と文章法」『国語学』32
- 森田良行 (1993) 『言語活動と文章論』明治書院
- 山岡實 (2005) 『分詞句の談話分析一意識の表現技法としての考察一』英宝社
- 吉本啓 (1986) 「日本語の指示詞コソアの体系」『言語研究』90
- 劉羈 (2011) 「BCCWJの文学書籍における文脈指示詞「この」と「その」一談話の内部構造の観点から一」第三回中日言語対照学会
- 劉羈 (2015) 『談話空間における文脈指示』京都大学学術出版会
- 路玉昌 (2003) 「指示副詞コウ・ソウの文脈指示について一コウ・ソウが発話動詞・思考動詞を修飾する場合一」『吉備国際大学社会学部研究紀要』(13)
- 渡辺実 (1952) 「指示の言葉」『女子大文学』5 (大阪女子大学国文学科)
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. 安藤貞雄等訳 (1997) 『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房
- Stanzel, F. K. 前田彰一訳 (1989) 『物語の構造一「語り」の理論とテキスト分析一』岩波書店

辞書・資料類

- 『日本国語大辞典』第二版 (2000) 小学館
- 飛田良文[ほか]編 (2007) 『日本語学研究事典』明治書院
- 国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表』(増補改訂版) 大日本図書

資 料

第一章から第五章まで、各章節の考察を行う際、具体的な作品を調べ、データを収集した。本論では直接関係のある表を挙げたが、対象としたすべての例数や用例について、紙幅の関係上挙げなかったものは、ここに資料として挙げる。

下記の資料は【1】から【9】までである。

【資料1 「小僧の神様」における指示語】(第二章)

第二章で見た「小僧の神様」におけるすべての指示語を示したものである。なお、「文脈」は文脈指示、「前方」は前方照応、「後方」は後方照応、「現場」は現場指示、「絶対」は絶対指示、「観念」は観念指示の略である。

指示用法 指示系列		文脈		現場	絶対	観念	合計
		前方	後方				
コ	コレ	1	0	1	1	0	3
	コノ	1	0	0	2	0	3
	ココ	1	0	0	0	0	1
	コウ	7	0	1	0	0	8
	コンナ	2	2	0	0	0	4
	コッチ	0	0	0	2	0	2
	小計	12	2	2	5	0	21
ソ	ソレ	17*	1	0	6	0	24
	ソノ	31	0	1	1	0	33
	ソコ	8	0	0	0	0	8
	ソウ	21	0	0	0	0	21
	ソンナ	7	0	0	0	0	7
	ソッチ	1	0	0	0	0	1
	小計	85	1	1	7	0	94
ア	アレ	0	0	0	0	1	1
	アノ	0	0	0	0	13	13
	アア	0	0	0	0	1	1
	アンナ	0	0	0	0	1	1
	小計	0	0	0	0	16	16
合計		97	3	3	12	16	131

* 「ソレナラ」の砕けた言い方としての「ソンナラ」の1例を含む。

【資料2 「小僧の神様」における指示語系接続詞】（第二章）

第二章の考察で見た「小僧の神様」における7例の指示語系接続詞全体を示したものである。接続詞であるか否かの基準は『日本国語大辞典』（第二版）による。

指示語系接続詞	それから	3
	その上	1
	それじゃ	1
	それにしても	1
	それゆえ	1
	合計	7

【資料3 「清兵衛と瓢箪」における「コレ」「ソレ】（第三章第一節）

第三章第一節で見た「清兵衛と瓢箪」における指示語「コレ」「ソレ」の全体を示したものである。指示語系接続詞も含めている。なお、慣用とは「あれこれ」、「それからそれへ」のような慣用的表現で、接続詞とは「それとも」、「それにしても」のような指示語を含む指示語系接続詞である。

	地の文					会話文	合計
	文脈		慣用	接続詞	小計		
	前方	後方					
コレ	2	1	1	0	4	1	5
ソレ	18	1	1	5	25	0	25

【資料4 20編の小説における「コレ」「ソレ】（第三章第一節）

第三章第一節で見た20編の小説における指示語「コレ」「ソレ」の全体を示したものである。指示語系接続詞も含めている。

	地の文						会話文	合計
	文脈		絶対	慣用	接続詞	小計		
	前方	後方						
コレ	147	0	31	16	0	194	104	298
ソレ	557	2	14	12	123	708	226	934

【資料 5 代行指示の場合に見られる後続名詞類】(第四章第一節)

第四章第一節の考察で見た代行指示の「コノ」

「ソノ」の後続名詞類について頻度順に示した。同数の場合は五十音順とした。なお、④⑤⑥の場合は「コノ」の頻度順を優先した。

() の中には異なる表記で書かれた場合の語と数を示した。

①

人物	ソノ
親類	2
相手	1
つれ	1
母親	1
合計	5

②

物体	ソノ
目(眼)	7(4)
手	5
顔	4
頂(巔)	3(1)
足	2
いずれ	2
腕	2
かげ(陰・影)	2
頬	2
水	2
足許	1
跡	1
一羽	1
一本	1
陰影	1
印画紙	1

ウミ	1
落葉	1
音	1
ガーゼ	1
花片	1
髪	1
軀	1
川藻	1
切先	1
空気	1
下駄	1
甲	1
声	1
梢	1
下枝	1
銃床	1
小刀	1
線と蔭日向	1
血	1
乳	1
におい	1
の〔準体助詞〕	1
鼻と口髭	1
羽根	1
膝頭	1
肘	1
光	1
額	1
一つ	1
襖絵	1
ふた	1
包帯	1
眉	1
実	1
胸	1
弓	1

合計	73
----	----

③

事態・様相	ソノ
姿	2
あらわれ	1
色	1
美しさ	1
愚か	1
かえりみち	1
恰好	1
京都言葉	1
暮らしぶり	1
口上	1
原因	1
行動半径	1
婚礼	1
先	1
死	1
仔細	1
始終	1
証拠	1
人品	1
人柄	1
滑らかさ	1
弾性	1
調子	1
程度	1
償い	1
つもり	1
年なり	1
の〔準体助詞〕	1
配給	1
はかない末梢*	1
返事	1
真中心	1

名称	1
欲望	1
理由	1
歴史的意味	1
合計	37

*「はかない末梢」は作品中で、人間生活のことを指す。

④

時間	コノ	ソノ
時(とき)	23(10)	68(26)
間(あいだ)	3	7(1)
日	2	21
頃(ごろ)	2	9(2)
際	2	1
夏	1	0
翌日	1	4
夜	1	9
後(あと・ご)	0	13(4)
晩	0	7
年	0	6
時刻	0	2
瞬間	0	2
前	0	2
朝	0	1
時分	0	1
すき	0	1
ひま	0	1
夕方	0	1
合計	35	156

⑤

場所	コノ	ソノ
あたり	3	5
界限	3	1
近所	1	0

地帯	1	0
目と鼻	1	0
上（うえ）	0	11(3)
中（なか）	0	7(2)
下	0	5
傍（そば）	0	4(1)
前（まえ）	0	4(1)
内部	0	3(1)
辺（へん）	0	3(1)
後（ご）	0	2(1)
方	0	2
まわり	0	2
向（むこう）	0	2(1)
奥	0	1
位置	0	1
涯	0	1
境内	0	1
交叉路	0	1
周辺	0	1
周囲	0	1
住所	0	1
底	0	1
側	0	1
突当り	0	1
手前	0	1
所々	0	1
場	0	1
真ん中	0	1
右	0	1
右側	0	1
横	0	1
合計	9	69

⑥

抽象的名詞	コノ	ソノ
場	4	4
場合	3	1
方（ほう）	2	4(1)
あたり	1	0
通り	1	0
別	1	0
方面	1	0
外（ほか）	1	3
中（なか）	0	10(3)
為（ため）	0	6(2)
度（たび）	0	5(1)
間	0	2
結果	0	2
あと	0	1
いずれか	0	1
一端	0	1
代わり	0	1
全部	0	1
つど	0	1
どちら	0	1
程	0	1
ほとんど	0	1
割	0	1
合計	14	47

【資料6 20編の小説の地の文における「コノ」「ソノ】(第四章第一節)

第四章第一節で20編の小説の地の文における指示語「コノ」「ソノ」の全体を示したものである。指示語系接続詞も含めている。

	文脈		絶対	慣用	接続詞	合計
	前方	後方				
コノ	388	0	37	11	0	436
ソノ	928	5	9	67	24	1033

【資料7 小説の地の文における文脈指示の「コウ」「ソウ】(第五章第一節)

第五章第一節で発話・思考動詞に係る指示副詞「コウ」「ソウ」を考察する際、調査資料となる小説の地の文における文脈指示の「コウ」「ソウ」の全体を示したものである。指示副詞「コウ」「ソウ」は実質的に働く場合もあれば、形式に働く場合もある。実質的な場合、動詞を修飾したり、述語として機能したりしている。形式化した場合、「コウイウ」「ソウシタ」のように連体詞の働きをしたり、「コウシテ」「ソウシテ」のように接続詞的な働きをしたりしている。

	実質的な場合						形式化した場合						合計
	～+動詞				～+だ		小計	連体詞		接続詞的用法		小計	
	発話・思考動詞		一般動詞										
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後			
コ	110	50	75	3	3	10	251	321	3	51	0	375	626
ウ	160		78		13			324		51			
ソ	764	0	89	0	97	0	950	366	0	258	0	624	1574
ウ	764		89		97			366		258			

【資料 8 「発話・思考動詞 + て」の後続内容に見られる移動行動】（第五章第二節）

第五章第二節で指示副詞「コウ」「ソウ」が「発話・思考動詞+て」に係り、その「て」以後文末までの内容が移動行動である場合、その移動動詞の詳細を示したものである。その動詞は各移動の方向ごとに、五十音順に配列する。「遠ざかり」「近付き」「その他」はそれぞれ、発話・思考の主体が主人公のいた場所から遠ざかる場合、発話・思考の主体が主人公のいる場所へ近づく場合、移動行動の方向や到着が明確でない場合の略である。「数量」はその移動動詞のすべての数で、「改行」はその移動行動の後続内容が改行して示され、新たな段落に移る場合の数である。

移動の方向	移動行動	コウ		ソウ	
		数量	改行	数量	改行
遠ざかり	歩いていく	-	-	1	1
	(へ) 行ってしまう	2	2	2	2
	おりていく	1	1	1	1
	帰っていく	1	0	1	1
	帰ってしまう	1	1	-	-
	駆け下りていく	1	1	-	-
	崖をのぼってゆく	1	1	-	-
	かついでいく	-	-	1	1
	小屋を出る	1	1	-	-
	外へかけだす	1	1	-	-
	台所に立っていく	-	-	1	1
	出ていく	2	2	1	1
	乗っていく	1	0	-	-
	走り去る	-	-	1	0
	ひきさがる	1	1	-	-
	～へ (に) 行く	2	1	1	1
	脇へ向く	1	1	-	-
	小 計	16	13	10	9
	近付き	うちへ戻る	-	-	1
銀河に出掛ける		-	-	1	1
来る		-	-	2	1
近寄ってくる		-	-	1	0
ついてくる		-	-	1	1
～に帰る		-	-	1	1
戻ってくる		-	-	1	0
小 計		0	0	8	4
その他	歩き出す	1	0	-	-
	馬に跨る	1	0	-	-
	海に飛び込む	1	1	-	-
	表へ飛び出す	-	-	1	1
	葬列に加わる	1	0	-	-
	立ちそうにする	1	1	-	-
	中へ入る	1	1	-	-
	道を横切る	-	-	1	0
	小 計	6	3	2	1
合 計	22	16	20	14	

【資料9 使用小説テキストの作品名、著者と原著出版年】

番号	作品名	著者	原著出版年
1	清兵衛と瓢箪	志賀直哉	1913年
2	こころ	夏目漱石	1914年
3	山椒大夫	森鷗外	1915年
4	高瀬舟	森鷗外	1916年
5	鼻	芥川龍之介	1916年
6	芋粥	芥川龍之介	1916年
7	赤西蠣太	志賀直哉	1918年
8	生まれ出づる悩み	有島武郎	1918年
9	小僧の神様	志賀直哉	1920年
10	売色鴨南蛮	泉鏡花	1920年
11	痴人の愛	谷崎潤一郎	1924年
12	山科の記憶	志賀直哉	1926年
13	ある心の風景	梶井基次郎	1926年
14	冬の日	梶井基次郎	1927年
15	放浪記	林芙美子	1930年
16	銀河鉄道	宮沢賢治	1934年
17	雪国	川端康成	1935年
18	風立ちぬ	堀辰雄	1937年
19	路傍の石	山本有三	1937年
20	焼跡のイエス	石川淳	1946年
21	ビルマの豎琴	竹山道雄	1947年
22	人間失格	太宰治	1948年
23	変化雑載	石川淳	1948年
24	野火	大岡昇平	1951年
25	二十四の瞳	壺井栄	1952年
26	あすなろ物語	井上靖	1953年
27	金閣寺	三島由紀夫	1956年

28	パニック	開高健	1957年
29	裸の王様	開高健	1957年
30	点と線	松本清張	1958年
31	不意の唾	大江健三郎	1958年
32	樹々は緑か	吉行淳之介	1960年
33	流亡記	開高健	1960年
34	雁の寺	水上勉	1961年
35	初夜	三浦哲郎	1961年
36	榆家の人びと	北杜夫	1962年
37	砂の女	安部公房	1962年
38	さぶ	山本周三郎	1963年
39	越前竹人形	水上勉	1963年
40	聖少女	倉橋由美子	1965年
41	山本五十六	阿川弘之	1965年
42	黒い雨	井伏鱒二	1966年
43	華岡青洲	有吉佐和子	1966年
44	戦艦武蔵	吉村昭	1966年
45	人民は弱し 官吏は強し	星新一	1967年
46	青春の蹉跎	石川達三	1968年
47	塩狩峠	三浦綾子	1968年
48	焼土層	野坂昭如	1968年
49	ブンとフン	井上ひさし	1970年
50	花埋み	渡辺淳一	1970年
51	女芸者	池波正太郎	1972年
52	まゆ墨の金ちゃん	池波正太郎	1972年
53	芸者変転	池波正太郎	1972年
54	太郎物語高校編	曾野綾子	1973年
55	冬の旅	立原正秋	1975年
56	女社長に乾杯	赤川次郎	1981年

初出一覧

本研究の元になった論文の一覧を以下に示しておく。なお、各論文とも内容に関わる削除・加筆・修正を施した部分があるほか、全体に字句の統一を図った。

第一章

「指示語の文脈展開機能」『同志社日本語研究』(15) 2011.09 pp. 11-25

第二章

「小説における指示語の文脈展開への関与」『2012 年応用日本語国際シンポジウム論文集』
(台湾) 2012.08 pp. 60-70

第三章第一節

「小説における「コレ」と「ソレ」の文脈展開機能—持ち込み内容を中心に—」『同志社日本語研究』(16) 2012.09 pp. 1-13

第三章第三節

「小説の会話文における現場指示の「コレ」「ソレ」—地の文の叙述との関わりを中心に—」
『同志社日本語研究』(17) 2014.09 pp. 1-14

第四章第一節

「小説における「コノ」「ソノ」の代行指示用法—後続名詞類との関わりを中心に—」『同志社国文学』(80) 2014.03 pp. 142-153

第四章第二節

「小説における「コノ」「ソノ」の指定指示用法—後続名詞類との関わりを中心に—」『日本言語文化研究』(19) 2015.01 pp. 1-18

第五章第一節

「小説における指示副詞「コウ」「ソウ」の後続表現—発話動詞・思考動詞を修飾する場合—」『表現研究』(100) 2014.10 pp. 70-79